

フィラスティン

PLO Magazine: Filastin Biladi

びらーでい 2



中東・パレスチナ問題の情報誌

No. 15 February 1981

〈特集〉イスラエルに未来はあるか——ナフム・ゴールドマンの論文をめぐって

牟田口義郎 吉田悟郎 前田慶穂 ムラード・ベンジェイク ハビブ・ベン・ヤヒア

アラファト訪日実現に向けて 木村俊夫氏に聞く

〈座談会〉故郷喪失 李恢成 青野聰 奴田原睦明 アブドルハミード

〈新連載〉アラファト物語





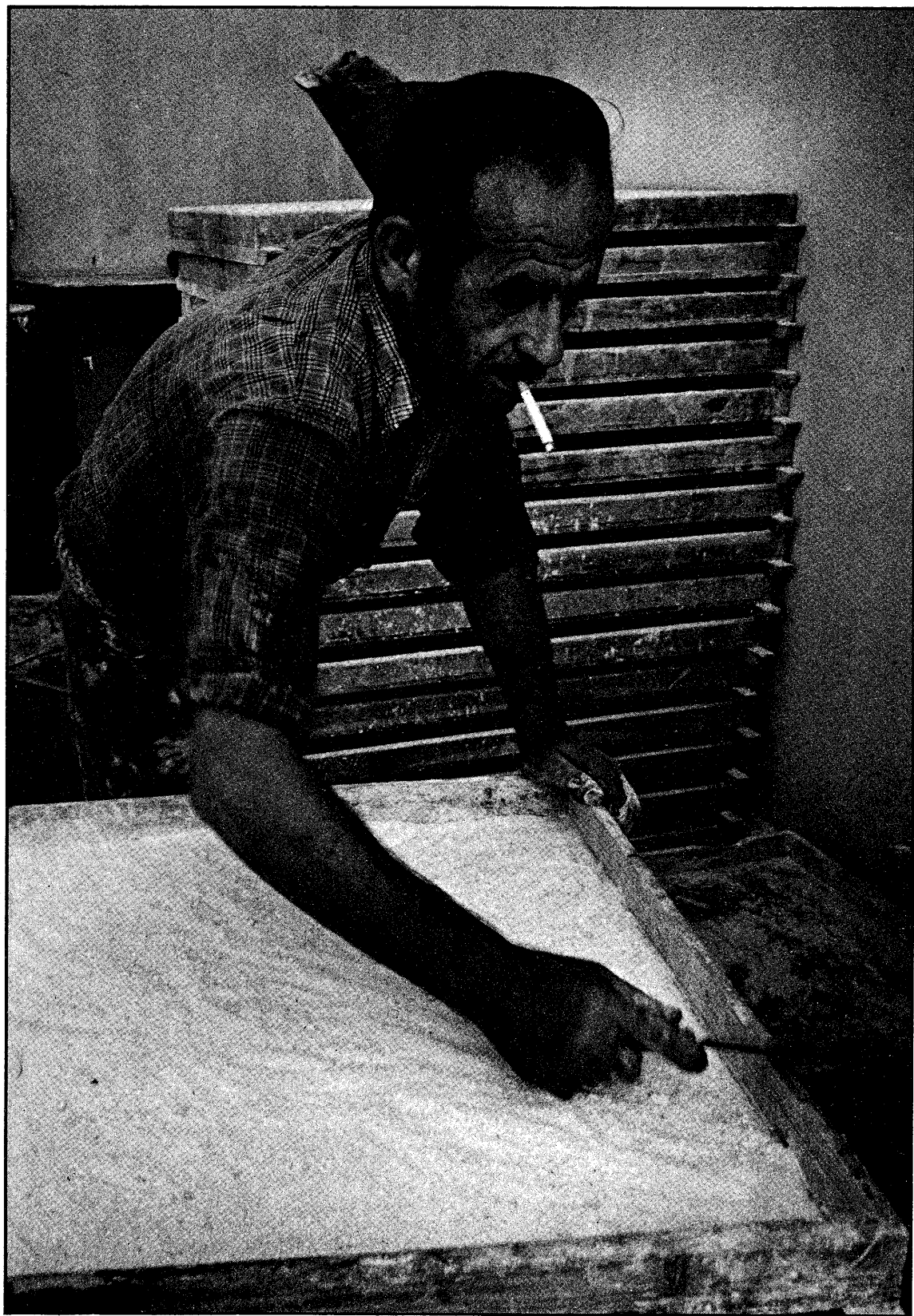
〈グラフィア特集〉
悲しみと怒りを未来の創造に
サメッド——パレスチナ人たちの生産福祉機関——
広河隆一

パレスチナ人の生活—④—

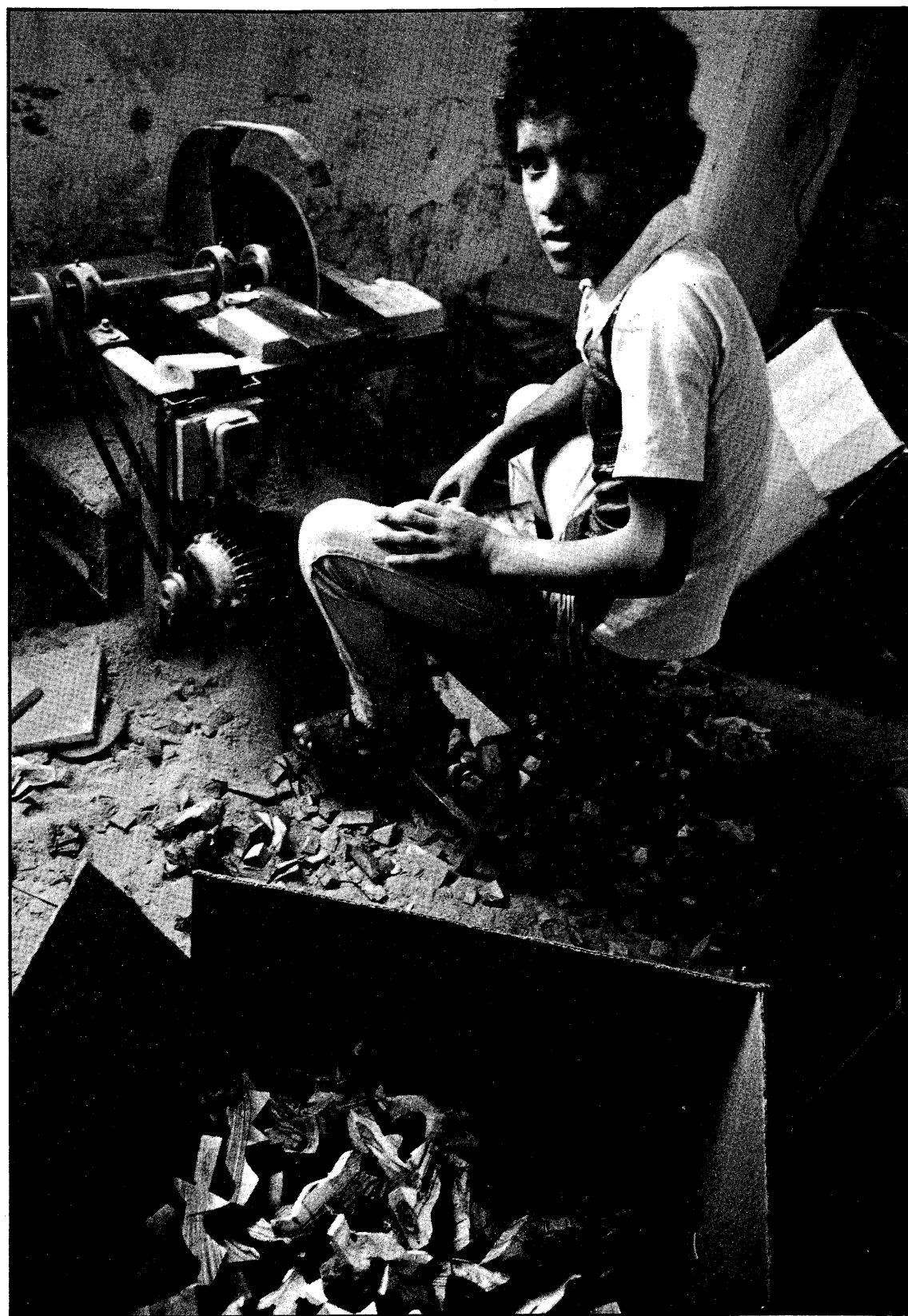
踊る



パレスチナの人びとは、民族文化の伝統を大切にしている。イスラエルのパレスチナ文化根絶やし政策が続く限り、文化を守ることは大きな解放闘争の一部と考えられる。子供たちの民族舞踊チームは、欧米、社会主義諸国を毎年訪問しているが、我が国への訪問も期待したいところである。



アラブ特有のお菓子を生産する工場にて。



パレスチナの土産品を中心としたオリーブ細工を生産する工房。ここからアラブ諸国やヨーロッパに輸出されている。



プラスチックの容器に砂糖菓子を詰める女性たち。

サメッド (SAMED) は PLO の一部問として、殉死したパレスチナ人の遺族の生活を支援する目的で設立された。主としてレバノンに約三十の生産設備を持ち、衣料品、靴、家具、民芸品、食料品などの多岐にわたる部間の生産に着手し、フィルムの現像ラボや、映画の製作も行なっている。これらの生産設備で造られた製品は、パレスチナ物産展としてヨーロッパ各国で展示されてきた。このほかスーダンやシリアには農業プラントもあり、産物の一部は輸出、一部はパレスチナ人の需要に供している。

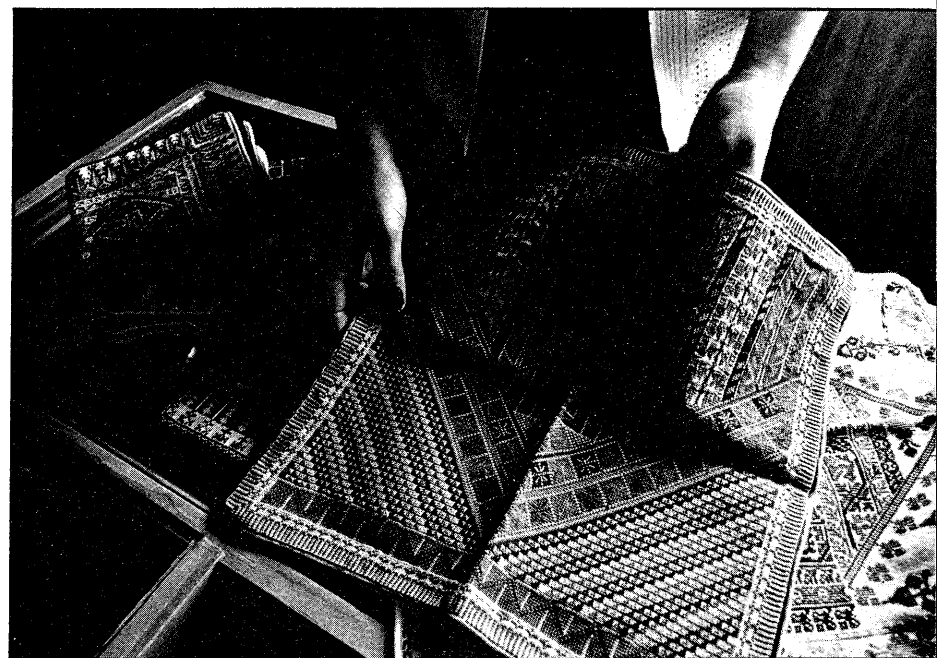
働いている人たちはすべて、肉親をたたかいの途上で失ったが、悲しみと怒りを、明るいパレスチナの創造に注いでいる。



食品工場での昼休み。



刺しゅう糸の色の選び方は、刺しゅうの色と形は、パレスチナの地域によって少しずつ異なる。



パレスチナの伝統民族衣装を刺しゅうする女性。独特な美しい衣装が次々と生産される。





〈グラビア特集〉 悲しみと怒りを未来の創造に サメッド——パレスチナ人たちの生産福祉機関 広河隆一 1

日本パレスチナ友好議員連盟会長 (元外務大臣) 木村俊夫氏に聞く
アラファト議長訪日実現に向けて 20

■NEWS&REPORTS	世界各国で高まる連帯の波	14
パレスチナ革命16周年を祝う	聖なるオリーブの樹をパレスチナに植える日	15
サダト氏の突然の覚醒	アラファト議長がメッセージ	15
優勢なのはどちらか	パレスチナわが祖国	16
奇々怪々な中東訪問	■SPECIAL REPORT	
英国が中東の舞台へ再登場	軍靴に踏みしだかれたキャンパス	18

新連載 アラファト物語 28

特集 **イスラエルに未来はあるか**

最長老シオニストの悲観論	牟田口 義郎 (朝日新聞論説委員)	32
なぜ私はイスラエルがこわいか	ナフム・ゴールドマン 訳 牟田口義郎	34
イスラエルはユダヤ問題を解決できるか?	吉田 悟郎 (中央大学法学部講師)	38
政治的シオニズム、その崩壊への道	前田 慶穂 (金沢大学教授)	42
イスラエルの中立化は可能か	ムラード・ベンシェイク (駐日アルジェリア大使)	48
五つの歪曲を見抜く力	ベン・ヤヒア (駐日チュニジア大使)	49
ナフム・ゴールドマン批判	ファトヒ・アブドルハミード (PLO駐日代表)	50

新連載 銀色の亡霊・その足跡 パレスチナ略奪物語連載第1回 プロローグ 鍵和田良輔 58

座談会 **故郷喪失—解放されるものは何か—** 62

李恢成 (作家) 青野聡 (作家) 奴田原睦明 (東京外語大講師)
ファトヒ・アブドルハミード (PLO駐日代表)

■ファイリング	揺れる中東と日本外交	25
「アラブ対立」もろに	アラファトのキス	25
PLOはパレスチナ人の「唯一の代表」	アラブ人を抑圧	26
PLOが熱烈歓迎	中東外交は新展開へ	26
「超党派」が泣く中東訪問団	基盤揺らぐベギン政権	26
イスラエル—その虚像と実像		60

祝パレスチナ革命16周年! 闘いの中から築く人民の連帯

パレスチナの与える真理と教訓	カナファーニの小説から 小中陽太郎 (作家)	72
人民のつながりで世界の未来を	複数の可能性を秘めた闘い 小田実 (作家)	74

日本を離れるにあたって セイフ・エル=ワディ・ロマヒ博士 (前アラブ首長国連邦公使) 54
——あるパレスチナ人の見た日本——

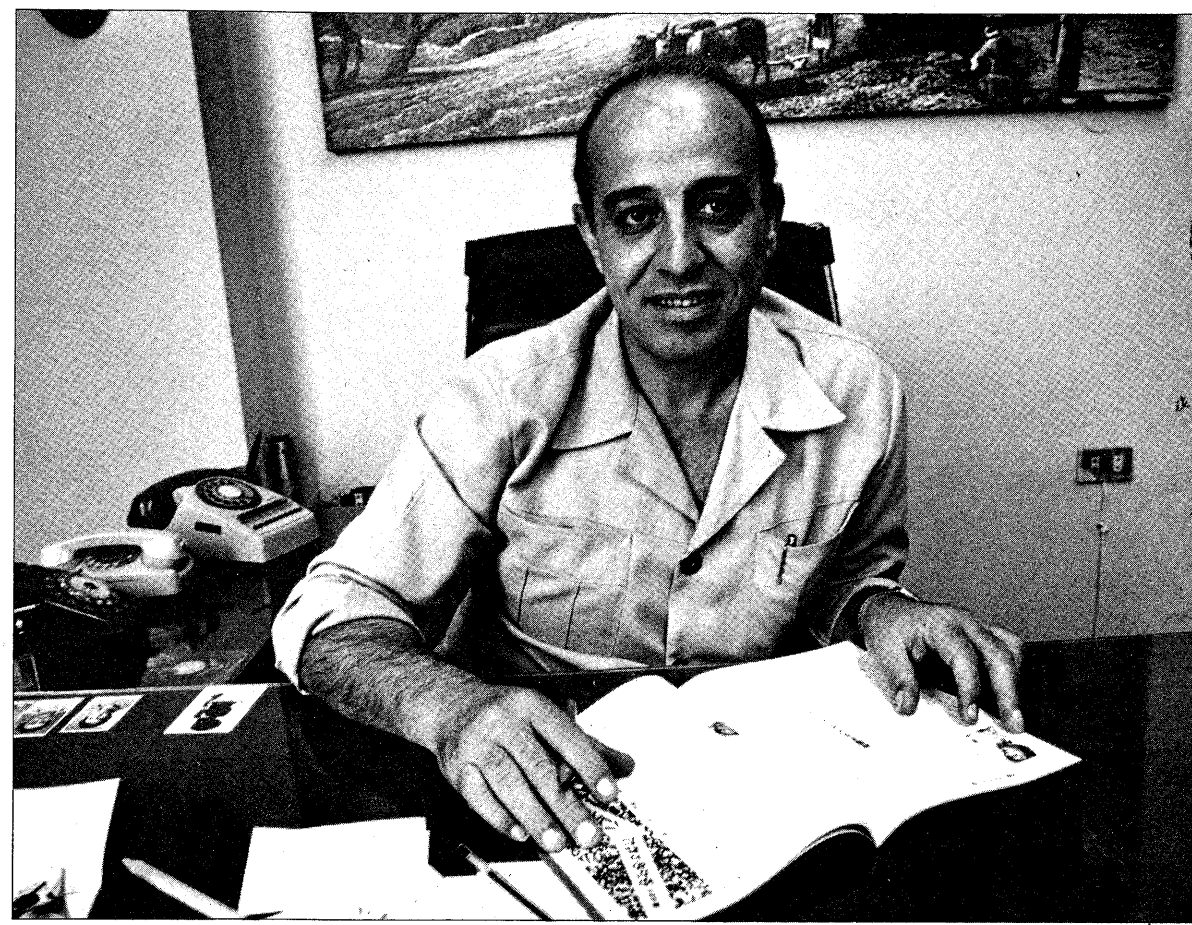
パレスチナ問題を英語で読むための事典① OCCUPIED TERRITORIES 57

VOICE OF PALESTINE: OUR VISION	アラファト議長は語る	78
	ファトヒ・アブドルハミード	79

拝啓関係各位殿 PLOから敬意をこめて 27

インタビュー	アハメッド・アブ・アラ (サメッド代表)	80
こどものページ	パレスチナのこどものあそび クイズ 12のまちがいさがし	52

特別号/バックナンバー紹介	75	
読者の声	77	パレスチナ人の生活④ 踊る 表2
書籍ニュース	76	語録 H・G、ウェルズ 表3
編集部より	61	詩 不変の愛ゆえに タウフィック・サヤード 表4



サメッド代表のアブ・アラ氏



木工場の製品

奇々怪々な中東訪問

「PLOの役割はゼロだ」と断言したキッシンジャー氏が中東を訪問したが、その目的は、謎につつまれたまま、レーガン新大統領に何らかの計画や提案をとりつけるのは自分しかないというアラブ側に売り込み、レーガン政権にも、アラブとのパイ役を買って出ようとした。

ヨーロッパ諸国、とりわけECがすすめている中東和平の新たな動きを彼はこびびり批判し、同時にソ連の進出を牽制し、アメリカのカサのもとにアラブイスラエル同盟を対ソ戦略として強化すべきだと声を大にして宣伝した。

レーガンの対中東政策で有力な働き手となれることを誇示しようとしたが、いかにせん、ヨルダンからは拒否され、サウジアラビアから冷たくあしらわれてしまった。レーガンの有力な側近も、キッシンジャーの二枚舌を見ぬき、アレン氏も、レーガン大統領の特使でもなんでもなく、あくまで私的な訪問であると説明した。他方では、エジプトのキッシンジャーのやり方を知っている元外相などは、いま執筆中の中東問題に関する彼の著書の中で自分のイメージアップをはかり、自分の役割を大書するのが訪問のねらいであるとすら論評した。はたして、往復外交で主役を果たしたと信じているキッシンジャーの奇々怪々な中東訪問のねらいは何だったのだ。彼自身が、穏そうとしても、ねらいは見すかされると言わべきか。



キッシンジャー

ウジアラビアから冷たくあしらわれてしまった。レーガンの有力な側近も、キッシンジャーの二枚舌を見ぬき、アレン氏も、レーガン大統領の特使でもなんでもなく、あくまで私的な訪問であると説明した。他方では、エジプトのキッシンジャーのやり方を知っている元外相などは、いま執筆中の中東問題に関する彼の著書の中で自分のイメージアップをはかり、自分の役割を大書するのが訪問のねらいであるとすら論評した。はたして、往復外交で主役を果たしたと信じているキッシンジャーの奇々怪々な中東訪問のねらいは何だったのだ。彼自身が、穏そうとしても、ねらいは見すかされると言わべきか。

英国が中東の舞台へ再登場

イギリスのカーリントン外相がPLOについて明解な態度をうち出したが、これはイギリスが中東政治の舞台から退いてから初めてのことと言える。エジプト政府の首脳との会談の中で、同外相は、「アラファト議長とも会見する用意がある」と断言したのだ。ケニヤッタ(ケニヤ)・ニエレレ(タンザニア)、マカリオス(シリア)などの大統領をはじめ、最近ではムカベ(ジンバブエ)首相とも会見して、その主張に耳を傾けてきたのだから、アラファト議長とも当然のことながら会見すべきとの態度を表明したのである。この発言を伝えた西側の報道機関は、ほとんどなかった。唯ひとつ「オプザーバー」誌だけが、ロバート・ステイブソン特派員の報告の中でこれを報じた。フランス政府の対中東接近をこの発言によって牽制しようとしたかどうかは別として、パレスチナ問題をつくりだした張本人としてのイギリスがその歴史的な犯罪者としての悪しき汚名を返上しようとして中東とアラブ世界に再登場する明らかなき兆と見るべきだろう。

ほとんどなかった。唯ひとつ「オプザーバー」誌だけが、ロバート・ステイブソン特派員の報告の中でこれを報じた。フランス政府の対中東接近をこの発言によって牽制しようとしたかどうかは別として、パレスチナ問題をつくりだした張本人としてのイギリスがその歴史的な犯罪者としての悪しき汚名を返上しようとして中東とアラブ世界に再登場する明らかなき兆と見るべきだろう。

サダト氏の突然の覚醒

エジプトのサダト大統領が最近になってようやくPLOをパレスチナ人民の代表として承認するようになったようだ。キャンブ・デービッド合意に調印した時には、サダト氏の頭の中には、PLOを無視する意図しかなかった。少なくとも自分がパレスチナ人たちの代弁者となつて交渉をすすめるのだという気持ちしかなかったであろう。その点では、サダト氏は「あはよPLO」と言ったフレイジンスキーと「PLOの役割はゼロだ」と断言したキッシンジャーの合唱に和したものであった。

優勢なのはどちらか

PL Oの存在とその役割に、いま突如として気がついたサダト大統領。その理由はどこにあるのだろうか。それは、カ

ター体制の崩壊か、あるいはベギン政権の動揺か。落ちめの時に真実が見えるものだと言われるが、サダト氏がPLO

レーガン新大統領の就任前に彼に会うためにアメリカを訪問したベギンは、むべなく断わられてしまった。新政権におどかしをかけて地位の回復をはかろうとねらったが、効を奏しなかった。アメリカ新政権はベギンを見かきり、労働党政権の再登場を予測して、ベレス党首が首相になることを期待している。

かつてラビン政権が一九七六年に崩壊に追いこまれた発端はアメリカによってつづられた。つまり、ラビン夫人の隠し預金口座があることをあばいたのはアメリカであった。いわゆる外貨法違反発覚事件である。今回レーガン新大統領がベギンに冷淡な態度を取ったのも、ベギンに、これ以上の地位回復の機会を与えないとするレーガン新政権の判断が働いたためであろう。

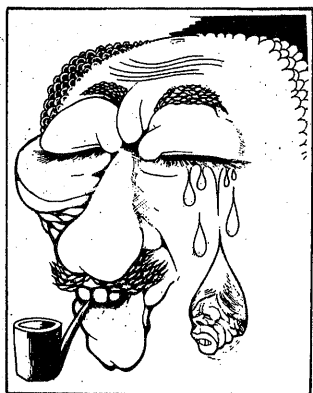
こうした動きを見ると、果たしてイスラエルの方向を決めるために力をもっているのは、アメリカ内部のシオニスト・ロビーなのか、それともアメリカ政府なのかという問いが当然出されてくるであ

の真実に目覚めたというの、彼もまたカーターとベギンについて崩壊しつつあるためなのか。

ろう。かつて一九五六年に、アイゼンハワー(元米大統領)が当時のベングリオン(イスラエル首相)にシナイ半島から撤退を命じた時、ベングリオンはクネセツト(イスラエル議会)で泣きくずれたことを忘れてはならないであろう。

にもかかわらず、アメリカのイスラエル・ロビーが依然として大きな力をもっていることを印象づけようとする動きはあつた。レーガン政権の中東政策を語る場合にも、それを前提にした論議がなされている。それは、アメリカ政権の側に、自分たちはイスラエルの脅迫に屈するほど、か弱い、純真な政府であり、パレスチナ人たちの虐殺などの一切の戦争犯罪も、イスラエルがやっていることであり、自分たちは全く手を汚していないと責任を逃れるためのポーズに過ぎない。

どちらの手がどれだけ汚れているかは別としても、優勢な手をもっているのは、まきれもなくアメリカ政権である。(A・タハリール)



サダト

アラファト議長東独を公式訪問

アラファト議長は、ドイツ民主共和国評議会のホーネッカー議長を招き、昨年十二月下旬に東ドイツを訪問し、同十二月二十九日にはホーネッカー議長と会談。

三時間にわたる会談では、PLOと東ドイツの協力関係などをはじめ東ドイツ政府と人民がパレスチナの大義への支援をどのように強めてゆかが話し合われた。

この会談にはPLOのカドゥミ政治局長、アブ・メイザー公式スポークスマン、カメルPLO駐ベルリン代表らが同席した。

また同日には東ドイツ駐在のアラブ各国大使と会見し、国際情勢全般と中東・アラブ世界における帝国主義の脅威について語った。

解放のために医師と薬剤師が結集

パレスチナ医師・薬剤師総同盟の第四回総会は、「レバノンとパレスチナの医師と医学の力をパレスチナとアラブの解放のために」をスローガンに開かれた。総会では、重大な情勢のもとでパレスチナ解放の事業にあらゆる分野で更に積極的に参加するようよびかけたPLO指導部のアピールにこたえて、医学の分野でいかに解放のために貢献すべきかを中心に討議が行なわれ、新しい方針

が採択され、コミュニケが発表された。

総会は、アラファト議長、パレスチナ解放人民戦線のハバシユ書記長、イスラエル占領下のパレスチナ同胞へのメッセージをおくり、決意を表明した。またフアタハ(パレスチナ民族解放運動)中東委員会からは第四回総会に電報が送られた。また総会では次の役員が選出された。

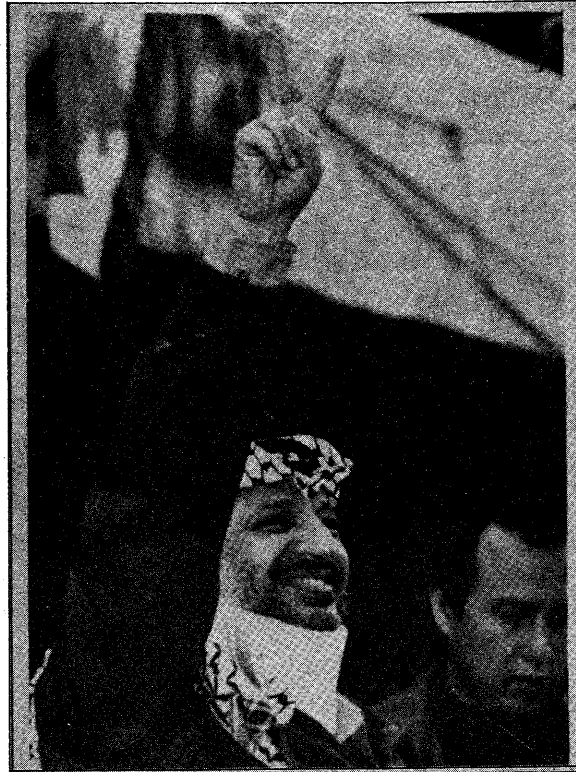
- 議長 II フアトヒ・アラファト、副議長 II サミ・クアンデル、事務局長 II アズリ・アルガシ、国際部長 II アムジャド・アルマシリ、研究部長 II アデルマジド・タイエーハ、財政部長 II ムハマド・アルハタイブ、医学部長 II アブドワラー・アブ・ハッサン、歯科部長 II ラー・ムスタファ、薬剤師部長 II アデル・カリム・ナスル

学生組織の執行部改選

このほどパレスチナ学生総同盟のイギリス・アイルランド支部の年次総会が開かれ、役員改選が行なわれた。新執行部は、フアタハ(パレスチナ民族解放運動)七名、PFLP(パレスチナ解放人民戦線)二名で構成。記念セミナーも行なわれ、ナヒル・ラムラウイPLO駐英代表イギリスを訪問中のナブルスのシャカリー市長らが来賓として出席した。

パレスチナ革命16周年を祝う ベイルートで五万人のデモ

パレスチナ解放をめざす事業は、一九六五年の一月一日を期して開始された。パレスチナ革命の十六周年を迎えるにあたり、アラファト議長は、一九八一年こそ、パレスチナの解放を実現する年にしようとの年頭メッセージを発表した。また、世界各国の国家元首、政党指導者から、パレスチナ革命十六周年を祝うメッセージが寄せられた。



一月一日には、ベイルートのアラブ大学で記念式典のパレードがおこなわれ、各界を代表する五万人のパレスチナ人たちが参加した。また、さまざまな国々から記念式典に招かれた代表、各国大使などの来賓もパレードと記念行事に参加した。



占領下のパレスチナ内外の各界諸組織も、解放運動十六周年にあたり決意をあらたにし、声明を発表した。
（なお、アラファト議長のメッセージ全文は次号に掲載の予定）



FLASH

パレスチナ問題セミナーをベイルートで開催し、そのあとイスラエル占領下のパレスチナを訪問して、占領下のたたかいを視察し、パレスチナ民衆と交流した。

在米パレスチナ人代表団も、ベイルートにPLO本部を訪問し、PLOの諸機関や研究所を視察した。

ラオス婦人代表団もPLO訪問

ラオス婦人代表団がパレスチナ婦人総同盟の招きでベイルートのPLO本部をはじめ、南部レバノン、パレスチナ人の居住地区などを訪問し、交流を深めた。

昨年十二月二十六日にベイルートに訪れた同代表団は、イスラエルの爆撃にさらされている南部レバノンのダムールやベイルート市内の解放殉難者墓園を訪れた。

仏共産党がイスラエル非難

フランス共産党は、このほどイスラエルの占領政策を非難する声明を発表した。この声明はマルシェ書記長が発表したもので、同書記長はフランス自由人権擁護委員会の議長でもある。

抗議声明はパリのイスラエル大使館にも提出された。「ユマニテ」紙は、このほど同紙の編集長をイスラエル占領下のパレスチナに派遣し、何度か特集を組んできた。

FLASH

UNRWAの学校閉鎖に抗議

パレスチナ教師総連合レバノン支部の第四回総会がこのほどベイルートで開かれたが、最も大きな話題となったのは国連パレスチナ難民救済事業（UNRWA）の教育部長が最近に行なった発言である。「財政難のためシリア、レバノン、ヨルダンにある国連の学校の一部を一九八一年三月までに閉鎖する」という発言は財政難を口実にした脅迫であるとして、もし財政難が事実なら、その解決にあたるのがUNRWA全体であり、パレスチナ人民が負担すべきものではないと総会のコミニケは明らかにしている。

ベトナムの作家と交流

ベトナム作家同盟と同ジャーナリスト同盟の招きで昨年十二月下旬にベトナム社会主義共和国を訪問したパレスチナ作家・ジャーナリスト総同盟代表団は、ベトナム作家同盟およびジャーナリスト同盟と交流し、更に文化省の幹部らと一連の会談をもった。

米代表団のPLO訪問相次ぐ

パレスチナ革命記念祝賀行事に招待されたアメリカの大学教授代表団（ポール・リベラ団長、二十六名）は一月一日の記念日を中心にベイルートのPLO本部を訪問し、さらに

世界各国で高まる連帯の波

第三回「国連パレスチナ連帯デー」

第三回の「国連パレスチナ人民連帯国際デー」（11月29日、以下「国連パレスチナ連帯デー」）には全世界で大衆集会、シンポジウムなど各種の記念行事がおこなわれた。ニューヨークの国連本部ではパレスチナ特別委員会の主催により公式記念行事が行なわれた（11月28日）。またエルサレム写真展が国連本部で開かれ、PLOのカドゥミ政治局長をはじめ各国の国連大使が出席した（12月3日）。

パリでは五万人の連帯デモが行なわれ、ワシントンでも在米のアラブ、パレスチナ人をはじめアメリカ市民も参加して連帯デモがくりひろげられた。

このほかモスクワ、プラーハ、ベルリン（11月27日）、ニューデリー、ハバナ、東京その他の諸都市でも連帯集会が開かれた。



ワシントンのパレスチナ連帯デモ

のバレスチナの現状を語った（11月28日）。ベイルートでは、「パレスチナ・アラブ人民連帯国際集会が開かれ、各国から代表が参加した。チュニスでは、チュニジア議会在全世界の議会在パレスチナとの連帯を訴えたアビールを發表した。さらにベイルートではアラブ大学で大衆集会が開かれ、アラファト議長が演説した。この集会には、レバノン民族解放運動の指導者をはじめ、国連、南アフリカ人民会議、ポルトガル、キューバなどの代表も参加した。主催はアラブ人民会

のアラファト議長は、「パレスチナのたかいは全世界の良心的な勢力の支持を受けている。われわれは歴史の流を変え、ることのできるような強力なアラブの地歩をかためるためにたたかっている。しかし、この数日の動きは、戦略的にもきわめて重要な分水嶺に直面したことを示した。今後の数日間には、これまでになく危機的なものとなるであろう。従って、われわれは、もう一度、われわれの分析と判断が正しかったか否かを点検しなけ

ればならない。だが、いかなる状況にあっても、われわれがたたかたいを弱めたり、ひるんだりしたことはなかった。これだけのことを言えるのは、イスラエル占領下のパレスチナでは、子供たちまで敵に石を投げつけたりしてたたかっているし、全土で蜂起がおこっているからである。われわれがパレスチナという場合、ナクウラからシナイまでの全パレスチナを意味する。一九四八年に占領されたパレスチナの一部の地域に住んでいる人たちがPLOがおれたらの代表だと言え、そう、まさにPLOこそみなさんの代表なのだと言いたい」

イスラエルの軍事占領下のパレスチナの西岸とガザ地区では、パレスチナ人民の代表はPLOであるとの声明を發表するとともにデモ行進を行なった。

イスラエル軍事当局は、西岸地区の各都市で開かれたデモ行進に催涙弾を使って弾圧。

デモが行なわれたのは、ラマラ、ナブルス、ヘブロン、ハルフル、ジェリコなど。ベツレヘムでは大学生たちが記念集会を開き、占領下の全大学でイスラエルの軍事占領に反対してストライキを行うようよびかけた。

西岸地区の市町村でもイスラエルの侵略と拡張主義政策に抗議して全面スト

聖なるオリーブの樹を パレスチナに植える日

アラファト議長が全世界にメッセージ

これに先きだつて、十一月二十八日にアラファト議長は、国連パレスチナ連帯デーにあたり全世界へのメッセージを發表した。

メッセージは英文で約五ページに及ぶもので、まず一九七四年にアラファト議長が国連総会に招かれて演説を行なつてからのPLOの外交面における大きな成果を回顧し、国連事務総長、国連パレスチナ特別委員会、その他の国連関連機関の努力にPLOを代表して感謝を述べることに、パレスチナ連帯デーを国連が決定して全世界に呼びかける意義をパレスチナ人民の側からどのように高く評価

主義人民共和国金日成主席、ルーマニアのチャウシスク大統領、マリ共和国トラオレ大統領、バングラデシュ人民共和国ラマン大統領、ハンガリー国家評議会議長、セイシエルズ共和国ルネ大統領。またイギリス労働党中東委員会、ドイツ民主婦人連盟など各国の諸団体からも連帯のメッセージがアラファト議長に寄せられた。さらに各国のPLO大使館、代表部、代表事務所などに連帯メッセージが寄せられた。

アラファト議長は、「オリーブの一枝をはぎとろうとするあらゆる陰謀があるにもかかわらず、それをわれわれの手から奪いとせまいとの約束を必ずや果たしてゆく。われわれは、たたかいの統と人民の血で、このオリーブを守つてゆく。平和の大地パレスチナに、この聖なるオリーブの樹をともに植える日が近づいていることを信じて疑わない」とメッセージを結んでいる。

アラファト議長は、「パレスチナ問題が中東和平の核心をなす本質的な問題として全世界の関心を集めてきているにもかかわらず、キャンプ・デービッドの陰謀をはじめアメリカに支援されたイスラエルがパレスチナ人民の存在を根絶するまで占領と侵略と拡張政策を続けてきているため平和のみならず、パレスチナ人民の民族自決の道がはばまれて、このことを事実をあげて述べている。しかも、こうした緊張の高まりの原因がアメリカの中東政策にあることを再度にわたり指摘し、イスラエルが国連決議を全く遵守しようとしないうち、そ

た戦争勢力に支えられているためであり、これこそ全世界の政府と人民の目の前で国連の重要性を低下させようとするイスラエルの企図にほかならないと指摘している。

最後にアラファト議長は、「オリーブの一枝をはぎとろうとするあらゆる陰謀があるにもかかわらず、それをわれわれの手から奪いとせまいとの約束を必ずや果たしてゆく。われわれは、たたかいの統と人民の血で、このオリーブを守つてゆく。平和の大地パレスチナに、この聖なるオリーブの樹をともに植える日が近づいていることを信じて疑わない」とメッセージを結んでいる。

アラファト議長がメッセージ

占領下のパレスチナ民衆へ

シオニストの弾圧とテロのなかで、あくまでもたたかいていくことをイスラエル占領下のパレスチナの同胞に呼びかけたアラファト議長はメッセージが国連パレスチナ連帯デーに出された。

メッセージのなかでアラファト議長は、「占領と弾圧機構に反対して決起した皆さんの蜂起と英雄的なたたかいを誇りと信頼をもって見守ってきた。祖国パレスチナの全域にわたるあなた方の蜂起は、

国連のパレスチナ連帯デーとともに大きな高まりを見せており、パレスチナ解放のたたかいは現実を世界の世論に見事に体現したものである」として、イスラエル占領下のパレスチナの学生、教師、農民、労働者、男女の市民の一人ひとりにあいさつを送り、パレスチナ解放の勝利の日までたたかいつづけることを誓った。



ベイルートの国際会議

●何がほんとの過激か

本多公栄 ただ、日本のなかでは、PLOが過激派なんかをも行動の視野に入れるような形で動いているってことは、ちょっと僕らにもつかみきれない点もあるんですけど、そのへんはどういうふうに考えておられるのか——。

小田実 パレスチナ解放闘争自体が過激なものですよ。世界を変えなきゃいけないと思ってますからね。だから僕は、過激派とか、そういうことにこだわらないで、もういっぺん世界全体を見直す——と。日本のなかの過激派なんていって見たってしょうがないんでね。それより、われわれは逆に過激なものを必要としている、われわれ日本自体がね。

過激ということばにとらわれないで、PLOの活動自体をもっとよくつかむことですね。アラファトだってものすごく過激だ。穏健派じゃないですからね、彼は——。マルクス・レーニン主義者ではないけれども、マルクス・レーニン主義者でないから過激派ではない——という時代はすぎたわけよ。マルクス・レーニン主義者よりもマルクス・レーニン主義者じゃないほうが、いまはもっと過激だわね。(笑) そういう時代にきてるんじゃないですか？ 韓国の民主化闘争をみても、すごく過激だよ。マルクス・レーニン主義なんか関係あらへんものね、関係ないにもかかわらず過激になっている。だから、マルクス・レーニン主義に関連して考えることを、全部捨てることね、それは一つ必要じゃないかな。

まず第一に、いま、過激が必要である——と。そういうことをもっと考えたらどうですか？

僕はね、例えばPLOがたまたま日本赤軍とちょっとくらしい関係したかどうか知りませんよ。それはどうでもいい話よ。あるいは日本赤軍だって変わってるかもしれないでしょ。そういう過去の事件で全部判断しちゃいけないわけよ。刻々と情勢は変わってるんだから。変わらない奴は、みなアホよ。変わっていきますよ。そして、そのなかでやってくるのが、一番大事よね。例えば、日本の過激派といわれる日本赤軍の最近の声明をみてもね、全人民の共同戦線みたいなのをよびかけてるよ、共産党まで含めて

よびかけてるよ。彼ら自身が変わってるかもしれないでしょ、われわれは何も知らないけど。だから、そういうような大きな視野で見る必要があるんじゃないかな。僕はそういう事態だと思いますよ。

本多公栄 日本の新聞報道を見てるとね、過激派もつむむとなると、PLOは過激派一色みたいでしょ。ところが小田さんが紹介されてるなかには、ある意味ではそれに反対する考え方の人も広くつみ込んで、歴史を変えるという形に——。

小田実 うん、そうなんだよ。歴史を変えることがカギでしょう。だから、表面的なことばでとらえないほうがいいと思うんですよ。つまり、例えば、武装蜂起してパッパッとやるのが過激なのか、それとも地道に活動して大きな運動をねりあげるのが過激なのか。日本では、何かテロリズムみたいなのを「過激だ」といっている。そうじゃなくて、アラファトのほうがもっと過激かもしれない。

本多公栄 なるほど。
小田実 アラファトはいろんな外交活動なんかもやって、ここにこしながら全組織をゆり動かしている。これはもっと過激じゃないですか？ そういうふうを考える必要があるんじゃないかな。

本多公栄 いまのイランとイラクの戦いのなかで、アメリカは手出しできないけれど、アラファト議長は両方に入って話を何とかしようとしてくれるわけですね。そういうことは、どこから出てくるんでしょう。

小田実 それは、ものすごい過激な力です。すごい力ですよ。根本的に過激なことが、いま必要である、そうでないと世界は変えられない、そして変えることになかなか活路がない、ということ。

だから私は、テロリズムなんてちっども過激だとは思っていませんよ。テロリズムとどうだこうだというような話は、どうでもいいわけよ。あぶくみみたいなものでしょ。そう考えたほうがいいんじゃないの？ だから、過激の観念をもっと変える必要があるんじゃないかな。

(歴史地理教育1980-12月号「小田実が語る『歴史の転換』」より)

ご存知でしょうか

「ゴルダ・メイア夫人をご存知でしょうか？ 一昨年逝去されたイスラエルの元総理大臣でした。私は夫人が外務大臣の時、日本とイスラエルでお会いしましたが堂々とした体格の持主で、文字通り実力で総理大臣になった女性でした。

本書「ゴルダ・メイア回想録」(この「編者」は総理大臣をやめたあとの一九七五年に「回想録」として出版された自伝で、ユダヤ人としてソ連で生まれ、アメリカに渡って教育を受け結婚して祖国のパレスチナに帰り、キブツで生活、労働大臣、外務大臣、総理大臣までの経歴が感動的にかかれていきます。林さんの翻訳も極めて流暢で読み易く、多くの方々におすすめします。

市川房枝女史の「ゴルダ・メイア回想録」(林弘子訳、評論社、一九八〇年8月10日発行)への「推薦のことば」(全文)

我々の聖書には……

「攻撃は最大の防御といったのは毛沢東だそうだが、我々の聖書(旧約)には、『お前を殺しにくる者があれば、お前の方から先に殺せ』とある。南レバノンで我々は殺されるのを待つてはいない」

常に反対してきた

「私は常に、パレスチナ国家とかPLOとかいうものに反対してきた。ヨルダン川西岸に関する交渉はヨルダン、イスラエル間で行なわれるべきだと思つ」

イスラエル軍の情報担当官「ミル・ヘン」(中佐佐36才、毎日新聞特派員に語る) キッシンジャー・米元国務長官、1月6日、「エルサレム・ポスト」紙のインタビュー

パレスチナわが祖国 国連ビルでの抗議で語るヘブロン市長



(カワスメ市長) (ミルヘム市長)

国連安保理事会は、イスラエル当局によって再度にわたり追放された二人のパレスチナ市長が祖国に帰還し、市長としての任務に復帰するよう要求する決議を採択した(十二月十九日)。

数千人のパレスチナ、アラブ人をはじめアメリカ市民らがニューヨークの国連本部前で大デモ行進を行ない、断食入り込み行動をくりひろげていた二人のパレスチナ市長を支援した。

ヘブロン市のカワスメ市長とハルフル市のミルヘム市長は、昨年十二月五日にイスラエル当局により再度にわたり追放されていたが、この問題を国連に提訴し世界の世論に訴えるために十二月十九日から国連本部ビル内で抗議の断食入り込みに入った。

「五月に追放されて以来、国連安保理事会で三つの決議が採択されているが、イスラエル当局は何ら決議を守ろうとしていない。従って、われわれは国際社会に対してイスラエルが国連決議を完全に無視しつづけている事実を訴えざるを得なかった」とカワスメ市長は語った。

同市長に語りつづける、「われわれ二人

は、望んでいない追放を強制された。祖国の地パレスチナにあってたとえ投獄されていても、追放されるよりはましだと考えている。世界で最も美しい祖国パレスチナで、いかなる屈辱に耐えようとも、追放を受け入れる気持はおこらない。パレスチナわが祖国それは、何ものにもかえられないのだ」

「イスラエル当局者が頑なな改革をとりつづけるために帰還の可能性が薄いことは知っている。にもかかわらず、われわれが行動を起すのは、パレスチナ人民の声に世界が耳を傾けてほしいからである。シオニストの弾圧によって毎日何人も同胞が殺害されてきたが、われわれパレスチナ人民は生存しつづけてきたのだ。それは、ひとえにわれらがパレスチナ独立国家を樹立しようとする不屈の意思と悲願によるものである」

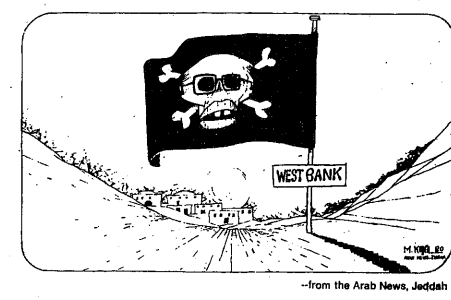
両市長は国連事務総長の申し入れを受けて同二十四日の夕方に抗議行動をいったん中止して国連本部ビルを退去。ニューヨークの国連本部前で抗議の断食入り込みに入った二人のパレスチナ指導者を支援する激励電報が世界各地から寄せられた。スイス・パレスチナ友好協会は、不法な追放に抗議し国連にこの問題を提訴した二人の市長に激励電報を送るとともに、二度に渡る不法な追放措

置をとったイスラエル当局を非難した。再度にわたりイスラエル当局により追放された二人のパレスチナ市長の帰還を要求した一日ハンストがエルサレム市に住む十数名のパレスチナ婦人によって行なわれた。

エルサレム市の国際赤十字委員会本部の前で坐り込みの抗議ハンストを行なった婦人たちは、同本部を訪れ、抗議文を手渡した。

この坐り込み行動には、両市長婦人をはじめ西岸地区の各界の婦人代表が参加した。代表たちは国連のワルトハイム事務総長にも電報を送り、両市長の帰還の権利の保証を要求した国連決議を実施するよう要請した。

(八〇年十二月二十三日)



—from the Arab News, Jeddah

軍靴に踏みしだかれたキャンバス 美術館閉鎖に抗議するパレスチナの画家たち

イスラエル占領下のパレスチナの民衆は、日常生活のあらゆる側面で日毎の脅威とたたかっている。農民たちは、耕す土地をいつ奪われるか知れない脅威にさらされ、土地を耕しているも、水利権を奪われている。学生たちは事あるごとにイスラエルの軍隊がキャンパスに軍靴で踏みこむため、学問に集中できなくなっている。イスラム教やキリスト教の指導者も殺害され、モスクも教会も焼かれる。そして画家たちが、苦勞して開設したばかりの美術館がイスラエル当局によって強制的に閉鎖されてしまった。

イスラエル占領下のパレスチナ西岸、

ラマラー市には、一昨年五月に唯一のパレスチナ美術館が完成したが、閉鎖して一年半たらずの昨年の十月にイスラエル軍事占領当局によって強制的に閉鎖された。パレスチナ美術館の開設を計画したのは、ヘブロン市に住む画家のイサーム・バディール氏(33才)で、彼はバクタード美術大学を卒業してから十年ほどの間美術館の建設運動をすすめてきて、ようやく「ギャラリー一九七九」として出発させることができた。

「パレスチナ人たちは、文化遺産も含めて何もかも奪われてしまった。せめてアート・ギャラリーを設立して、パレスチナの絵を展示すれば、子供たちも絵が好きになるだろう」と考えるのが画家としては当然のことです」とバディール氏は

語る。

このパレスチナ美術館の開設は、イスラエル占領下のパレスチナ民衆に大きな反響をもって迎えられ、絵画・銅細工・陶器・木彫などの作品が集められ、展示された。西岸地区に住むパレスチナの画家は二十人から三十人。この美術館は、彼らにとっては、系統的に自分たちの作品を展示できる唯一の場所でもあった。子供たちには館長のバディール氏自身が絵画教室で教えた。昨年の八月に、この美術館の活動にイスラエル軍事占領当局が目をつけ、五点の絵画が押収されるといふ事件が起きた。九月に入ってからイスラエルの軍隊が美術館に侵入して作品をとりはずしたり美術館の鍵を奪った。この間に館長は逮捕され、裁判にまでかけられている。

東エルサレムに住む著名な画家のスレ・イマン・マンズール氏はこう語っている。「この暴挙は美術館そのものや政治的な美術運動に向けられたものではないと考えている。いわば占領時の外側への窓を美術活動を通じてつくられるのをイスラエル当局がおそれたためだ」マンズール氏の絵画も、今回の事件で押収されている。

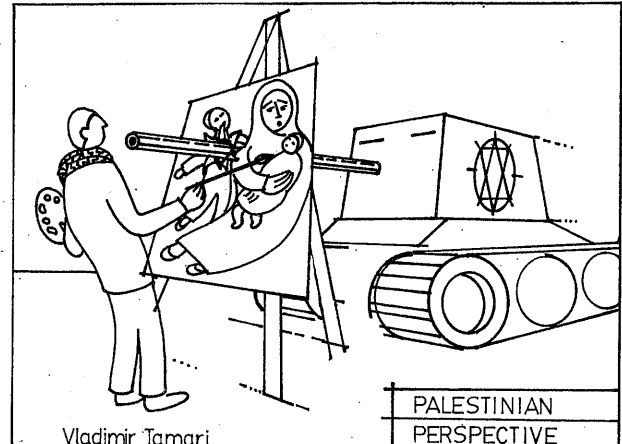
「私の描いたものは政治性の全くないものであり、働く婦人や村の風景画などだった。問題は、美術の解釈だ。どんな作品が当局の怒りをよぶのか予想することは不可能だ」ともスレ・イマン氏は言う。もちろん、政治性の強い絵画を描いてきたことは否定しない。一九六七年の第三次中東戦争の前までは、パレスチナ現代美術の主要なテーマは、民族の悲劇と苦難を描くことであつた。難民、キャンプの悲惨な現実が、祖国への帰還の夢と交錯していた。

しかし、一九六七年以降は、テーマもパレスチナの文化や民族の伝統に対する興味に移っていく。パレスチナの伝統を

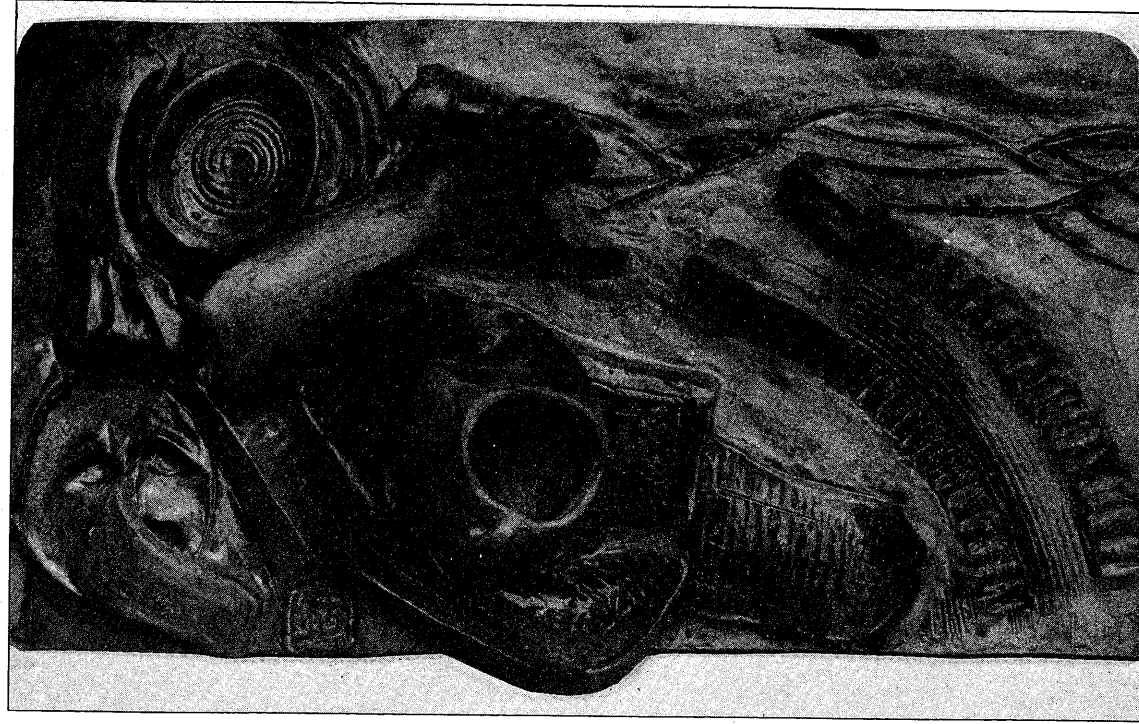
側からは、自由な解釈で弾圧の口実がつけられてゆく。

バディール氏の作品は、昨年五月の二人の市長(ナブルスのシャカー市長とラマラーのハラフ市長)の暗殺計画による犠牲を描いたものである。二人のプロフィール、二本のオリーブの木、切り落された一対の足……。「支配者たちは、足を切り落せるかもしれないが、われらの根っこを切ることはできない」という不屈さを作品化したものであつた。もちろん、こうした絵は公けの場で展示できない。「人々は展示するのをおそ

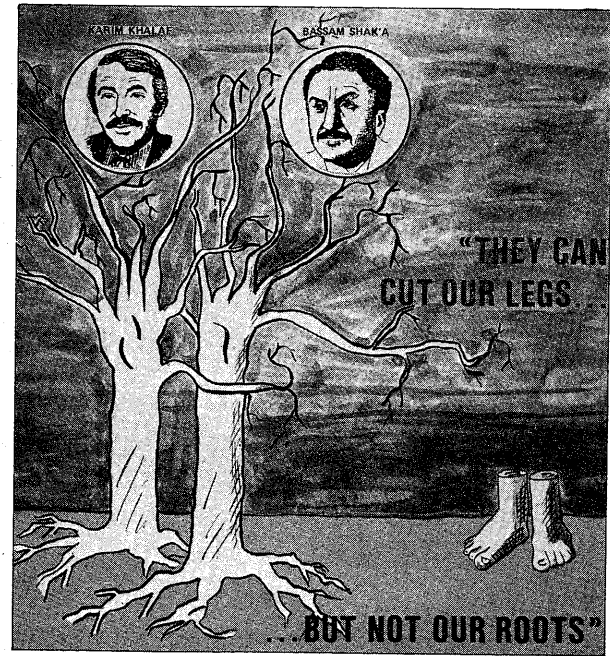
探ることは、奪われた民族としての意識をとりもどす具体的な方法であつた。伝統的な民族衣裳の紋様やパターンにも美術家たちの目が注がれた。しかも、この伝統の再発見と発掘の作業には今日でもイスラエル・シャムート氏らパレスチナ美術家総同盟会長自らが努力している。弾圧下の造形表現は、屈折する。シュール・レアリズムはファシズムに抵抗するための有力な武器となつた造形美術の流れとして発展した。だがイスラエルというファシズム国家の支配下では、当局



Vladimir Tamari PALESTINIAN PERSPECTIVE



「家がここにあった」ウラディミール・タマリ作。破壊され、地図の上から消し去られたパレスチナの「ラトゥルン」「ペイト・イル」の村々のモチーフ。



われわれの足は切り落とせても、ルーツを奪うことは出来ない

れているのです」と画家で陶芸家でもあるヴェーラ・タマリさんは言う。ガザ地区の画家たちがこの美術館で共同展示に参加することも禁じられた。政治的な作品があれば、画家たちの家を検査して押収するぞと脅迫している。十三人の美術家たちは、こうしたイスラエル軍事占領当局の弾圧に抗議し、エルサレム市内で美術展を行なった。日本の美術家の方々にも、この事件に注目してほしい。そして美術館の再開のために、イスラエル軍事占領当局へ要求していただきたいと願っている。(ラマラー発)

アラファト議長訪日実現に向けて

先ほど日本・パレスチナ友好議員連盟PLO訪問団の団長としてパレスチナ国民評議会(PNC)とPLOを訪れた木村俊夫元外相は、十二月十三日、十四日のアラファト会談を終え、アラファト議長に日本招待の原則的受諾というおみやげを手に、このほど帰国された。本誌編集部では十二月二十七日(土)に木村氏のインタビューを行ない、訪問の成果と今後の抱負を語っていただいた。インタビューには、新進のフォトジャーナリストである鍵和田良輔さんにお願いした。(編集部)



PLOはパレスチナ唯一の代表

木村さんはこのほど、日本パレスチナ友好議員連盟により超党派の代表団の団長として、はじめてPLOと接触されたわけですが、まず訪問の目的と成果についてお話し下さいませぬか。

木村 われわれ友好議員連盟代表団の目的はPLOの幹部と会い、またPLOが、独立国家建設に向かって着実な歩みをとっているのを実際に確かめてみたかったことにありました。イラン・イラク戦争の長期化によって、中東に対する関心はややもすると湾岸問題に集まっているのが現状ですが、それだけに一層訪問の意義があつたと考えます。今回の訪問についてはPNCアラファト議長への招待によるもので、超党派議員団の編成が実現したものです。もちろん内部調整の苦労もありましたけれども、代表団はアラフの大義を重んずる点で統一できていましたし、最終的にはPLOの考えを、支持していくということでも一致していました。そして今回、日本政府よりも一歩進んで、

PLOがパレスチナの唯一の代表であると表明できたことは、最も大きな意義だと思います。

従ってアラファト議長はじめパレスチナの人々に、日本のパレスチナに対する進んだ理解を評価していただき、ついに何らのプロトコール(儀礼)にこだわらず、アラファト議長が訪日を受諾されたことは大きな成果だつたと思います。加えてわれわれの意とするところは、議長の訪日を通じてパレスチナ人民と日本の国民の間の連帯感を強めるところに本当の目的があります。これによって日本の国民のパレスチナ問題を含んだ中東への認識と理解はさらに強められることとなります。また、中東和平への日本のとり組み方という点で、単に国連でスピーチし採決に加わるだけでなく、パレスチナ問題への政治的解決を日本が進んで果たそうとする、そうした国民のコンセンサスを高める上でも大きな役割を果たしたと、こう思っています。

日本政府介入の段階

——そうしますと、議連としては今後どう具体的に動かれるのでしょうか。

木村 まず、アラファト議長訪日実現までにはいくつかの準備段階があります。これは議長訪日までに何らかの保障、つ

まり日本政府が介入するというのが必要になります。そういうようなフォーミュラーについて何か考えようということですね。ええ、私はこれはそんなに難しいことはないと思います。外務省も今私

が持つておる腹案については、おそらくサポートしてくれると思います。

また今度の訪問によって国会内でのPLO、パレスチナ問題に対する認識が一段と進んだことを、次には国会の論議の中で一段と具体化したい。これを通じて国民にもさらに訴えたいですね。

残酷なイスラエルの攻撃

アラファト議長やPLOの幹部に会われた印象。そしてPLOの活動に対する感想はいかがでしょう。

木村 アラファト議長の人間的な魅力というものにわれわれはうたれましたね。と同時に、アラファト議長をはじめとするPLO・PNCの方々のきわめて堅実な政治行動。とくに私が感銘を深めたのは、PLOというこれまででは軍事行動ばかりしている印象がまだまだ多かったのだが、今やそうではなくて、日、経済、教育、医療その他全般にわたる活動を続け、次の段階すなわち独立国家へ移行する諸準備をすべて、着実に進められておられることです。

——ベイルートではPLOの様々な活動をご覧になったわけですね。

木村 難民キャンプ、それからサメッド(生産から販売までを受け持つパレスチナ人の経済機構)の工場、殉教者の遺児たちの学校——これは孤児たちを収容しながら、大へん良く整った学校でした。そして月赤十字社の病院、ここではアラファトさんの弟さんが院長をしておられるんですが、あらゆる諸活動を通じてPLOが成熟した大きな組織に進みつつあることを目のあたりに実感できたことは、大きな収穫だつたと思います。

——新聞によるとレバノン南部にも行かれたようですね。

木村 そうなんです。南レバノンにも行きましたか。

木村 イスラエルとイスラエルから支持されておるアララジストからも暖かい歓迎を受けました。われわれが難民キャンプを視察している直後に砲弾が飛んできましたね。そんなまたと得られない体験もして帰りました。いかにイスラエルが無法な、残酷な攻撃をパレスチナに対してやっておるかということ、それをわれわれ自身の体験として充分認識することができたですね。

被害妄想は杞憂

——とはいえ専門家の話などには、パレスチナ国家が樹立されるとかえつてアラフにとって脅威となるであろうという見方なども一部にあるようですが。

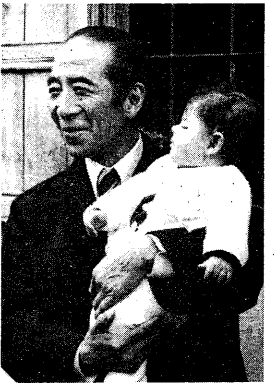
木村 その点については私はね、パレスチナ人の優秀さというのを考えずして、例えそれがミニ・ステートにせよ被害妄想を抱くという理由は分らんことではないですけれども、しかしパレスチナ国家が出来たときのことを考えてみると、その時の国際環境がパレスチナ国家が脅威となるようなことを許すのか。また、パレスチナ人自身今までのような苦難の時代を経てですね、せっかくなにした独立国家が再び中東に不安定をもたらすような禍をくり返さないことはパレスチナ人自身がいはば理解していると思ふんですよ。だからまあ、そういった被害妄想は一部の、一部のアラフ諸国の杞憂であると私は確信しています。

キャンプ・デービッドは死文化

——パレスチナ国家の樹立を考える時、しかもイラン・イラク戦争のような難な現状から、戦争状態を回避しながらそれを模索しなければならぬとしたら、日本の外交も問われると思いますが、木

村さんはこの点についてどのようにお考えでしょうか。

木村 まずね、パレスチナ国家を完成させるためにはアラフの団結というものがなければダメですよ。キャンプ・デービッド合意でエジプトがアラフの戦列から離れた。次いでイラン・イラク戦争で、たしても再分裂ということは、私はね、アラフにとっては悲劇だと思います。ですから中東の、アラフの分極化を何とか食い止めなければならぬ。しかしね、そこにはもう米・ソの影が映つておる。従つてわれわれとしては、米・ソ相方も極めて抑制された行動と立場をとるべきであると主張する。イラン・イラク戦争では両者ともそのことをわきまえておるかのごとく見えますが、今後それを日本としても米・ソに強く望んでいく。また国連の場でもそれを国際世論として強く反映していきたい。それと同時に日米の親しい関係から言えば、キャンプ・デービッド合意についてわれわれは中東包括和平の最初のステップとしてのみこれをサポートする立場に立ちましたけれども、今やそれは死文化しておるのではないかと言うこと。サダト大統領もこれには大きな失望をしておるであろうし、またイスラエルの方でもベギン大統領は今年の総選挙で敗退するでしょうし……。



パレスチナ問題は

中東和平の核

新聞によりまずと経済政策のつづきで、信じ難いようなインフレの数字が書かれていたが。

木村 もう、一三五パーセントですからね。次にはおそらくベレス労働党が勝つでしょうし、そこにひとつの展期があるのではないかとも思います。まあしかしね、レーガン新政権が一気にPLOと接触するとかね、大きな展開があるとは見るのは当面困難でしょう。

だが、アメリカの原油輸入に占める対中東石油依存度は今やもう四十一パーセント。そして私はね、あと二年たつたら五十パーセントに届いてしまうと思いません。そうなつたらもうね、中東の安定なくしてはアメリカの国益すら守れない。そのとき、さすがのレーガン政権も壁にぶち当たって、中東政策についての反省を、再修正をですね、しなけりやならん時期が来るであろうと。従つてそのとき

まで日本は自らの立場で、自前の中東政策を確立して、そのときこそアメリカに對する強力な助言者として当然の、果たすべき役割を果たすべきじゃないかと思ふんですね。こうした見通しやさらには長期的な視野を踏まえながら、中東和平に對して日本は政治的役割を充分果たし得る立場にあると考えています。

——本村さんの見通しからしますと、中東和平をめぐる近い将来もつともっと現実味のある政治提案がなされる方向が生まれて来るというお考えですね。

木村 私はね、そういう時期が少くとも、遅くとも二年後には来ると思ふですね。イラン・イラク戦争は目下のところ長期化の様相を呈していますけれども、これ以上拡大させることは相方とも望んでいないようです。米・ソとも望んではいない。問題はね、湾岸問題と、湾岸の王制諸国がイスラムのホメイニ革命に對して非常な懸念を持つておるところが今後の中東に大きな不安要素をもたらしているけれども、しかし、中東和平のためにはそれを乗り越えてアラブ全体が同一歩調をとつて進まなければならぬ。そういう自覚はすでにアンマン会議の中にも現われていると思ふますし、中東のみならず世界の関心がペルシャ湾に移つてしまつたかのごとき時期ではあるけれども、

パレスチナ問題が以然として中東を包括平和のための最も重要なテーマであることに変わりはない。これはアラブ諸国の共通事項なんです。その消長発展がです。

日本も中東和平に貢献を

その点では先日のTVインタビューに答えてアラファト議長が、中東は砂漠のようなもので刻々と姿を変えていると述べていましたか……。

木村 そう。私は適切な表現だと感じましたが、しかしその中でもちゃんと筋道というものはあつて、それがパレスチナ問題であることに変わりはない。この本質を見失ふことなくわれわれはより組んでいかなければならない。それが議連の唯一の目標でもあるし、また日本がアラブの大義に對して効果的役割を果たし得るポイントでもある。これからの日本の中東政策は、ともすればイスラエルに通ずるアメリカにただ追随しているだけではもはや成り立たないのだということも、絶えず政府に問いかけ、せまつて、議連として日本の国益のために、中東和平のために大きな貢献をしたいというのがわれわれの念願です。

しかしその一方でイラン・イラク戦争が燃え上がった中東からは、第五次中東戦争の危機も伝えられています。

木村 私はね、そこまで起こり得る可能性は極めて小さくなった。それがキャン・デービットが残した唯一の効果だと思ふますね。だからエジプトを除いた第五次中東戦争というのは一応考えなくてもよいのではないかと。ただ問題はアラブ内部の違和感、例えばイラン・イラク戦争とか（イランはアラブには含まれないが）、あるいはシリア、ヨルダンの関係とか、そういう二国関係が不安定なものになることはあります。だが不安定につながる内外からの圧力をはねのけて閉結に向かわなければ、いずれ共倒れになつてしまつという自覚が生まれるはずで、アラブ閉結の再構築の機運はいずれある時期に出て来ると思ふます。また第五次中東戦争に導くような大國の策動も考えにくい。というのは中東をこれ以上の大規模な混乱に陥れること自体世界を混乱に陥れることになり、米・ソにとつて自らの利益にならないばかりか、自らを破壊に導くことになるから。こうした点から外部からの自制も充分に働いてあるうし、これ以上の中東の動乱は起り得ないと予測しているわけです。

石油のみのパレスチナ

問題理解は残念

私たちの日常はこうした危機と同居しているのに、日本人から見たアラブ

はヨーロッパよりも速く、ますます浮かべるのは石油ということになりがちです。

ちなみに一九八〇年の統計を見ますと、うち石油輸入の伸びは十パーセント落ちこんでいるのに（二億七千万ドル）代金の支払いはいらん革命を契機にした第二次石油ショックによつて日本の輸入総額に占める割合は前年に比べ、何と倍の四十一パーセント（五百七十億ドル）にもハネ上がつてしまつております。しかもその六割が中東原油で、私たちの生活と中東がいかに密接な関係があるかが分ります。おまけに石油という商品は手軽に買える商品ではなくなつています。にもかかわらず、私たちのアラブの人々に對する理解は必ずしも進んでいるとは言えないようですね。

木村 日本人は第一次石油ショック以来石油と中東のつながりを嫌というほど認識したはずなのに、ややもするとその印象が薄らいでしまつという点ですね。だが中東は、アラブはあくまでわれわれの属するアジアであり、東洋でもオリエントであることを忘れないで欲しいものです。そうすればパレスチナ問題への理解も進むと思ふのですが。しかし私は、石油を通じてなければそうはならないというところは残念だと思ふ気があります。国民一人一人が自分の目で、肌でも

つて感じていただかないと……。

アラファト議長

訪日に期待

その意味でアラファト議長の訪日というのは大きな意義があると思ふます。この訪日に際しては日本の総理大臣も議長と直接会い、パレスチナ問題を含めた中東全般について会談すると言つており、これは日本がPLOをパレスチナの唯一の代表として認めることを具現化するものなのだが、アラファト議長が実現することになれば日本国民のパレスチナに對する理解も大きく前進することになりましよう。その意味ではわれわれの今回のPLO訪問は、アラファト議長訪日によつて生ずる様々な間接効果を期待していることにもなるわけですね。

では最後に逆にPLOの方に対してご意見がありましたらお聞かせ下さい。木村 PLOは堅実な独立国家へのプロセスを歩みはじめている。この着実な路線を積極的に進めていただきたい。また、パレスチナ国家をつくるためには一つでも多くの國々と、一人でも多くの人々と友好を深めていくことが目標実現への道であることを認識し、実行してもらいたいということ。これが私の要望ですね。お忙しい中、時間をさいいただきました。きましてどうもありがとうございました。



「アラブ対立」もろくに パレスチナの試練

「イラン・イラク戦争のほつ発で、世界の関心は、アラブ・イスラエル抗争から離れた。しかも、この戦争をきっかけに、イラク、ヨルダンなど穏健派と、シリア、リビアなど急進派の対立は一挙に深まり、アラブ世界はかつてない分裂に陥った。アラブの内部抗争につけ入るイスラエルは、パレスチナ解放運動のまっ殺を図り、レバノン南部への大攻勢をねらっている。パレスチナ解放運動は、今、もっとも困難な時期に遭遇した。ベイルートのパレスチナ解放機構（PLO）情報部の薄暗い一室で、マフムド・ラバディ氏（アラファトPLO議長のスプークスマン）は、沈痛な表情で語った。

「アラブの指導者たちは、だれであれ、パレスチナの大義への支持を公言する。しかし、われわれには、本当のところ、信用できない。何度となく裏切られてきたからだ。レバノン内戦のさい、シリア軍は、七六年六月にアサド大統領の命令で、パレスチナ人を虐殺した。サタト・エジプト大統領は、シナイ半島をイスラエルから取り戻すため、パレスチナの大義を売り渡して、七八年九月にアメリカ、イスラエルとキャンプ・デービッド合意に署名した。そして、いま、パレスチナ解放運動は、七〇年のヨルダン内戦に次ぐ、フセイン国王の二度目の裏切りにあおつてしまっている。」

ベイルート観測筋によると、フセイン・ヨルダン国王は、破産したキャンプ・デービッド合意に代わる中東和平構想のインシアチブを握るための機会を虎視（こし）たんだんとね

らっている。国王はまず、PLOをパレスチナ人の唯一の代表と認めたラバト・アラブ首脳会議（七四年）決議を破棄し、最終的にはイスラエル占領下のヨルダン川西岸、ガザ地区に樹立されたパレスチナ自治地域とヨルダンを連邦化した「連合王国」を建設しようとしているようだ。もし、ラバト決議が破棄されれば、PLOは、その存在理由すら奪われかねない。

「フセイン国王の連合王国構想は、PLOをテロリスト集団」と呼ぶレーガン（米次期大統領）の意向を先取りしたものだ。レーガンが目指すまやかしの中東和平にとって最大の障害はPLOだ。だから、連中は、PLO排除を図っているのだ」と、語気鋭く言い切った。

PLOを取り巻く状況は、急速に厳しさを増している。PLOを窮地に追いやる一突きになったのが、イラン・イラク戦争だったのは否定できない。そして、来年一月二日には、PLO敵視を鮮明にしたレーガン氏が、アメリカの大統領になる。（十二月九日、読売新聞「激動の中東を行く」藤原和彦特派員）

PLOはパレスチナ人の「唯一の代表」

日・パ議連代表団

同議連代表団としては「正当」という表現

葉が野党議員の一部から何回か聞かれた。木村団長をはじめ自民党側にしてみれば、アラファト議長来日をはじめ会談での交渉ことは帰国後政府側に伝え、実施に移さなければならぬ責任を負っている。交渉とは、みんなであいわいやってまもらなかつたら、相手に足元を見すかされるだけ。そこは野党とは大きく違つてところである。ときには自民党ペースでいくことは、話し合いの上でやむを得ないことではなからうか。

今回の訪問の成果を政府自民党がすんなり受け入れることはなかなか難しく、時間がかかろうが、日本・パレスチナ友好関係はアラファト議長の来日をきっかけとして深いものになっていくだろう。それは結果的にわが国の資源外交にも大きく貢献することになる。そのとき訪問団の団員たちは「なぜあのときメンツにこだわったのだろうか」と思うに違いない。

（十二月十八日 毎日新聞 権橋特派員）

揺れる中東と日本外交 「油ごい」だけではダメ

アラファト議長に「日本に望むものは」と聞いたら、PLOがパレスチナ人の唯一正統の代表であり、独立国家建設の権利を有することを日本政府に認めさせるよう努力してほしい、と語っていた。またPLOの経済部門で独自の工場や農場をもつSAMED（生産機構）のアアラ事務局長は訪問団に「石油を目的とし、あるいは消費財の市場を目的としてわれわれと付き合う国には将来はない」と厳しい表現で迫っていた。経済援助よりパレスチナ人の国家づくりを認め、国際的世論形成に一役買つてくれ、という点だ。とくに日本に対しては、米国に働きかけてほしい、という気持が強い。PLOはイスラエルから砲撃や空爆を受けている南レバノンをはじめ難民キャンプ、さらに、工場や学校や病院など地についた活動などを訪問団に見せた。印象は「悲惨さ」と「けなげさ」だ。

「中東外交は継続しなかつたら何にもならない」という小高駐シリア大使の言葉が頭に

こびりついている。今年一月、園田氏がシリアで大歓迎された。しかしその後音さなした。中東外交では随一といわれる同大使はさらにこうもいっていた。「日本は中東で手を汚していない国、とアラブからいわれ喜んでる人がいれば、とんでもない。何もやっていないことと同義語だ」と。なかなか手厳しいが、やはり現地に行つてそう感じた。今必要なのは友好関係づくりで、その意味では今回の超党派外交は成功した。もう一点は、わが国の中東外交は石油外交と密接にからむが、短絡させたらかえってこじれる。アラブは日本のやり方をじつと見ている。

アラファト招待が最大の目的だったのだから、大成功といえる。ただ問題はこれをどうわが国の中東政策に結びつけるかだ。入り口のドアを開けただけとさえない。話は十三日夜の木村・アラファト会談で決まったが、会談の連絡があり、木村氏はすぐにPLO

を認めるとPLOの正式承認につながる危険があるため「唯一」にとどめるとの判断を固めたもので、同代表団は「唯一」だけならば国家間の正式なものではなく政治的承認という意味を持たせることができる」と説明している。

同代表団筋によると、PLO側との会談で①日・パ議連代表団は国民を代表するもの②各党の最大公約数として中東包括和平の達成の基礎はパレスチナ問題の解決であり、そのためにはPLOを中心にするべきだとの認識を持つている③今度の訪問の目的は日本国民とPLOとの連帯を強めることにあること④の諸点を説明することにしていく。

PLOが熱烈歓迎 ベイルート入りの木村代表団

日本・パレスチナ友好議員連盟中東訪問団（団長・木村俊夫元外相）一行はシリアでの日程を終えて十二日、次の訪問国のレバノンに入ったが、国境を通過する際、パレスチナ解放機構（PLO）の熱烈歓迎ぶりが目立った。

まず車はダマスカス国境間がパレスチナ国民評議会（PNC）国境・ベイルート間がPLOの差し直し。高級車とはいえないが国境まではシリアの警察のバトカー、国境からはPLOの武装警察が先導したためすい。国境に着くと、PLO幹部が出迎え、また着剣したアラファトPLO議長の親衛隊が整列して挨拶。木村団長は関兵してこれに応じた。十人足らずの「ミニ儀仗兵」とはいえ「PLOは国家なんだ」というPLOの気持ちがありあつた。

「超党派」が泣く 中東訪問団

「怒った。私はあした帰る」もうこれ以上は自民党にお付き合ひはできない」などの言

の車で、単身議長宅へ向かったが、何といつても警護の厳しい同議長のこと、市内をグルグルまわつて行つたらしい。着いたらまだ議長は帰ってない。しばらく待たれ、掃室はしたものの今度は、ムチ打ち症治療の注射といった具合ですべてはアラファト・ペース。この時だけは日本からのお客さんを迎える態度とはいえないと野党の団員は怒っていた。

翌十四日の、訪問団一行との会談はもつとすごい。会談予定場所が三回も変わった。振りまわされる方は愉快ではない。「議長はたいたいここに着きました。間もなく会談です」といった十数分後には「会談はこちらでなく、ベイルート市内です。移動して下さい」という具合だ。（十二月二十日 毎日新聞 同特派員座談会での権橋特派員の発言）

アラファトのキツス 中東使節団副団長 上田 哲

なんと同行記者団は議員の数の二倍、十八人という熱い関心が示された。しかし、記者団の一致した観測は、アラファト来日はまずない、というものであった。私はひとり、強気と評された。

最初のヤマは十一月十一日、PNCのファーム議長との会談の朝。超党派というむずかしい代表団の見解として自民党団員の一部反対を押し包んで「PLOをパレスチナ人民の唯一の代表」と表明することを決定した。大きな前進であった。

「喜悲折衷」と、私はメモに書いた。野党外交は九十九段まで石を積む。あと一段、政府の外交手続きをまたねばならぬ。最後に神主が要る、と思つしかない。しかし、政権がほしい。アラファト議長は慎重ないい回しで結論を避ける。

問題点は明らかであった。PLOとしては政府の正式招待以外は受けけない方針を堅持している。そこをこえねばならぬ。まるで争議の団交のように、私はこぶしを振りあげ、テーブルを叩いて、国際情勢から

また同筋は「日本政府の立場も西欧より一歩進んでいることも説明するが、代表団としてはPLO側の要望を理解してさらに政府に対する影響を強めていきたい」と述べている。政府に対する影響をさらに強めるということの内容について同代表団は①アラファト議長が訪日する場合に首相、外相との会談、天皇陛下との会見など公賓に準じた扱いをする②PLO東京事務所そのものに外交特権を与えるわけにはいかないが、事務総長個人に何らかの便法を講じて外交官待遇を与えるなどの考え方を明らかにした。

（十二月十一日 サンケイ新聞 友田特派員）

「われわれの側の合意です、お招きをお受けします」

大きな目玉を笑顔にかえてことばをつぐ。「ファームさんより早く日本に行くつもりです。うん、結論にしよう、と議長は背筋をのびした。

野党外交の使命の一つは、ここに結実したといえるだろう。

この一つは、日本政府をもう一歩で変え、アメリカとECに先んじ、やがて世界と中東の関係を築くことになるだろう。

寒い夜だが、五体のほてりが雪をとかした。（十二月二十三日 社会新報）

アラブ人を抑圧 イスラエル内の「植民地」

イスラエルの英字紙「エルサレム・ポスト」に載っていた投書にこんなのがあった。投書の主は、ベングリオン国際空港に近い共同農場、キブツ・ゲゼルに住むソル・アインスタインという人。住民百二十人のそのキブツで、最近どうしてももうひとつ防空壕が必要となり、ユダヤ機関の援助で六つ目を建設したが、実際の作業に当たったのは近くのアラブ人労働者だった。アインスタインさんは、そのアラブ人の一人から結婚式の宴に招かれた。「私そのアラブ人の家庭で、アラブの伝統にあふれた、本当に温かいもてなしを受けたことは、驚くに値しないかも知れない。また、住民四百人のその村を走る主要道路が三十年前からの約束にもかかわらず、いまだに未舗装だったことも、さらに一日一便の公営バスすら満足に運行されていないというひどさも、たいして特記することではないのかも知れない。が、無視できなかったのは、その村にはたった一つの防空壕もなかったという事実だ」

過去四回も戦火にさらされたパレスチナ地域。ユダヤ人が日常生活の中で安全上必要不可欠と考えている防空壕が、同じ地に住みながらアラブ人には全く与えられていないことに、ほかならぬユダヤ人のアインスタイン氏がいきどおっているのだ。

パレスチナ人のための大学として有名なヒルゼイト大学（ハンナ・ナシル学長、学生千四百人）では、昨年十一月に一週間の閉鎖を軍から命ぜられた。大学の文化祭に当たる「パレスチナ週間」に対し、軍が事前申請を受

けていなかったことを理由に学校と対立、軍の強制命令となった、という。軍は閉鎖に当たり「反イスラエルのパンフレットを配布したり、パレスチナ解放機構（PLO）の旗を掲げたりなどの反イスラエル扇動をしたからだ」と発表した。

中東外交は新展開へ PLO議長は今春来日で

アラファト来日招請問題は、一昨年来の懸案で、議連の招待状は早くから出されていたが、PLO側は「政府招待」を要求して、なかなか応じなかった。これに対し、日本側はPLOは正式の国家ではなく、またイスラエルとのバランスも考慮する必要があるとして「政府招待」要求には応じなかった。そのかわり「訪日すれば首相外相が会談に応じる」となど実質的な「政府招待」とする旨伝えていた。

今回の議連訪問団が同議長と会談した際、同議長は「政府招待にはこだわらない。招待の方法を考えてほしい」と招請を受け入れた。しかしPLO側は「政府招待」を完全に引いたわけではなく、できれば首相のメッセージがほしい、としている。



閉鎖した。翌日、学生たちは再びアモ、軍と衝突、今度はヒルゼイト大学の副学長の娘、ハニヤ・バラムキさん（14）らがけが。他に多数の逮捕者が出た。

パレスチナ人の新聞に対する軍の干渉も強い。この事件を「緊張爆発、イスラエル兵無防備の学生に発砲」という大見出しをつけ報道したパレスチナ唯一の英字週刊紙「アルファジール」（アラビア語で「夜明け」の意味）のH・S・シニオラ編集長（57）は「軍事機密や政治とは一切関係のない文化的な原稿も含め、すべてが事前検閲の対象になる。取材妨害や記者に対するいやがらせも日常茶飯事だ」という。

（一月五日、毎日新聞「南からの報告②」佐藤特派員）

だれにするかが今後の折衝の焦点となりそう。訪日の時期だが、アラファト議長は、訪問団との会談の際「ファーム・パレスチナ国民評議会（PNC）議長より早くなるかもしれない」と語り、招待の形式の折衝がスムーズに進めば春ごろとなりそう。

（一月五日、毎日新聞）

基盤揺らぐ ベギン政権

来年の選挙、苦戦は必死

ベギン政権の命取りになるといわれるインフレは、歯止めのかかない状態で悪化し、今年の実績には、一三八%台にはね上がっている。とくに、食料品の値上がり率が激しく過去一年間で二八〇%に達し、国民生活に重くのしかかっている。

このため、深刻なのは、「国民が、政府を信じなくなったことだ」（ワイツマン前国防相）これが、出入国者の数に、はっきりと表れている。イスラエル政府の発表によると、ことし一月から十月まで、イスラエルを出た者は四十四万八千九百九十七人。入って来たのは四十二万六千九百九十五人。出国者が二万二千八百二十八人も上回った。この数は、昨年と同期間に比べて、二倍以上になる。

こうしたイスラエルの情勢を反映して、ベギン政権に対する「外の風」は冷たくなっている。ベギン首相は十一月に訪米した際、レーガン次期大統領に会談を申し入れたが、断られた。

（十一月二十九日、朝日新聞、新妻特派員）

拜啓

関係各位殿

PLOから敬意をこめて

パレスチナと日本①

最近ある日本の友人の新年会に招かれた時のことである。大学教授の友人宅には、学者や文学者など日本の知識人たちが集まって、今年の国際政治の動向などを理由に論議していた。

白黒の論理と発想

話題は当然のことながら中東問題にも及び、国際政治学の教授と作家の間で対話が進んだ。イスラエルとかPLOという言葉から、おおよその話題は推定できたが、論旨を知るには友人の協力を得なければならなかった。教授氏は、イスラエル軍兵士が昨年のクリスマス日にレバノン南部でパレスチナの五人の抵抗兵士を射殺したうえに遺体を爆破したとの新聞報道を引用しながら、ベトナム戦争におけるソンミ村の大量虐殺と同質の残虐行為であることを強調したうえでこう言われた。「これらの残虐行為を非難する声を高めてゆくべきではないか。更にパレスチナ人民の奪われた民族的権利と人権を回復するために支援を強めてゆかなければならない時にきている」

これに対して作家氏は、日本の知識人



が欧米などの知識人たちに、こうした問題で遅れをとってはならないが「原理的な問題としてパレスチナ人たちが武力によつて権利を回復しようとするその方法そのものから問題にしてゆかなければならないし、そうしたPLOの過激な行動は支持できない」と言った。教授氏が、PLOは決して過激な行動をとってはいない。むしろ穏健な政策をとっていることを多様な領域のたかいたを紹介しながら説明された。日本人は、白か黒かという論議を好むようだが、PLOについても「過激」なのか「穏健」なのかという結論だけを引き出すとするやり方には賛成できなかった。「原理的な問題として」と言われるのなら、まずもって、パレスチナ人たちが奪われている人間として、また民族としての権利とは、そもそもいかなるものなのか。それらの権利をパレスチナ人たちに回復させることが正当なものなのか否かがさらに問われなければならぬであろう。

パレスチナ人民の奪われた諸権利を、国連が「譲りえない権利」として再確認したことは、自決権と国家樹立を含む民族的権利をパレスチナ人民に回復させねばならない責務を国連が負っていることを認めたと同時に、これらの諸権利が、すべての人民に保証されなければならぬ民族基本権である事実を再確認したことを意味する。

どすためには、占領者に通じる唯一の言葉、つまり武装闘争を含む自衛と抵抗のたたかいをすすめなければならなかったわけだが、この事実が日本の知識人の間では、未だに理解されていないのに驚いてしまう。奪われた自らの祖国の地と民族の自決権をとりもどすたたかいを「過激（ラディカル）」と評すなら、それを甘んじて受けよう。パレスチナ解放の事業は、アラブ世界全体の政治と社会の変革と無関係ではないという意味でも、まさに根源的（ラディカル）なたたかいをあらゆる領域において要求されている。

パーティの席でもあったので、私はあえて論議をひかえた。新年の集まりであり、初対面でもあったので、自制すべきだと思ったからである。だがアラブの格言にも同様のものがあるように、「物言わぬは腹ふくる技」のたとえ通り、そのままではおさまらず、私を招いてくれた友人と、この点を論じ合ったために帰宅は夜半になってしまった。

シオニズムというファシズムは、いろいろな服をまとっている。金ピカの虚飾にまどわされて、中立を旨とする日本の知識人には、その正体が見ぬけないのかもしれない。だからと言って、この巨大な妖怪とたたかっているパレスチナ人民のたたかいを「過激な行動」として断じてしまっているとしたら、弱肉強食の法則は、二十世紀を迎えようとしている地球を更に我もの顔に支配するのを許すことになる。

アラファト物語

The Story of the Chairman Arafat

連載<1> プロローグ



世界の注目を浴びる指導者、ヤセル・アラファトPLO議長の素顔を、数々のエピソードでつづる待望の新連載開始。

不思議な老婦人

一九六五年の一月初旬、シリアのダマスカス。市内の一角にある「パレスチナ民族解放運動(ファタハ)の事務所」と思われていた建物を訪ねた一人の老婦人があった。老婦人は受付に自分の名を告げると、「アラファト氏に会わせてほしい」と言った。受付にいたスタッフは驚いた。当時は、アラファトという名で、このファタハ(注1)の指導者と呼ばれていた。稀れであったからである。今日でもそうだが、アブ・アンマール(注2)という親しい呼び方がパレスチナ人たちの間ではなされていたため、本名でアラファト氏に面会させてほしいと老婦人が言った時、警戒心の強い受付の警備係などは、どこかのスパイかといぶかったほどである。

ファタハが一九六四年の末に武装闘争によって、パレスチナ解放(パレスチナ革命)ののろしをあげた時、西側の諸国は大きな衝撃を受けた。各国の諜報機関が有能な調査員をダマスカスに送り込み、「ファタハ」という謎につつまれた集団の正体をつかもうとした。同時に、そのリーダーとして登場した「アブ・アンマール」という人物がいかなる経歴の持ち主なのかを調査させようとした。ファタ

ハ本部には、そのよふな動きがヨーロッパの主要都市から入ってきていたので、受付の警備係が疑いを持ったのは当然であつた。

「アラファト氏は、いま会議中でお会い出来ません。会議が終了してから、お会いできるかどうかをアラファト氏にうかがって、それから……」と受付のスタッフが言いかけた。老婦人は、まわりのスタッフの拳動から自分が信用されていないことを察知すると、途中でさきぎって、来意を説明し始めた。

「わたしは、以前にアラファトさんにお目にかかっているんじゃない。そんなに、うさんくさい目で見ないでくれ。アラファトさんにお会いして、ひとことお祝いを言っておきたいと思つてね。エルサレムで、あの方が幼年時代を過ごされた頃から存じあげているんじゃないから、おまえさん方とは大ちがいじゃ。とにかく、わたしの名前をあなたの方に告げれば、きっと思い出して下さるじやろから、早く頼みますよ」

ファタハの本部では、指導者たちが集まって会議をしていた。アブ・アンマールは、会議が終つた時、一人の老婦人が訪ねてきていることを知らされたが、その婦人の名前だけで誰れであるか思い出せなかつたので、階下の受付まで降りて

行こうとした。ところが、老婦人は、係員の制止もきかずに、すでに二階の会議室の入口まで来ていた。

「まあ、ヤーセル坊ちゃま、ほんとうに、お久しぶりでございました。エルサレムにおられた頃に、あなたのお父さまにお世話になりましたカーセムの家内でございます。お祝いを申しあげたくて参りました。いよいよ祖国の地を解放する運動を開始したんですね。しかも、あなたが、その指導者におなりになられたんでしょう。ほんとうに、おめでとございます。どれほど、この日を待ち望んできたことでしょうか」

老婦人は、かなり興奮したまま、話をつづけた。しかし、幹部たちのほとんどが、その場に居合わせていることを確認すると、急に語調は変わった。

「指導者の皆さんがお揃いだ。わしは、これだけは言っておきたい。あなた方が



祖国解放の情熱に燃えていることはよく知つている。だが、情熱だけで、シオニストに奪われた祖国を解放できるものじゃない。あなた方は立派な指導者だが、民衆の期待を裏切らないように十分に心してほしい。奢りや高ぶりがあつてはならぬ。集団の上に自己を置いてはならぬ……」

いつの間にか、この不思議な老婦人は演説を始めていた。しかも、ファタハの幹部たちを前にして解放運動の戒めを説き始めたのである。幹部たちは、半ばキツネにつままれたように感じながらも、アブ・アンマールの知人のしかも老婆が言うことだからと、笑顔で聞き入つていた。だが、次第に、この老婦人の言つてゐる内容が、あまりにもまともであり、当を得ているだけでなく、革命家の規律や戒めまでも、真実をついているので、幹部たちは、老婦人のまわりに坐つて、話にきき入つた。

「……あなた方をねらつてゐる敵は、いろんな誘惑をしかけてくるだろう。女はもちろんだが、有力な地位、お金など、いろんな手を使う。幹部たちの規律をくずすことは、あなた方の一人ひとりを消すことと同じくらい重要な意味をもつものだ。自分を美化したり、自分だけを大衆からきり離してはならない。幾十方

のパレスチナ人たちの期待を担つてゐることを一瞬たりとも忘れてはならぬ」

不思議な老婦人の演説は終つた。あとは何も用はないと言わんばかりに、老婦人は幹部たちをひとりひとり見渡してから、アブ・アンマールの手をしっかりと握り、「今日のことを決してお忘れにならないで下さい」と言い残して去つていった。

老婦人が去つてから、幹部たちの間では、議論がつづいた。老婦人の言葉を、これからの運動の戒めとして受けとめようとする点では、ほとんどが一致してゐた。

この出来ごとは、アラファト議長をはじめファタハのリーダーたちの脳裏に焼きついて離れないという。その不思議な老婦人がアラファト議長の知人であつたのか、そつでなかつたのか、そのことすら明らかでない。

注1 アル・ファタハ (Al-Fatah)

正確には、アラビア語の Harakat

al-Tahrir al-Watani al-Fe

l-Falstini (パレスチナ民族解

放運動) という名称を頭文字のイニシ

ヤルだけを逆転させてつくつた呼び

名で「勝利」を意味する。一九五六

年設立。反転しないままのイニシヤ

ルでは「死」を意味するため、「死

を「勝利」に転ずるといふパレスチ

ナ解放の悲願が名称にこめられてい

る。注2 アラファト議長の親しみをこめ

た呼び方。

「ル・モンド」の特派員

同七年(一九六五年)の二月の中旬のある日、レバノンのベイルート。レバノンの左派系の日刊新聞社の応接室では、フランスの新聞「ル・モンド」の特派員が、この新聞社の政治部長のハダウエイ氏と対座していた。

「ファタハというものは、そもそも何ものなのでしょう。知つていただけ話してほしいのです。何しろ、一月一日にこちらの新聞にこの名のグループが名乗りをあげてからというもの、パレスチナ人たちの武装ゲリラ集団が、どんな活動をするのか、どんな背景をもっているのか、アブ・アンマールという指導者は何者なのか、これらの問題をめぐつてパリでも様々な情報が流れました。私の新聞社でもベイルート支局に情報を求めたが、詳細はつかめないというので、私がアルジェリアのFLN(民族解放戦線)の取材経験をもっているからという理由で私を派遣したのですが……。とにかくパレスチナ人の中でも有能なジャーナリストであるあなたの助力を得ないと何もつかめないの、何なりと知っておられるこ

とを話してほしいのです。」

ミッシェル・クロードと名のつた特派員は、真剣な眼でパレスチナ人のジャーナリストのハダウェイ氏に迫った。彼は、政治部長の地位にあるとはいえず、パレスチナ人であり、しかも、彼自身は、社内誰れにも言っていないが、実は、フアタハのメンバーの一人である。どこまで、この特派員を信用すればいいのか、全く判断がつかない。フアタハに関するごくありふれた説明をしたところで、このベテランの特派員を満足させるものではないことは十分すぎるほど知っているのだが。迷っていると、ベテランの特派員は、一方的に語り始めた。

「アルジェリアのFLNが始めて西側の新聞に出た時は、大変なものでした。今回のフアタハについては、しかし、もっと激しい動きがあったのを知っています。私たち報道陣よりも早く各国の情報機関が調査員をタマスカスやベルルトに送りました。調査の対象は、もっぱらフアタハの幹部たち、とくに指導者と目されるアブ・アンマールです。私たちの取材では、本名はヤセル・アラファートで、一九二九年エルサレム生まれ、ガザで生まれたという説もあり、カイロ説もあるときいているので、この点はあなたにうかがいたいのですが……。カイロ大学の

工学部出身で、パレスチナ学生同盟のリーダーであった、このくらいは判明しています。」

クロード特派員は更につづけた。「ナンバー2は、アブ・イヤードで本名は、サラハ・ハラフで、彼は一九三三年のジャーファ生まれ、カイロ時代にアブ・アンマールと知り合った。ほかにアブ・シハードやアブ・ルトウフがいる。アブ・シハードは昨年、アブ・アンマールとともに中国を訪問している。」

クロード特派員は、どこで入手したのか、かなり正確な情報をひとわたり被瀝してから、こう語った。

「私は、以前に社会部でパリ警察を担当したので情報機関がどんなファイルを用意して、政治指導者を調査するか、おおよそのことは知っているのです。調査対象にされた政治指導者の履歴はもちろんですが、その人の弱点、好み、対人関係、性格、コンプレックス、特に弱点につながることは、性格上のものであれ、女性関係であれ、徹底的に洗い出すのです。交友関係も、出来る限り完全に知る必要があるのです。つまり、その政党なり集団なりの影響力や力量を減じため、一見ささいなことでも決定的な力を発揮することがありますから、ゆるがせにはしないのです。」

ハダウェイ氏は、内心では、もつともなことを言うものだ、うなずきながらも、どのようにして本題に入るべきかを決めかねていた。特派員は、更に流れるように話をつづけてゆく。

「つまり、フアタハの指導者たちについても、おそらくアメリカのCIAやイスラエルの諜報機関モサドなどが調べているのは、それぞれの生いたち、交友関係、性格や性癖、コンプレックスなどの性格的な弱味をはじめ、食べ物は何を好み、どこで食事し、どんな女性関係があるか、宗教的背景は何かなど徹底したものでしょう。私は諜報員ではなく、一人のジャーナリストですから、人間的関心として、そうした興味はないわけではありませんが、そうした面でのことを知りたいとは思いません。ただ、私が今回の社の仕事を積極的に受け入れようという気になったのは、別の理由があつたことです。アブ・アンマールとフアタハの指導者たちの群像をまとめて本を出版するようになり、パリの出版社から依頼があつたためです。」

人間アラファートへの興味

ここまでの話をきいていた政治部長の顔には、ようやくほっとしたという安堵感がながれ、何もかも見ぬいている一人てきたものの典型であつた。

「リーダーズ・ダイジェスト」誌などがアラファート議長の人物評伝をとりあげたのも、今日の政治指導者の人間記録としての興味からではなかった。しかも、日本の中東専門家と称された人たちの中にも、「テロリストの首領」としてのアラファート像を増幅させることに未だに手を貸している者もいる。二年ほど前に日本で発行された「国際テロの時代」(注)という本などは、その具体例であろう。

アラファート議長の一挙一動を観察している西側のジャーナリストたちの興味は異常なまでに、個人的な側面にだけ注がれる。「パレスチナ革命と結婚した」と断言してははからぬアラファート議長なのに、西側のジャーナリズムは、最近、結婚説をふりまいたことがある。根源をたどってみると、ある会議で議長の側近の女性秘書の一人の仕事ぶりを称賛したことが原因であつたという。

そうしたプライバシーを追求するのに血まなこになっている西側のジャーナリズムだが、痛ましい最近のアラファート議長への首のコレットについては、どんな称賛のエピソードも書かない。首のコレットの原因は、イラク・イラン戦争である。紛争の解決にバグダード、テヘランと駆けめぐるアラファート議長だが、

の誠実なジャーナリストの求めに応じて、ようやく語りはじめた。

「実は、私は、アブ・アンマールと親しい関係にある友人を持っています。アブ・アンマールの人柄についてのエピソードでしたら、いくつもお話できるものがあります。しかし、その前に、パレスチナ解放運動の旗手たちの群像を描き出すとするあなたが抱いておられる疑問に答えておきたいのです。つまり、フアタハの歴史から言っても、十数年になるわけですから、もうそろそろ指導者たちの回想録に類するものが書かれてもいい頃じゃないかとお考えのようですが、これは、あと何十年も待っても徒労に終るでしょう。なぜなら、フアタハの指導者の間に唯一の規律があるとすれば、それは、自分を美化したりしないことなのかもしれないからです。」

パレスチナ人ジャーナリストのハダウェイ氏が強調したのは、フアタハの指導者たちが自己を語らないのは、クロード氏が説明した、敵に対する警戒心からという点を肯定したうえで、なおかつ規律であるよりは、それが、パレスチナ人が置かれてきた条件に寄るものであつたということである。祖国を追われたパレスチナ人たちは、いかに自分を飾りたてようとも、国籍を奪われた「難民」という

昨年の秋に、モスクワからソ連の国境の山岳地帯を経て五千キロもジープで往復してテヘランとバグダードに走った。その時のむちうち症なのだが、「イイ戦争の解決に東奔西走のPLO議長」の記事は見あたらなかった……。

再び話をベルルトの新聞社の応接室にもどすと――

「さてクロードさん、アブ・アンマールの人柄について、私が知っているエピソードをお話しましょう」と言って、ハダウェイ氏は、語りはじめた。パイプをくゆらせていたクロード氏は、身をのり出して、取材用のテープ・レコーダーにスイッチを入れた。

「あなたの取材ノートには、すでに書きまれていることですが、アブ・アンマールの大きな略歴からお話してみます。それから、エピソードに入りますから。アブ・アンマールは、一九二九年にエルサレムに生まれました。」

ハダウェイ氏は、ゆっくりとした口調で語りはじめた。

注 「国際テロの時代」村松剛氏の編で、一九七八年、高木書房から発行された。座談会形式でまとめられたものだが、これに参加したのは、倉前盛道、堺屋太一、石田友雄、香山健一、佐瀬昌盛の各氏らである。

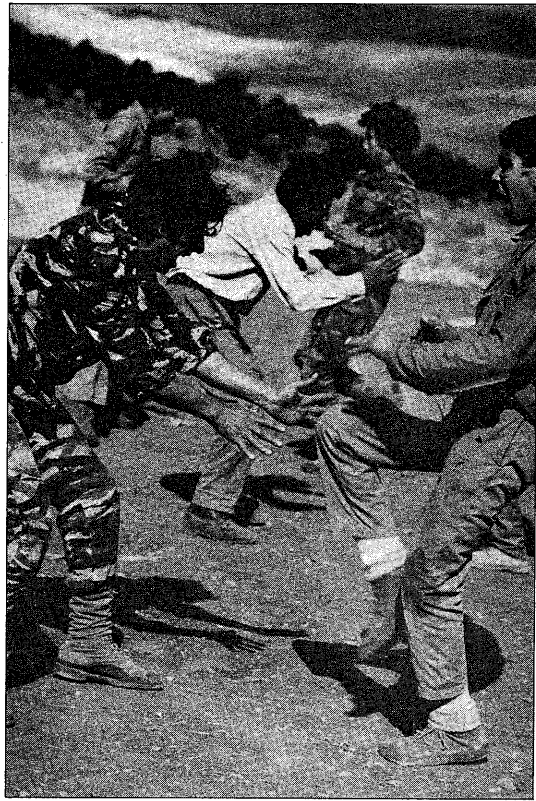


もちろん誤解されてはならないのは、自分のおかれた状態を三十数年前までの過去のパレスチナにあつた豊かで、平和な生活との対比でふりかえるという、一

レットルを貼られた「非市民」であつた。過去の自分を、いかに美しく語ろうとも、「難民」という条件のもとに置かれた自分をいささかも変えるものではないからである。しかも、このことは、指導者であるうとなかうと変らないもの。従って自己を語るということが、パレスチナ人たちの場合には、人間としての名誉と尊厳を奪われた自分たちの厳しい現実を、なお一そう鮮明に浮かびあがらせることではあつても、自分自身の個人的な名譽を高めることにはならない。これは、パレスチナ人であることが、それほどの厳しさを現実的には持っていることに気づいてほしいとハダウェイ氏はフランス人ジャーナリストに語った。

一般的な意味での想い出や回想を拒否するといふものではない。パレスチナ文学の先駆者たちの作品では文学的な営みとしての回想という形式がある。失われ、奪われたパレスチナの懐しい風景だけをキャンパスに再現している画家もいるし、半身不随の車イスの画家のイブラヒム・ガンナム氏は、そうした画家の代表である。ことはよく知られている。今日でも、アラファート議長の評伝がPLO内部で書かれていない背景には、ベトナム革命を導いたホー・チ・ミンが自らを語らなかつたように、革命家としての謙虚さを失うまいとする規律性の結果であると同時に、パレスチナ人であることから生じてくる、こうした事情が背後にあることを知るべきだろう。さらに、あることを知るべきだろう。さらに、パレスチナ解放運動の各組織体内部におけるあり方は、個人尊厳を生み出す土壌とは異なるものがあると言えらるほど、自立性をもっており、民主主義と平等が貫かれていない理由であらう。

ところが、こうした背景を全く無視して、西側のジャーナリズムでは、人間アラファートに関する興味は旺盛である。かつて残忍な「テロリストの首領」というアラファート像は、シオニストたちが支配する西側の報道媒体を使って流しつづけ



イツの知的、科学的世界は、ユダヤ人市民の参加がなかったら、今よりずっと貧困だったであろう」と述べたそうだが、この論旨を援用すれば、「今日におけるユダヤ人の生活と文化は、イスラエル国内であれ、また外界であれ、その多くをゴールドマンに負っている」とつけ加えることができる(『N・O誌』)。

ドイツのマルテブルク、ベルリン、ハイデルベルクの諸大学に学び、哲学博士と法学博士の学位をもつ超インテリで、一九三三年から三三年にかけ、「ユダヤ百科辞典」をベルリンで刊行している。このような学問的業績を残すかたわら、ドイツ・シオニスト連盟執行委員、シオニスト行動委員会委員となり、三四〇四年、国際連盟(ジュネーブ)のユダヤ機関代表、同時に三四年以来世界シオニスト機関およびユダヤ機関の執行委員を務め、四一年にアメリカに移住後は在米ユダヤ機関代表、そして第二次大戦後の四八年には国連のロビーで、困難をきわめたイスラエル国創設の交渉を担当した。

彼はまた一九五二年、西ドイツとの賠償協定の成立に主要な役割を演じた。これはナチ政権時代のユダヤ人迫害の責任を西ドイツ政府が引き受けて謝罪したもので、その巨額の賠償金はイスラエル経済の復興に大いに貢献している。そして五六〇六八年世界シオニスト機関議長、また七八年高年齢を理由に辞任するまで、世界ユダヤ人会議の議長を務めた。

この前書きにひかれて私はゴールドマン論文を注意深く読んだ。N・O誌に掲載された論文は、アムステルダムにおける自分の講演の内容をまとめたものか、あるいは演説草稿そのもので、西ドイツの有力週刊誌にも掲載されている。こうした状況からみれば、このゴールドマン論文は、七十年におよぶ政治活動の末に八十五歳の誕生日を迎えたシオニストの最長老が、祖国と世界の同胞とに当てる遺言のように私には思えた。論文を忠実に訳して発表しようと思いついたのはそのためである。

「イスラエルには定住せず、現地では論議的になつてゐる人物ではあるが、ゴールドマンは最近ではイスラエルの指導者たちとその政策を大いに批判し、イ

後輩に当たる。しかし彼はイスラエルの建国以来、次第にベングリオンと意見を異にし、少数派の道を歩み出す。『建国の英雄たち』が拡大主義政策をとり続けるのに対し、これ以外に祖国の生き残る道はないとして、イスラエルの中立化構想を打ち出したのだ。

特集

イスラエルに未来はあるか

イスラエルの将来という問題が深刻に問われはじめてきた。アメリカの最新兵器で武装したイスラエル軍隊をもつ、国際的なシオニズムの支援と西側世界の支持をほしいままにしたイスラエル。だがシオニズムの神話はくずれてきた。「アメリカが、アラブの石油のためにわれわれをいつ身売りするかも知れないのに、あと何年間アメリカの援助を確保できるというのか」とは、シオニストのダヤンの発言であった。世界ユダヤ機関の元会長ナフム・ゴールドマンも、こうした現実を憂慮する発言を行なっている一人である。果たしてユダヤ機関の指導者の見るイスラエルの将来とは……。

最長老シオニストの悲観論

ナフム・ゴールドマンの論文によせて

牟田口義郎 (朝日新聞論説委員)

昨年の八月初め、定期講読しているパリの進歩的週刊誌『ヌーベル・オブセルバトゥール』(以下N・O誌)の七月十九日号に、世界ユダヤ人会議のもと議長ナフム・ゴールドマン(Nahum Goldmann 一八八五-)が三ページにわたる論文を発表しているのを見て、その健在ぶりに驚いた。N・O誌は日本の週刊グラフ誌ほどの大判だから、このエッセーは相当の長文で、しかもタイトルは「なぜ私はイスラエルがこわいか」という衝撃的なものだった。シオニズムの発展とユダヤ

人国家の建設に重大な役割を果たした彼が、晩年に当たり、どうしてこのような悲観的な論文を発表するのだろうか。これがそのとき、私をとらえた最大の疑問だった。

N・O誌によれば、七月八日、オランダのアムステルダムで、ゴールドマンの生誕八十五年を祝う式典が盛大に催された。この式典に出席した西ドイツのシュミット首相は、記念演説のなかで、「ド

越性に血道をあげるならば、アラブ世界との真の平和を手に入れることはない、断崖が待つ坂道を下り続けるだろう。とゴールドマンは予見する。イスラエル国民の相当数は、この危険路線を走る列車に乗り合わせていることに気がついて、安全路線に乗り換える勇気をまだ持ち合わせていない。諸大国が、そして何よりもアラブが公然と立ちほだかっ、イスラエルが世界政治に口を出すようなことはさせない、そういう中立国家にすること。「この解決案はアラブ人、ユダヤ人そして世界にとって最良のもの」と彼は熱っぽく説く。

なぜ私はイスラエルがこわいか

——最長老シオニストの証言

ナフム・ゴールドマン
訳 牟田口義郎

I イスラエルの現状

一九八〇年五月、イスラエルですごした数週間が終わった時ほど、私は動転し、憂慮し、思い乱れたことはない。国は完全な分解状態にあった。全面的な無政府状態から今のところまで免がれていたのは二つの機構で、そのひとつは客観的な司法制度、これは政治に影響されず、また腐敗してもしない。次は軍隊であつて、士気は衰え始めてると主張している者もいたが、これについては私に判断することはできなかった。それ以外は、イスラエルでは永続しきつてもない状態にある。政府はまったく権威を失っているし、政府の会合では閣僚達は非難の応酬に終始し、その詳細は数時間後の新聞に報道されている。首相は、どの世論調査でも、もし選挙があれば二〇から二五パーセントしか獲得しないだろう。またインフレは今年は一五〇から二〇〇パーセントに

なくとも消滅すると思っているからで、彼らは将来、平和を受けられる気には全くならないようになるかも知れない。そして最後には、西岸地区のアラブに対するユダヤ人の暴力行為と、穏健ユダヤ人の政党・政治家に対する脅迫があつて、これらの事件は、ユダヤ人のテロ・グループが、軍から盗んだか、軍内部の共犯者から渡されたかした、武器を使っていることを証明している。このため、もし政府が変わるか、あるいはジュニア・サマリア地区（ヨルダン川西岸地区の聖書名）におけるユダヤ人入植地の設立に関する政策が修正されれば、イスラエルには真の内乱が突発するかも知れない。このような状況の責任者は、首相よりもはるかに彼の政党、および国民の態度である。メナヘム・ベギンは、生涯を通じて説きかつ求めてきたことを実現しようとしている。ところが、イーガル・ヤディンその他のパートナーたちは、選挙になれば閣僚に留まる機会が全くないことを知っているから、現状についてベギン自身よりもはるかに責任者なのだ。

イにおける重大な譲歩への見返りとして、サダトが西岸地区についての白紙委任状を自分にくれることを期待した。一方サダトは石油と戦略的要衝をもつシナイの

II ユダヤ思想とユダヤ国家

ただし、私の目的は、イスラエルの内政・外交を詳細に批判することではなく、歴史的視点から現状を考察することであるから、現在のイスラエル国という形のもとにシオニスト思想が実現したことが価値あることであるかどうか、また、この国家が長続きするものであるかどうかを問い正してみなければならぬ。それは、とくに私のようにシオニストとしての過去をもっている男にとつて、とりわけつらく、また心を揺さぶる問題だ。とはいえ自分はシオニスト思想は現世紀を通じてもつとも大胆かつ創造的な思想のひとつと考えているけれども、単なるシオニストではないことをとくに強調しておきたい。

返還を何よりも望んだが、それはアメリカが後で、必要な譲歩をパレスチナ人にするようイスラエルに説得することを期待したからであつた。

この特異な性格を受け入れ、ユダヤ人の存在は諸国民の生活の物差しからはずれているということを認めて、はじめてわれわれは数千年にわたるユダヤ人の歴史のなかで、彼らの宗教的・文化的・社会的実現を理解することができるとだ。

ユダヤ人の二千年来の郷愁のなかではほんの小さな役割しか演じていなかった。古代においてユダヤ人がつくった二つの国家はそう長くは続かなかつたし、その十数人の王はダビデとソロモンを除いてほとんど忘れられている。それは前者が「詩篇」を、後者が「雅歌」を書いたからであつて、ユダヤ人が記憶にとどめたのは王ではなく、予言者なのであつた。第二神殿の破壊後、ヨカナン・ベン・ザカイという男がテイトス帝からユダヤ法教育のための学校をヤウネに建てる許可を得た。ここからタルムードやユダヤ法典が生まれ、これらが以来何世紀にもわたり、朝起きてから寝るまでのユダヤ人個人の生活および全世界におけるユダヤ人社会の集団的存在を規正している。シュルハイン・アルークと呼ばれるこの法典は、ハインリッヒ・ハイネの定義を借りれば、ユダヤ人が「持ち運びできる祖国」だつた。教義を守るユダヤ人がシオンへの回帰を一日に三度祈るとき、念頭にあるのはエレツ・イスラエルであつて、必ずしもイスラエル国家ではなかつたのである。

一見してシオニストの見解はドンキホーテ的に見える。ある人民が、自国をはなれてから二千年も忠誠を示し続け（ローマ人が紀元七〇年に神殿を破壊したとき、ユダヤ人の大半は、すでにディアスポラのなかに暮らしていた）離散し、迫害されているのに、一日に三回もシオンへの回帰を祈つたという事実は、人類の歴史において他に例がない。ユダヤ教の

この特異な性格を受け入れ、ユダヤ人の存在は諸国民の生活の物差しからはずれているということを認めて、はじめてわれわれは数千年にわたるユダヤ人の歴史のなかで、彼らの宗教的・文化的・社会的実現を理解することができるとだ。

ユダヤ人の存在はユダヤ信仰のこの三位一体性に基礎をおいている。現代シオニズムの創設者テオドール・ヘルツェルは、ユダヤ人を迎えるのである。ユダヤ人はユダヤ人を選んだもつたのであつて、これら二つのテーゼはメシア、ユダヤ人ばかりでなく全人類にとつての救済者、そしてだれよりも先にユダヤ人をその国へみちびくメシアの到来という事態によつて大団円を迎えるのである。

ユダヤ人の二千年来の郷愁のなかではほんの小さな役割しか演じていなかった。古代においてユダヤ人がつくった二つの国家はそう長くは続かなかつたし、その十数人の王はダビデとソロモンを除いてほとんど忘れられている。それは前者が「詩篇」を、後者が「雅歌」を書いたからであつて、ユダヤ人が記憶にとどめたのは王ではなく、予言者なのであつた。第二神殿の破壊後、ヨカナン・ベン・ザカイという男がテイトス帝からユダヤ法教育のための学校をヤウネに建てる許可を得た。ここからタルムードやユダヤ法典が生まれ、これらが以来何世紀にもわたり、朝起きてから寝るまでのユダヤ人個人の生活および全世界におけるユダヤ人社会の集団的存在を規正している。シュルハイン・アルークと呼ばれるこの法典は、ハインリッヒ・ハイネの定義を借りれば、ユダヤ人が「持ち運びできる祖国」だつた。教義を守るユダヤ人がシオンへの回帰を一日に三度祈るとき、念頭にあるのはエレツ・イスラエルであつて、必ずしもイスラエル国家ではなかつたのである。

ユダヤ人の存在はユダヤ信仰のこの三位一体性に基礎をおいている。現代シオニズムの創設者テオドール・ヘルツェルは、ユダヤ人を迎えるのである。ユダヤ人はユダヤ人を選んだもつたのであつて、これら二つのテーゼはメシア、ユダヤ人ばかりでなく全人類にとつての救済者、そしてだれよりも先にユダヤ人をその国へみちびくメシアの到来という事態によつて大団円を迎えるのである。

ユダヤ人の存在はユダヤ信仰のこの三位一体性に基礎をおいている。現代シオニズムの創設者テオドール・ヘルツェルは、ユダヤ人を迎えるのである。ユダヤ人はユダヤ人を選んだもつたのであつて、これら二つのテーゼはメシア、ユダヤ人ばかりでなく全人類にとつての救済者、そしてだれよりも先にユダヤ人をその国へみちびくメシアの到来という事態によつて大団円を迎えるのである。

III ヘルツェルの天才と後継者たち

これらすべてのことに関する知識がほとんど欠けていたヘルツェルは、この全く複雑なユダヤ人問題を天才的なやりかたで単純化し、新しくそして創造的な、まただれにでもできる方法で検討した。



たまちがつていることさへあるのだが、やがて巨大な結果を生むひとつの断絶をもたらしたのだった。

ヘルツェルはこの意味における天才である。もし彼がユダヤ人問題の複雑さをすべてわきまえていたのなら、彼は「ユダヤ国家」を書く勇気を決して持つことはなかったであろう。「国なき民を民なき国へ連れて行く」ことが大事なのだと言ったとき、彼はこの問題を単純化し、いうならば輸送問題として定義した。これは二つの点でまちがっている。十九世紀末において、西ヨーロッパやアメリカのユダヤ人は国なき民ではなかったし、パレスチナは数十万のアラブが住んでいたから民なき国ではなかったのである。しかし、ヘルツェルの、このみごとなきキヤッチフレーズはユダヤ人の大部分にとつて、まことに魅惑的なものであった。ほかの連中すべてのように国家をもつという思想、独自の軍隊・国旗その他をそなえた主権国家をもつという思想は、東ヨーロッパの小さな町々で迫害され、辱められてユダヤ人にとつては、とくに魅力あるものであった。

同化思想なのであった。しかしながら、ヘルツェルの思想が勝つたのは、その単純性、そして他の国家の形態とびつたり一致していることのためである。一九四八年、ベングリオンはヘルツェルから吹き込まれた「国家」の樹立を宣言した。もともと彼は、この国家が単一性という性格をもたなかったら長続きしないと、口をすっぱくして語っていたが。

今日、イスラエルの与党は、この思想を極端にまで応用している。ベギンは宗教にこつたユダヤ人であり、彼が国内の狂信的正教徒派に行つた譲歩が、近代国家にとつてがまんならぬものであることは事実だが、彼の「大イスラエル」と

IV ホロコーストとアラブ

アラブとの和解を得ることをまじめにやらずに国家の樹立が宣言されたのだから、そこから当然生まれてくる結果を受けとめなければならぬ。独立戦争の後にはスエズ戦争、六日戦争（一九六七年六月）、そしてキブル戦争（一九七三年十月）があつて、平和は樹立されるどころか、ますます不確実になりつつある。経済的・社会的そして倫理的な現状のなかでの否定的な面については、イスラエルの政策が依存している基礎から生まれている。国家の樹立宣言以来、パレスチナの住民がキブツをつつたりしていた

いう構想、そして西岸の占領地の事実上の併合が、ベングリオンの政策の過激な永続であることもまた事実である。一九四七年の国連で、共産主義国も民主主義国も、パレスチナの分割とユダヤ人国家の樹立に賛成票を投じたあとで、私はベングリオンに向かい、国家の樹立宣言を何週間か延ばし、アラブの了解をとりつけることを提案した。エジプトが場合によつては、われわれと取引に応じるだろうとおおむねの徴候がいくつあつたからである。しかしベングリオンは、パレスチナ在住のユダヤ人の熱狂が頂点に達しているから、これ以上待つことはできないといつて私の提案を拒絶した。

V 中立イスラエルの構想

イスラエル国民の相当数は、過半数とはいわないまでも、このことをどうにか理解し始めてはいるが、公けにそれを認める勇氣をもっていない——という印象を私はもつた。この心理状態を明らかにする笑話がある。汽車旅行のユダヤ人が駅に着くたびに窓ごしに外を見て、駅名を読んでため息をついている。四つか五つ駅をすぎてから、なぜそんなにため息をつくのかと相客がきくと、答えはこうだつた。「何度たしかめても同じなんです。私は行先をまちがえている」多くのユダヤ人も同じ気持ちなのだが、汽車を乗り換える勇氣がない。それでは？ 私にとつて唯一の出口は、イスラエルを別の形の国家に変えることであるように思える。すなわち完全中立の国家——危険に陥つた少数ユダヤ人を救わなければならなくなった場合を除き、諸大国が、そして何よりもアラブが公然と立ちあがらなかつて、イスラエルが世界政治に口

である。しかし、もしイスラエル国が権力についてのこの新しい感情を身につける代わりに、何よりもまず安全と軍事力と優越性に血道をあげ続けるならば、この国はアラブ世界との真の平和を手に入れることはないし、いま立っている坂道を下り続けることだろう。その行先は断崖以外にはない。



になる。たえざる迫害、ユダヤ人がユダヤ人性を忘れることの不可能性、これらうけつゝ連帯性の感情が一方にあり、ユダヤ教の偉大な力、ユダヤ人の個人および共同体を支える律法が他方にある。こ

の二つの偉大な挑戦のもとに、イスラエルの存在は、ユダヤ民族が生きてつづけ、新しい思想が創造される新しいセンターであり、ディアスポラ・ユダヤ人の挑戦とインスピレーションの源泉となる。

イスラエルはユダヤ問題を解決できるか？

吉田 悟郎 (中央大学法学部講師)

ディアスポラ・ユダヤと国家

N・ゴールドマンには、一九七〇年「オリオン・アフエアーズ」48号に発表された「イスラエルの未来」があり、この一九八〇年「デイ・ツァイト」に発表された文章と読みあわせてみると、素人にもいくらかゴールドマンの論旨、考えているところがわかる。もっとも、私はシオニズムの研究者でもなければ、観察者でもない。パレスチナ問題とユダヤ人問題、この二つの問題が明らかに今日の核となっている世界史と人類史の未来と存続の問題を考えていく場合に、どうしてもぶつかる壁がひとつシオニズムであり、これがそう簡単に片づけられるものではないことを感じている学習者であるにすぎない。

ゴールドマンの書いたものも、十年前の「イスラエルの未来」と今度の「デイ・ツァイト」の論評の二つしか読んでいないわけであるから、ゴールドマンの考え、立場についてもひとつの臆測・推定を試みてみるにすぎない。

ゴールドマンは、シオニストのパイオニアであり、実際シオニストとしての活動家でもあったから、彼の立場、基本は明快である。「世界に離散しているユダヤ

民族の大部分が、自らの運命の主人公たっている自らの民族的郷土に集結すること、数世紀にわたる「ユダヤ人問題」とよばれてきた問題を解決する唯一の道と思われる」そしてユダヤ民族とは「人種・民族・宗教で定義づけることほども不完全」で「それらのジレンマ」なのであり、ユダヤ民族およびユダヤ民族の歴史の特徴は「シオニストの理念によってのみ説明される」とする。

さらに、彼は「イスラエルの未来と存続を決める二つの条件」として、イスラエルとこれをとりかむ巨大なアラブ世界との関係、イスラエルとまだ大部分が世界に散在する「ディアスポラ・ユダヤ人」との関係をおぼえ、この二つの関係がうまくいかどうか、イスラエルの運命を決定するだろうと考える。そして、前者については、アラブの光栄ある歴史と文明と今日におけるアラブの出生率、人口増加などに注目し、アラブの次の世代は平和においても戦争においても欧米の技術と知識を搾取して質量ともに容易ならぬ文明をもつであろうことを予想する。アラブ世界の了解、それとの妥協と和解、「アラブ・イスラエルの共存」なし

「全体としてのユダヤ民族の生存にとっても、イスラエルの未来という観点からしても、ユダヤ・イスラエルの関係、イスラエル国家とディアスポラ・ユダヤ人の個人および共同体とを結びつける紐帯の関係は、シオニストによるユダヤ人問題の解決が成功か失敗かを最終的に決めるナンバー・ワンの問題であるといつて過言ではない。ドイツ系市民やイタリア系市民が、アメリカや南米の社会に同

シオニストの限界性

ゴールドマンは、その活動経歴から見ても、アラブ理解の二、三を見ても、いわば知アラブ派のシオニストであろうか。けれども、彼はやはりシオニストであり、シオニズムを否定しているわけではない。

だから、十年前も「イスラエルとアラブの共存」は説いても、「両民族連合のユダヤ・アラブ的パレスチナ国家」ではだめだといひ、あくまでも「ユダヤ的性格をもった国家」を強調している。完全中立のイスラエル国家を、と掲げているのも、ここからきていることは注意しなければならぬ。つまり、ゴールドマンの考え、立場は、十年前も今日も「ユダヤ人は、自らのアイデンティティと文明を保証するために自らの国家を持たねばな

には、イスラエルの存続も未来もありえないことを、ゴールドマンは知っている。アジア「第三世界」の方から見ると、ゴールドマンが前者としている関係の方が重要であり、また大変な問題があるのだが、彼はどちらかといえば、後者「ディアスポラ・ユダヤ人」とイスラエルとの関係」に重きをおいている感じがする。これは、シオニストばかりか、欧米人のユダヤ人問題観の原点でもあろうし、アジア「第三世界」から見ても、その処理場に一方的にされてきて、さらに新たにされようとしているという過去・今日・未来にかけて、やはり重要な問題だということでもある。

十年前ゴールドマンは、イスラエルのイメージが戦争国家・軍事国家・膨張主義に落ち、傷つき、世界でも進歩的なグループはイスラエルに失望し敵対し、反動的な国家主義的なグループのみがイスラエル支持にまわっている、とし「西側諸国におけるユダヤ人の大量迫害のような、何か予期せざる悲劇的なことでも起らぬ限り、近い将来、欧米諸国の多数のユダヤ人がイスラエルに移住する可能性はない」と述べている。そこで恐らく、そしてなおさら、イスラエルの存続と発展が、世界全体に散らばる全体としてのユダヤ民族の存続にとって決定的に重要

化しても、それはドイツ民族およびドイツ国家、イタリア民族およびイタリア国家それぞれの存在には危険はない。「しかし、もし、ディアスポラ・ユダヤ人が、各国に同化してしまつて、イスラエル国家への関心を失えば、イスラエルの存在はほとんど不可能となるだろう。世界のユダヤ人の連帯と協力なしには、イスラエル国家の存在はないだろう」

らぬという信念において、私は常に政治的シオニストであった。だからこそ、一九八〇年五月現在のイスラエルの現状を憂慮し、批判するのである。

一九八〇年後半現在、戦時体制下のイスラエルの、世界一のインフレ、生活に疲れ切っている市民、口数が少なくなつた留学時代の友人たち、厳しい生活に耐え切れずアメリカへの移民ビザの申請に早朝から長い行列をつくる人々、観光ビザで出て行つても職が見つからずアメリカで永住権を求める人がほとんどという、報道は、日本の新聞にもものついで（毎日、一九八〇・十二・十一）。ゴールドマンの警告と批判は、きわめて厳しく、これが真実とすれば、シオニ



ストの責任を問う最悪事態を示しており、私たちがすれば当然このような事象も起りうるのではないかと想像したような状態が急ピッチで進行しているのではないかと、ということを示している。だからこそ、ゴールドマンは、このように厳し

孤立と退廃のユダヤ国家

「最悪なのは社会道徳である。これはこれまでイスラエルの最大の誇りであったのが、今や退廃している。犯罪、買収、組織的マフィアが日常茶飯事になり、国民の多くが脱税をやっている。また、金をもうけ続ける少数、わずかな収入でやと飢えをしのいでいる多数との間の断絶が深まっているのに気がつく。そして、世界の中で、イスラエルは孤立し、国際機構のなかで受けていた支持は、アメリカの場合を除いては、減少する一方である、という。他人事ではない感じのする警告ではある。「ユダヤ人の歴史を仕上げるため、そしてユダヤ人問題の解決策として、評判が悪くなるばかりの、攻撃的な、そして小さなユダヤ人国家をつ

隠へいされたものは何か

た。そこで虐殺されるような不合理な殺され方をするようユダヤ人は、ユダヤ人の国家をもつことができれば、そのよくなバカバカしいことはおこらないだろうと。ここでは社会全体のもっているユダヤ人差別は隠へいされてしま

くイスラエルの現状を批判することによって、世界のユダヤ人とその同情者の奮起を期待し、行きづまったイスラエルの前途を開き、シオニズムの起死回生をはかろうとしている、とも考えられる。

「最悪なのは社会道徳である。これはこれまでイスラエルの最大の誇りであったのが、今や退廃している。犯罪、買収、組織的マフィアが日常茶飯事になり、国民の多くが脱税をやっている。また、金をもうけ続ける少数、わずかな収入でやと飢えをしのいでいる多数との間の断絶が深まっているのに気がつく。そして、世界の中で、イスラエルは孤立し、国際機構のなかで受けていた支持は、アメリカの場合を除いては、減少する一方である、という。他人事ではない感じのする警告ではある。「ユダヤ人の歴史を仕上げるため、そしてユダヤ人問題の解決策として、評判が悪くなるばかりの、攻撃的な、そして小さなユダヤ人国家をつ

私がいっしょにユダヤ人問題・パレスチナ問題を学習している学生たちは、次のように疑い、考えはじめています。「ユダヤ人であることの誇りは、差別と表裏一体の関係にあるという。現在の自

己の悪業を隠へいするイデオロギートもあつた。このようなイデオロギートがヒトラーに虐殺されたユダヤ人のためにすりかえられ採用されたとしても、ほとんど違和感はなかつたろうと思われ。ユダヤ人問題も、実はこの歴史の状況の中で、皆が「解決した」と思いこむような擬似的解決をあたらされたものではなからうか。そこで隠へいされたものをも一度ほりかえずのは大変なことだ。しかし、ヨーロッパに限定されたユダヤ人問題より、中東に押しひろげられたユダヤ人問題はますますこんがらがってしまった。

私は、この問題に解決を与えるほどの知力はないが、少なくともこの問題に真

紛争はアメリカの選挙後激化することになろう。そのころ、イスラエルと欧米間の抜きさしならぬ対決が顕在化しよう。」「もしイスラエル国が国家の権力についてこの新しい感情を身につける代わりには、何よりもまず安全と軍事力と優越性に血道をあげ続けるならば、この国はアラブ世界との真の平和を手に入れることはないし、いま立っている坂道を下り続けることだろう。その行先は断崖以外にはない」

十年前、ゴールドマンは「戦争状態のイスラエルは、数千人の義勇兵をひきつけることができるが、現在の生活状態に不満で、もつと理想を満たすような生き方を求め、イスラエルへの移民の自然な候補者になるような幾万もの若者——特にあの富んだアメリカのような国の若者——をひきつけはしないだろう」と述べていた。十年たった今、流れは、むしろ逆流出しつつあるのではないか。

イスラエルとユダヤ人の関係もまたそうではないのか。ユダヤ人への差別があるから民族郷土としてのイスラエルの存在が必要であり、またイスラエルが存在するが故に、ユダヤ人への差別があるとい

不鮮明なイスラエル像

撃にとりくんでいる人々のいうことを理解し、(うまく表現できないのだが)な

すでに八十歳の半ばに達したゴールドマンが、イスラエル国家の神政国家化を慨嘆し、セキユラー(世俗)な国家に帰れと主張していること、十年前と同じくイスラエル国家の完全中立化構想を強調していることは「シオニストのパイオニア」ゴールドマンが、中東および世界の平和にとって意味ある活動のできる人物であることを示している。「イスラエルは中立であることをよって、財政的ばかりでなく精神的にも、また創造的な方法によつて本来の使命に専念することができ

る。その使命とはディアスポラのユダヤ人にとつての啓示の中心であること、また、幾世紀にもわたつて宗教が演じてきた役割を演ずることだ」しかし、ここで、よくわからないことだが、ではなぜパレスチナに「精神的・宗教的センター」を設けることではすまないのか、いけないのか、ということである。さらに、積極的にいうならば、宗教にもつて宗教によつて単一「民族国家」をつくることはかえつて宗教そのものによつてマイナスではないか、とい

うようなことはないのか? イスラエルはゲットーではないのか? 『おまえはユダヤ人だからイスラエルへ行け』といわれることはないのだろうか?」

「イスラエルが存在すること自体が、ユダヤ人への差別が存在することを示していると思う。差別がなければ、心情的・宗教的郷土としてのイスラエルはあつても、政治的国家的単位としてのイスラエルは必要ないはずだから」

「シオニズムによつてユダヤ人差別を解決しようとするれば、イスラエル以外の国家からユダヤ人を完全に消し去つてしまつ以外に方法はないのではないのか? このこと自体実行不可能であるし(ヒトラーがやりかけたが……)、もしそれが達成されたとしても、結局「差別」の構造は残っているから、第二・第三のユダヤ人問題が出現してこよう」

「私のあらつぱい考えによると、イスラエル建国の歴史状況がやはりユダヤ人問題を隠へいする可能性を派山含んでいて、少数の本質をつかんでいる者のがんばりだけでは、これを到底ふせげなかつたろうと思つた」

第一に、ヒトラーのユダヤ人虐殺は多くの人の同情を集め、その多くの人々がもっている小さなヒトラーの声を自分で聞くことができないうような陶酔をおこし

う疑問である。ユダヤ教という宗教は、もつと偉大な、普遍主義的な世界宗教である、と私は考えるのだが、いずれにしても、ゴールドマンが、「歴史を決定するものは、軍隊、物理的、経済的、政治的、力ではなく、ビジョンであり、思想であり、夢なのだ」といつていることは、歓迎すべきであり、彼がいうように、ユダヤ教・キリスト教関係の例よりも、アラブ・ユダヤの出会い、はるかに人間的であり、公正であった。それは、スペインの大アラブ・ユダヤの文明や、多くのイスラエ諸国でのユダヤ教徒共同体の生活と創造の自由の歴史に見られた。パレスチナ・アラブ・中東「第三世界」は、現代のシオニストからゴールドマンのよくなビジョンをつみださせたともいえず。やはり、十字軍とサラフツィーディーン(十字軍)の歴史は、繰返されているともいえず。このような世界史の新しい胎動に、隠へいされた危険な鋒先を向けつつある体制の方向にひたる私たちにも、ここに見られる交錯と火花は、到底対岸の火事とは思えない。

政治的シオニズム、その崩壊への道

ヘルツェルからベギンまで

前田 慶 穂 (金沢大学教授)



集団的誤解による国家成立

このゴールドマンの論文を読んで感じたことなんですが、私は、時には国民が集団的な誤りに陥ることがあると思います。たとえばナチズムがそうです。日本の軍国主義も一時期、完全なまがいがありました。ほかにアメリカも、マッカーシズムという赤狩りがあり、そのような例を挙げれば、ソビエトや中国にもいます。つまりパレスチナ問題は、誤解は、一九四八年以来、今だに続いているんです。つまりパレスチナ問題は、バルフォア宣言が元凶だと言われていますが、一番大きな問題は、ユダヤ人が国をつくってしまったことです。本来シオニズムはユダヤ人の精神的なセンターとして、ずっと考えられていました。それがバルフォア宣言で、一種の肉体的な国家の幻覚がユダヤ人たちに与えられたわけです。そのため、これが問題の出発点となりました。



もともと、バルフォア宣言では「民族の故郷」(ナショナル・ホーム)という言い方となっていて、これは非常に曖昧な表現であり、それは果たして肉体的なイスラエル国家を意味しているのか、いろいろと議論を呼びました。しかし、少なくともイギリスが公式にナショナル・ホームという言い方を与えることによって、本来、精神的で宗教的なセンターとしての役割を持っていたイスラエルが、国家という方向へ向かったわけです。ゴールドマンも言っているとおり、ヘルツェルの役割は、まさにユダヤ人たちの精神的かつ宗教的な問題を、いとも簡単にパスナリと切り捨てて、「イスラエル国家」にしたことです。

それがヘルツェルからバルフォア宣言に至って、ナショナル・ホームという形に出ています。そして一九四八年には、きわめて熱狂的な雰囲気の中で、ホロコーストが逆に作用して、全く奇妙な、伝統的な考え方からは想像も及ばないような現実の国家がつけられてしまっただけです。

シオニストであろうとならうと、ユダヤ人がそれまで小さな国をつくることを求めたことはありません。シオニズムを出てきます。そして一九四八年にそれが現実化してしまうのですが、その背景には確かにホロコーストなどの現実的なファクターがいっぱいありました。しかし、ユダヤ人たちが、本来肉体的な国家など要求していなかったのに、それがあつた状況の中で、国家という方向へどっぴと突き動かされてしまいました。ですから私はある意味では、ユダヤ人の歴史というものは、誤りの歴史だったのではないかと思います。

は本来、いわゆる近代的な意味におけるナシヨナリズムではなかったわけですね。

しかし、シオニズムがユダヤ・ナシヨナリズムに転化してしまつたところに、私は一種の状況が作りあげた、集団的国民的な誤解があると思います。この例は、さっき言ったように、日本人が奇妙だと思いつつも、いつのまにか軍国主義体制をつくってしまったことや、ナチズムも最初はいろいろ非難、批判があつても、ほとんどのドイツ人が入り込まされてしまつたことがあります。

まづことと共通しています。

もちろんシオニズム内部にも、国家というものに対して、批判する考え方がありますし、また今のイスラエル国家というものの性格について、もっと現実的な批判もあります。これは、かつてマツカーシズムの中にも、ナチズムの中にも批判があつたけれども、そういうものを押しつけて、一種の集団的国民的な幻覚が起つて、体制が完成されるさまと似ています。

矛盾の反動は必ず起こる

ユダヤ人のスピリチュアル・センターとしてのイスラエルなのか、現実的な肉体的なイスラエル国家なのかという問題は、一九四八年以後もずっと残っていたわけですね。ベギンの最大の役割として、それを完全に一つのものにしてしまったことがあります。つまりエレット・イスラエル(聖書の大イスラエル)全部が、イスラエル国家なんだというわけですね。だから、ベギンの一番大きな問題というのは、集団的な錯覚を、最終的には塗りつぶして、本来合わない二つのものを一緒にくっつけた点です。

ユダヤ人のスピリチュアル・センターである本来のスピリチュアル・センターであったことなんですが、ここでゴールドマンはまことに

ユダヤ人のスピリチュアル・センターである本来のスピリチュアル・センターであったことなんですが、ここでゴールドマンはまことに

ユダヤ人のスピリチュアル・センターである本来のスピリチュアル・センターであったことなんですが、ここでゴールドマンはまことに

にみごとな言い方をしているんです。複雑な矛盾した問題を、ヘルツェルはいとも簡単に切り捨ててしまつていっている。精神的な問題を切り捨てた。だから、そういうヘルツェルの犯した大きな誤りのところまでユダヤ人は戻らなければならぬであらうと。

を持っており、本来「アセント」(のぼつてくる、あがってくるの意味)を用いているように、本来は宗教的な言葉が、アラブ追い出しと国家づくりのために使われています。

ヘルツェルまで戻って出直すことは、ユダヤ人の平和、中東の平和のためにも必要なことです。もう一回、ユダヤ人たちが、シオニストも含めて、真剣にその問題を考え直してもらわないと困るだろうし、おそらくパレスチナ国家というものが自立した時には、そういう契機が与えられるのではないのでしょうか。それがどこまで進むかは、まだわかりませんが、それだけでも、そこまで戻って出直していかないと、その矛盾はますます広がるばかりだろうと思つておられます。それ以外に今のイスラエル国家の道はありません。

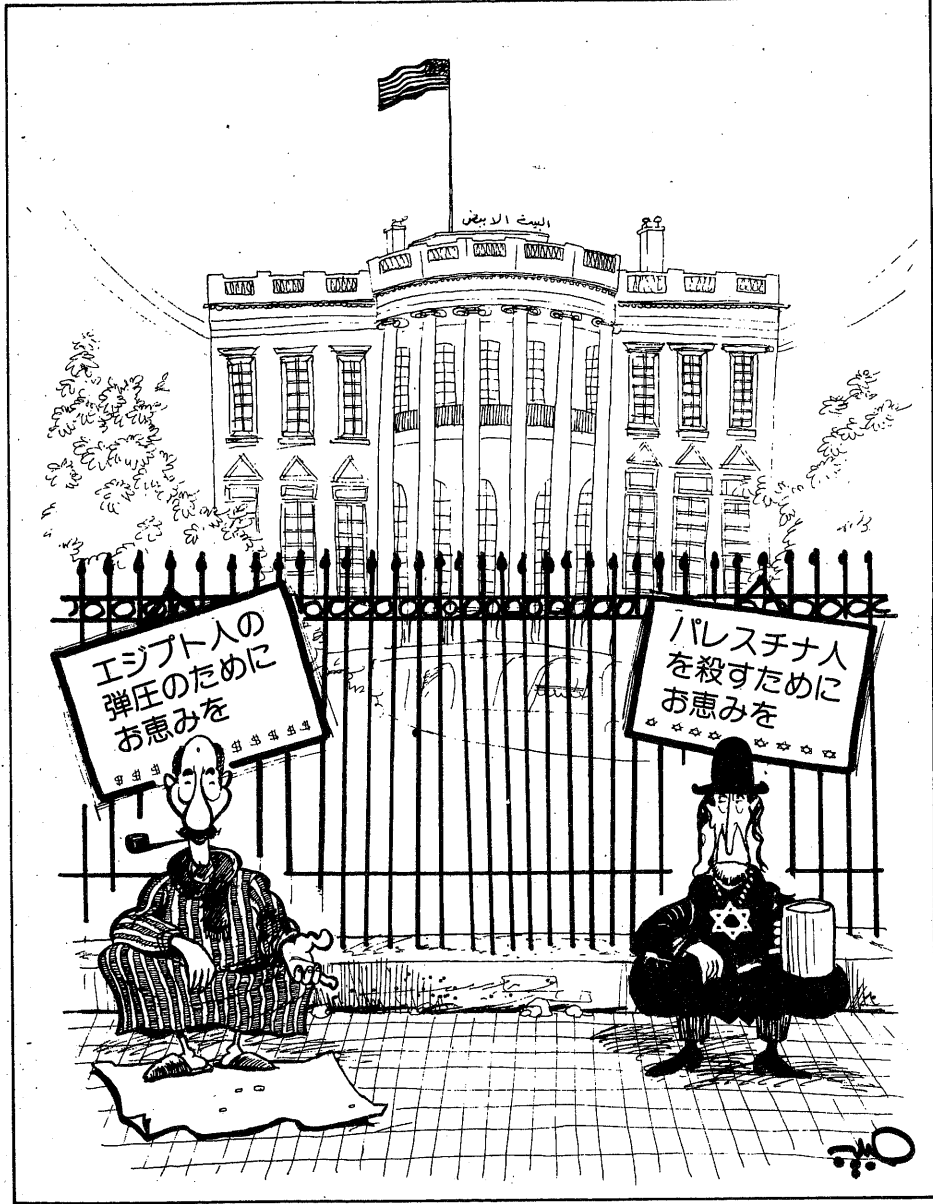
これはちょうどナチズムがゲルマン民族の神話を持ち出したり、日本が八咫一字を持ち出したりするのと同じで、ファシズムにつきもののひとつの傾向なんです。それらに共通してあるのは、それが必ず、民主的な動きに対して常に敵対的作用をすることです。

ユダヤ人のスピリチュアル・センターである本来のスピリチュアル・センターであったことなんですが、ここでゴールドマンはまことに

よくイスラエル国家が無くなるという言い方がありますが、それは正確に言うところでは、本来一緒にならない、分離すべき問題が分離するということなんです。そのことによってある場合には、国家そのものが消滅するくらいの大規模なショックを受けられるかも知れません。本来合わないものがまことに御都合主義で合わされているような国家が分離する時には、国家そのものが大きく揺さぶられるだろうという意味では、確かに今あるような奇妙なイスラエル国家の姿は、なくなるかも知れないのです。

ユダヤ人のスピリチュアル・センターである本来のスピリチュアル・センターであったことなんですが、ここでゴールドマンはまことに

ユダヤ人のスピリチュアル・センターである本来のスピリチュアル・センターであったことなんですが、ここでゴールドマンはまことに



ユダヤ人は真に解放されたのか

もちろんPLOもそのことを認めていますよ。それでもこの分離は、大きなショックを伴うでしょう。ちょうどナチズムの崩壊した時のドイツが、ある空白状況に置かれたように、あるいは日本軍国主義が崩壊した時に、一種の空間がつけられように、そういうことは起こるでしょう。

う。しかし、だからと言って、ユダヤの長い栄光と歴史は決してつぶれはしません。むしろ、世俗的なものと宗教的なものを、無理に結び合わせてしまった、非合理的な奇妙な、一種の神聖国家みたいな存在は、そのことによってもっと正常なものになるだろうと思えます。

私たちが一般的に言うシオニズムとは、政治的シオニズム、あるいはユダヤ・ナシヨナリズムのことですが、そこに問題があるわけではありません。本来のシオニズムはユダヤ・ナシヨナリズムとイコールには置かれないわけです。

けれども、ゴールドマンも言っていますが、政治的シオニズムが一番目のかたきにしたのは、同化主義なんです。そこも非常におかしいのであって、敵は同化ユダヤ人ではなくて、むしろ白人の西欧デモクラシーの中にある差別主義であり、その典型としてのナチズムであるのに、同化を一番敵視するという奇妙な現象があるんです。

ゴールドマンだけでなく、ハンナ・アレントだってシオニストです。だけれどもシオニストだった彼女だって、ユダヤ人が国家をつくるというところまで来た時に、明白に反対しています。だから真剣にユダヤ人の解放を考えている人はユダヤ人が現実的に国家をつくることで、必ずしもユダヤ人が解放されることになるとは思っていません。

しかし今は世界中で同化しているようですが、ゴールドマンが苦痛をもって述べているように、同化ユダヤ人にとって一番の問題は二重の国家——デュアル・ファイリテイ——という忠誠の問題です。その二重の忠誠とは、「ユダヤ人の国はイスラエルである。しかしわれわれは今イギリスにいる。イギリスに忠誠をつ

ユダヤ「教徒」か、ユダヤ「人」か

くすべきなのか、イスラエルに忠誠をつくすべきなのか」という奇妙な問題に到着しているわけです。これはアメリカのユダヤ人にとって非常に深刻な問題らしいです。

そして実はむしろ同化したユダヤ人の存在そのものを、再度、その国の国民から切り離してしまうことになる。イスラエル国家をつくることで、ユダヤ人はゲットーから解放されたはずであるにもかかわらず、四八年以後は「あいつらは二重のファイリテイをもっている」と言われる。アメリカのように、イスラエルと同化している国とがうまくいっている場合はいいけれど、そうでない場合は非常に疑がられてしまう。ソビエトで起っているように、ゲットーはなくなつたといながら「あいつらは忠誠をつくさない」というふうな、新しい別のユダヤ人問題を起こし始めている。だからゲットーは、イスラエル国家によって一時解放されたかみえなければ、逆に新し

ユダヤ人の民族自決というのは、私はあると思うんです。長い歴史を持ち、精神的な、あるいは宗教的な特異な存在と

いゲットーが、ソビエトしたり、アメリカでも起こっているわけです。それがソビエトや大欧の社会主義諸国におけるユダヤ人に対する非常に大きな反対を起しているわけです。

そういう観点からみても彼らが、四八年以後、真に解放されているかどうかは、世界中のユダヤ人にとって大きな問題なんです。むしろ今までの過程をもっと一回洗い直して、二重の忠誠をなくして、エルサレムを中心とする地域をユダヤ人の精神的センターとして存在させるという、新しい国家のあり方が必要だと思えます。それは国という形はとも、とらなくともいいと思えますが、そういうふうには新しくおすとすれば、決してアラブとの間に紛争が起るはずはないし、そのことはアラブ側も十分認めているわけでしょう。だから、それしか道はないでしょう。おそらく、その契機は、パレスチナ国家ができた場合に起こってくるだろうと思えます。

ユダヤ人が精神的なセンターを一つ作る事は必要だと思えます。それはユダヤ人の民族自決だと思えます。それが

ユダヤ国家をつくるというように単純化してしまつた所に問題があつたのでしよう。第三世界の民族自決というのは、まず第一に自分の国をつくることでしようけれども、ユダヤ人の場合は状況が違つ

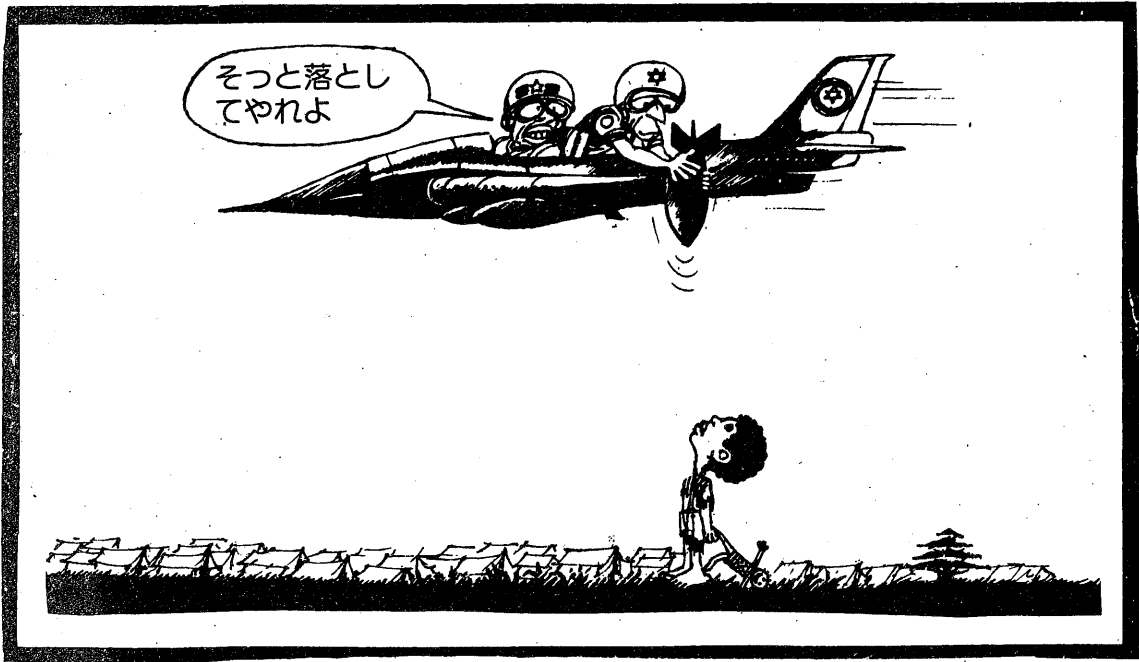
ユダヤ人の民族自決は、ユダヤ人の今までの歴史過程の続きに求められます。民族自決はナシヨナリズムではない訳ですね。ところが私たちはよくユダヤ・ナシヨナリズムとユダヤ人の民族自決を混同し

てしまっています。言葉の正確な意味において、ユダヤ人の民族自決というのは、既にPLOや自覚したアラブ人たちは認め始めているわけですね。共存しようとしている。やはり民族自決なんだと。で

は、ユダヤ人は長い歴史に従って、どのような国を作るか、あるいは作らないか。どのように民族自決を表現するか。これはユダヤ人がこれから考え直すべきことです。そういう意味で、私はヘルツェルからも一回出直さなければならぬだろう、というふうに考えます。

ここで問題になるのは、ユダヤ人が、ユダヤ教徒の問題ですが、これについては前から大分論議がでていますが、ユダヤ教徒といつてしまつと、では日本人を仏教徒と言えるかといつと、簡単に言えないでしょう。ユダヤ教徒で統一してしまつと、いろんな合わないケースが出てくるのではないかと思います。また世界中にいるユダヤ人がすべてユダヤ教徒であるかどうかといつことは、ちょっと問題になるだろうと思つたんです。今言ったユダヤ教徒と、ユダヤ人を同一視しているのはシオニズムです。それを一緒にすると、ユダヤ教の教徒の、精神的なよりどころとして聖地を見る考えが、ユダヤ国家建設のナシヨナリズムとだぶつてしまします。そういう意味で、私は二つの言葉はむしろ明確に分けるべきだと思つています。

さきほど、私はユダヤの自決が、国家の形をとるか否かわからないと言いましたが、少なくとも新しい独自の形態の国



パレスチナ人にとっての「国家」

家となるだろうと思います。確かにゴールドマンのいう中立国という構想も、その一つに入らないことはないのですが、ただそのような在り方は、理論的には可能でしょうか。でも、現実にはどうなのでしょうか。だから私は、それは一つの選択権だと思います。しかし私の考えでは、中立はもちろんです。もっとユニークな形、いわば宗教、伝統だけに根ざしたひとつの民族としての国家となると思います。これはまさにモニュメントとしての国家です。いわば、エルサレムという聖地が拡大したような国家です。それは当然、非武装で平和で中立の国家でしょう。そのあり方は問題だけれど、パルファア宣言の言葉を借りれば、まさにナショナル・ホームというような形の国家もありうるだろうと思っんです。それはいわゆる国という形をとるかどうかわかりません。

今のような考えからだと、中立国家という構想はでてくるのですが、ゴールドマンの考え方がいくと、国家としてのイスラエルそのものはまだ残したいという気持ちが強いようですね。彼は相当に厳しくヘルツェルを批判してはいますけれども、彼のイデオロギーをもう一度再検討するところまでは考えていないようです。

一方これをパレスチナ人の側から見ますと、パレスチナ革命と呼んでいるものは、西岸だけの問題だけでなく、イスラエルを今言ったような国家にするインパクトを与えていくことなんじゃないかと思っんです。そしてその契機がパレスチナ国家であると私は解釈しているわけです。よく言われるようなミニ国家でパレスチナ革命の目的が終わるといことは決してない。むしろそこから連鎖反応して出てくるであろうユダヤ国家の性格の変り方を期待するということの方があってきているんじゃないでしょうか。従ってパレスチナの解放運動は、ユダヤ国家内部における一種のルネッサンスの契機になりうるようではないかと思っんです。またそこまで展望を持つべきだと思います。

以前からパレスチナ革命という言葉に捉われていたんですが、やっぱりその中で、例えばコマンドがめざしているものは何かというと、それは決してパレスチナ・ナシヨナリズムじゃない。パレスチナ革命なんです。彼らがめざしているの

はコマンドの言葉にあらわれる祖国奪還という範囲でだけ理解すべきではありません。もちろん民族国家というふうな国家のあり方もあるだろうし、それは彼らを選ぶべきですが、彼らの見つめているものはもっと大きなものだと思っべきではないでしょうか。

だからパレスチナ革命は、決してパレスチナ国家をつくることで終るんじゃない。これはPLOの綱領にもずっとでてます。そういう意味で、パレスチナ革命は、全世界的なユダヤ人のためにもなるものだというふうな位置づけなければいけないだろうと思っし、私たちがその位置づけをもっとしてゆくべきだと思っんです。

そういう中で、シオニズムの中には、バイ・ナシヨナル(両民族)な国家へのアバーなどの努力がありました。ヘルツェル以後、少数だけれどもそういう動きはずっとあったわけです。それがまだまだ出てくるだろうと思っんです。ですが過渡的にはバイ・ナシヨナルな形もあろうだろうけれど、本当は誤った政治的シオニズムの侵略主義、エゴイステイ

ツクな政治的シオニズムそのものが消滅しない限り、ある程度の歯止めにはかぎず、やがてまた吹きだすことになりま

す。パレスチナ革命が民族自決の範疇とか、パレスチナ・ナシヨナリズムの範疇を超えた意義を持つというよりは大変なことなんです。だからシオニズムが問題なんです。それが物理的な力でもって単純にシヨックで崩壊するかと考えると、そうはいかないだろう。もちろん、ちょうどナチズムなどが物理的に崩壊したように、国家そのものが崩壊すれば、起こりうるでしょう。それは一つの選択としてはありうることです。確かに完全な内乱となり、内戦化して、かつてやったようにアラブ対イスラエルの全面的な戦闘で、イスラエルが崩壊すれば、一っぺんに吹っ飛ばでしょう。

しかし今の状況下では、それはおそらく第二次、第四次世界大戦に発展するでしょう。動きがとれないわけです。しかしパレスチナ革命というインパクトなしに、内戦というは無理でしょう。やはり、コマンドだって一種の戦争の中で革命をつくりあげていくことで、いろんなシヨックを与えて真理を追求していくことで成り立っているんでしょね。それが志向しているものは、本来、今言った

ような形のものであるんだというふうな私たちはとらえていくべきではないかと思っんです。シヨックそのものは、物理的な掃さぶりなんかじゃない。そう考えないと、あんなチヨコチヨコやっている個人的なコマンドの闘いは、私たちに見れないんじゃないでしょうか。

それを前から考えていたんです。あのコマンドの闘いは一体どんな意味があるんだらうかと。今だって執拗にやっているわけですよ。しかもパレスチナの子どもがコマンドにもなるという、その中身は何かというと、やはり彼らのめざすものは、そういうはるかなものではないでしょうか。そうでないと、コマンドの闘いそのものの位置づけが、単純にテロリズムとなってしまう。もちろんテロリズムにはまちがいない。しかしテロリズムが一体どういう高い政治責務を与えられているかというふうには私には考えたいですね。それがないテロリズムというのは、退廃ですからね。テロリズムの目的のテロリズムというのは、ぼくは否定しますからね。政治的テロリズムとそうではないテロリズムがあります。それはどんな方向性をもっているかにかかってい

ます。その方向性を私たちが正確にとらえていく必要があるんじゃないかと思っんです。ミニ国家がいいかどうかなんて論議が一時日本でありましたが、私はミニ国家であろうと何であろうと、ミニ国家ができたならテロは終了だという、そんな簡単なものじゃないと思っんです。そう考えると、私たちはいつのまにか誤ったナシヨナリズムに落ちこんでいく。さっき言ったシオニズムも、ユダヤ・ナシヨナリズムとしてとらえれば、それでよろしいでしょう。シオニズムは単純にユダヤ・ナシヨナリズムである、そこなんです。だからこそ非合理的な強さをもっているし、その非合理性によってユダヤ人たちをカリスマ的にとらえていく習性がありますね。それを無くさない。

またパレスチナ・ナシヨナリズムというとらえ方をすると、テロリズムはまさに領土奪還の闘いになっちゃう。コマンドの精神的なフユダイとか、ああいうものは、そういうところからは生まれませんよ。私はそう思っんです。例えば随所である時にそういうものがワオーとやるのはわかるけれども、今でもパレスチナのコマンドは常時やっているわけですよ。志願者もほとんどある。これは相当高度なものがないと、とても続くものじゃないと思っんです。

(談・十二月十八日)

イスラエルの中立化は可能か

ムラード・ベンシエイク

(駐日アルジェリア大使)



シオニズムがヨーロッパ社会でどのような役割を果たしてきたかについては、十分に認識しておくべきであり、この側面から指摘したいことは多々あるが、私のコメントは、主にイスラエルというシオニスト国家の中立化構想は、「安全」「軍事力」「支配」などの概念との関連で、可能なかという点に限定したい。

この問題に答えるためには、多くの側面からイスラエルというシオニスト国家の歩みをふりかえらなければならない。まず第一に、現在のイスラエル内部の動向をどのように見るかであるが、ゴールドマンの理解、もしくは期待というものも、イスラエル市民の大多数が意識的にあるいは無意識的にも、イスラエルが将来において中立化するのではないかと、

つまり「安全」を守るために軍事力と支配の強化を中止する時がくると考えている。イスラエル内部において、どのように市民の間に変化が生じているかについては、数字的な裏づけが調査としてもないので、これを断定する材料は不足している。

そうした変化が起こらないと考へざるを得ない根拠がいくつかある。その第一は、イスラエルがとっている極端な政策が緩和される見通しがないという点である。もし野党の労働党(シオニストの社会民主党が一九八一年に政権につくとしても、労働党がイスラエルの今日の構造を変え

るというべき)は、まったく見あたらない。昨年五月に「外交評論」に掲載されたシモン・ペレス(イスラエル労働党党首)の論文から引用したい。「三十年のイスラエルの存在が与えた教訓は、イスラエルが安全の問題で、絶えず挑戦にさらされてきたし、イスラエルは常に外国の軍隊の支援なくして自らを守ることが可能でなければならないことを教えてきた」

五つの歪曲を見抜く力

ハビブ・ベン・ヤヒア

(駐日チエニジア大使)



シオニスト運動の指導者であるナフム・

ゴールドマンが、イスラエルの将来をどのように見ているかについて、牟田口氏から内容の紹介があり、アルジェリア大使のベンシエイク氏からコメントがなされた。ベンシエイク氏が指摘された点に、私も同意する。私はシオニズムを見る場合の重要な視点について提起したい。

まず、きわめて重要なことは、少なくともわれわれアラブ世界の者たちが、一方的な情報の受け手であり、主として西側から流されてくる情報を消化することに追われ、流れてくる情報を批判的に読むことなく、まさに情報をのみこんでしまっていたことを反省している。日本には、アラブ世界以上の多量な情報が今日も流されてきている。反面シオニズムの本質

についての情報がきわめて少なく、イスラエルという国家のもつバラ色のイメージが定着しているとの感じをぬぐえない。シオニズムに基づいて設立されたイスラエルという国家機構について、私は五つの歪曲があると考ええる。

第一は、宗教的な歪曲がある。これについては、現実のシオニスト国家としてのイスラエルと、聖書に出てくるイスラエルとが混同されて、日本の多くの人たちに受けとめられている点である。第二は、歴史的な歪曲である。歴史の歩みは、あざむくことのできないものであるのに、神話をもとに権利を主張してきたこと自体が、歴史の歪曲でなく何であろうか。アラブ・パレスチナ人たちが嘗々と築いてきた歴史を無視するという形でもまた、歴史の歪曲を行っている。

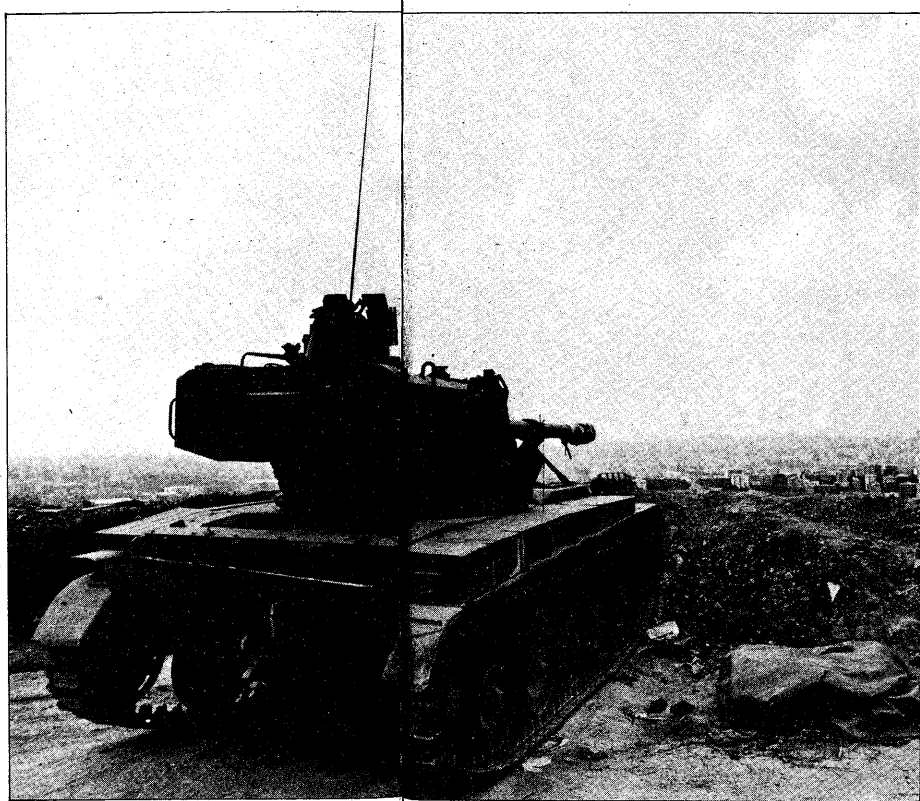
第三に、文化的な歪曲がある。世界史におけるユダヤ人たちの役割や貢献を誇りに描きだすのに対し、アラブ・イスラム諸国の果たした役割を軽視するか、全

さらに、世界中のユダヤ教徒たちがイスラエルを支持してきたし、彼らが今日の右よりのベギン政権すらも全面的に支持してきた経過には大きな変化はないと考える。その支持の感情は、問題の本質が鮮明にされていないために、かたくななイスラエルの政策のように、妥協的でないものである。

イラン革命直後の国際情勢を考えると、アメリカは外交政策の中心を中東における軍事力強化の方向に大きく依存しており、アメリカの世界戦略のイスラエルに課している役割は、ますます大きくなっていく。この超大国がイスラエルの軍事力を強める方向にむかざるをえないでいる。これらの事実から、私の結論は、イスラエルが侵略と支配国家から、平和中立国家に変わることはいえな

うことである。もとより、中東の恒久平和は、イスラエルというシオニスト国家の機構や性格の一部が変わることによって、もたらされるものではない。基本的には、PLOとアラブ諸国がどれだけ力を結集することができにかかっている。いかなる困難があろうとも、イスラエルが東エルサレムを含む全占領地から撤退し、パレスチナ人民の民族自決権と独立の権利を承認し、これを保障することである。その後、まさにその後初めて、イスラエルの中立化構想が論議されるべきものである。なぜなら、その時点で初めて、中立化構想は中東の包括的な和平の一つの条件になりうるからである。

(一九八〇年十月二十三日、F.B.クラブ会合でのコメントより)



く無視するという歪曲である。第四には、政治的な歪曲とも言つべきものがある。つまり、イスラエルは、民主の政治シンボルとして描きだされ、シオニスト政権の正体をおい隠している点である。

第五の問題として、戦略的な歪曲とも言つべきものがある。西側諸国はイスラエルが西欧的な価値観や理想を守るために援助すべきものであり、イスラエルの安全は、世界の安全につながっているという論法をとる。戦略的な問題は歴史の流れの中で変化してやまないものである。にもかかわらず、三十年来、同じ論法で西側諸国を説得し、イスラエルへの援助をとりつけようとしているのである。

ナフム・ゴールドマンのイスラエルの将来についての考え方は、指摘されているようなシオニズムの変化について、一定の評価が可能であるかもしれない。しかし、私が強調しておきたいのは、こ

した五つの重大な歪曲のからくりを分析しなければ、正しい判断が不可能であるという点である。日本は宗教的にも異なる伝統をもつ社会である。他の宗教に対して寛容な態度をもっているが故に、ユダヤ教とシオニズムとを混同するとして、今日の中東問題の本質を見抜けなくなるのではなからうか。

世界史の流れは、こうした歪曲によって、おおい隠せない大河の流れである。アラブ世界が世界史の発展に寄与できるのは、石油などの天然資源によるものではなく、頭脳をいかに駆使するにかかっている。そうした人間の資源を活用していくことは、こうした歪曲を見抜き、現代史の流れを見据えていく革命的な作業である。その意味から、私は、日本のジャーナリストの方々の活躍に大きな期待をもつものである。

(一九八〇年十月二十三日、F.B.クラブ会合でのコメントより)

活を築いてきたパレスチナ・アラブ人た
ち(イスラム教徒、キリスト教徒、ユ
ダヤ教徒であれ)のホーム・ランドである」
となるべきであらう。
この十年の間に世界ユダヤ機関の指導
者としての長いキャリアをもつナフム・
ゴールドマンの考え方も、いくつかの
顕著な変化があることは、多くの人たち
の認めるところであらう。「現実主義的」
とも「プラグマティック」とも評される
ゴールドマンの考え方の変化にもわか
らず、「イスラエルは中立であることによ
って……ディアスポラのユダヤ人にと
つての啓示の中心である」という「本来の
使命」をはたすこと、という提言にとど



まる限り本質的な変化ではないこともま
た衆目の認めるところである。啓示の中
心としてのイスラエル」の構想は、「イス
ラエルはユダヤ教徒にとつての「パチカ
ン」であるべき」との十年前の発言を想
起させる。イスラエルは西欧の拠点では
なく、アラブ諸国と共存する地中海の一
国であるべきとの発言もあつた。しかし、
現実のイスラエルというファシスト国家
の性格を変えることなく、いかなる共存
が可能なのか。中立化構想は幻想でしか
ない。なぜなら、それはファシスト国家
の存在を承認したうえでその「中立化」
に同意せよというものだからである。
イスラエルのファシスト的な政策を批

判し、イスラエルという国家機構の将来
を憂慮するユダヤ教徒たちがイスラエル
の内部にも多くなつてきている。シオニズ
ムの神話は、ユダヤ教徒内部でも信頼され
なくなりつつある現実を反映したもので
ある。
イギリスのユダヤ教界の指導者のイマ
ヌエル・ヤコビッツ博士は、「アラブ世
界との平和がどうしても達成されないこ
とがわかれば、イスラエルをつぶしてし
まうべきだと言いたい気持だ」と発言し、
更に「今日の事態を招いたのは、パレス
チナ人たちが民族として統一をなして
いるという厳然たる事実を見ようとしな
いイスラエルの歴代政府の失敗である」
と断言して話題を呼んだ(本誌一九八〇
年四月号)。これらの大胆な発言は、ゴ
ールドマンもベギンも見ようとしな
い今日
の厳然たる事実を見つめたものたちの誠
意と良心にみちた発言である。
「イスラエルはシオニズムが主張する
ようには、ユダヤ人問題を解決しなかつ
たばかりでなく、多くの国々のなか
に、その問題をまた起こさせている」として、
ゴールドマンは、ヘルツェルを批判する。
しかし、それでは「ユダヤ人問題」の真
の解決は何かを提示することにはならな
い。ユダヤ教徒たちの「二重の忠誠」(居
住国とイスラエルへの忠誠)を問題にし

つとも、「帰還法」の犯罪性を批判しない。
シオニズムが帝国主義勢力によるアラブ
民族の分断のための手段として「イスラ
エル」がパレスチナにつくられ、まさに
ファシスト国家としてのイスラエルの存
在がパレスチナの民衆を祖国の地から追
い出し、あらゆる苦難の根源となつてき
た。しかも、シオニズムのトリックは「帰
還法」によって、世界のあらゆるユダヤ
教が、いつでもイスラエルへの移住と市
民権取得の権利を有するとされている。
他方では、パレスチナ・アラブ人の中の
ユダヤ教徒はもとより東洋系ユダヤ教徒
が「ユダヤ国家」の下で迫害されている
事実にもゴールドマンは何ら目を向けてこ
なかつた。
「民なき国土」に、実はパレスチナ人
たちが代々にわたり住んでおり、力づく
で追い出して「難民キャンプ」におしこ
めても、パレスチナ人民を抹殺するため
につくつたイスラエルが「ユダヤ人問題」
の解決を複雑なものにしてしまったとす
るなら、ゴールドマンが今はつきりと提
示すべきは、パレスチナ人民の民族とし
ての存在であり、PLOの承認である。
このことによつて、彼のながっている真
の人間的な解決の道も、共存の道も可能
となつてくる。

ナフム・ゴールドマン 批判

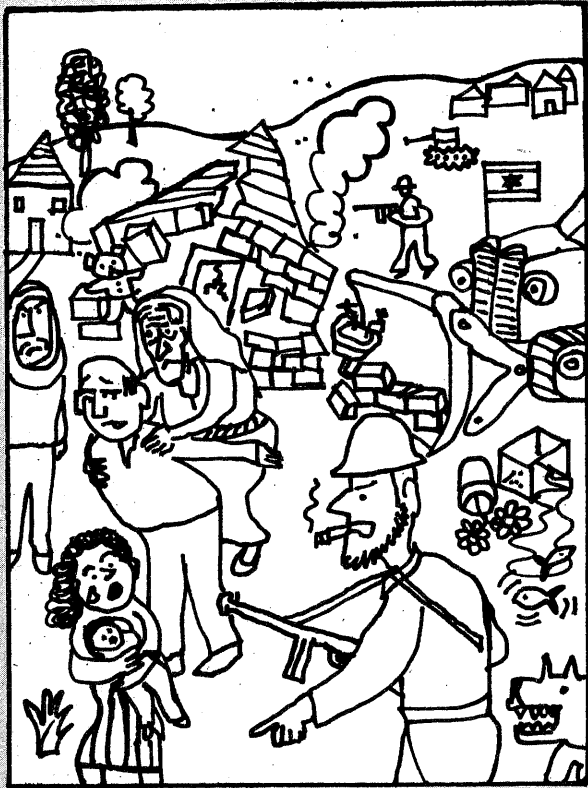
ファトヒ・アブドルハミード
(PLO駐日代表)

—パレスチナ人の側の視点から—



ナフム・ゴールドマンは、「イスラエル
の国際的孤立」を指摘し「政府が変わる
か、入植政策が修正されなければ、反乱
が突発するかも知れない」とも言う。歴
史的視点から現状を考察する「ことがこ
の論文の目的だとして、「イスラエルとい
う国という形のもとにシオニスト思想が
実現したことが価値あることであるかど
うかを問はず」としながら、パレスチ
ナ人民の民族自決はもとより、PLOの
存在そのものを承認しようとしな
い。これはゴールドマンのみならず、今日のイ
スラエル当局のシオニストの考え方であ
り、政策である。ヘルツェルの論理は、シ
オニズムの支柱をなしたものが、それ
は、パレスチナが「国土なき民に与えら
れた民なき国土である」というものであ
つた。ゴールドマンが、ベングリオン
の政策を「過激なもの」として非難し、ま
た、「ヘルツェルの構想を、輸送問題として
の定義」として批判しつつも、パレスチ
ナが、彼らのつくりあげた神話に反して
「民なき国土」ではなく、パレスチナ・
アラブ人たちが営々と生活と歴史を
築いてきた、れつきとした国土であつた
事実を承認しようとしな
い。なぜなら、
シオニズムの柱は、ヘルツェルの論理を主
な支えとしているために、パレスチナ人
たちの存在を承認することはシオニズム

の破産宣言になるからである。
パレスチナ人たちの存在を承認するこ
とは、パレスチナ人たちの諸権利を承認
することであり、同時にそれらの権利を
奪つた過程における数々の犯罪や虐殺行
為をも容認することにつながる。
ゴールドマンは、「ユダヤ人問題」の解
決策として「攻撃的な、小さなユダヤ人
国家をつくつたことは……ユダヤ人の英
雄的・悲劇的性格の冒瀆のように思える」
と言つが、「イスラエルの創設者やその首
脳たちだけが現状についての責任者では
ない」と強調している。しかも「安全と
軍事力と優越性に血道をあげ続けるならば、
この国はアラブ世界との真の平和を手に
入れることはない……その行先は断崖以
外にはない」と断言しながら、あるべき
解決策として「イスラエルを別の形の国家
に変える、完全中立の国家にする」とい
う提言しか行なっていない。イスラエル
という国家機構を力づくでパレスチナに
つくりあげることによつて、どれだけ
犠牲をパレスチナ民衆に強制してきたか
という反省が根本的に欠落する。今日の
現状の諸問題を真剣に、真実に促して考
えるならば、ゴールドマンが断言すべき
なのは、イスラエルの中立化構想ではな
く、「パレスチナはユダヤ教徒のホーム・
ランドではなく、パレスチナに営々と生



パレスチナじんは、いつも、てきのぐんたいにていこう
しなければなりません。たとえば、おとこのこは、せんし
やに、いしをなげます。そうすると、へいたいは、そのこ
をなぐりつけて、ろうやにいれてしまいます。それからへ
いたいは、そのこのかぞくを、いえからひきずりだして、
いえをぜんぶこわしてしまいます。

上の絵と、下の絵に、十二の間違いが
あります。どの部分がどう間違ったのか
簡単な説明を加えてハガキでお寄せ下さ
い。正解者の中から抽選で五名の方々に
記念品をお送りします。
あて先 東京都目黒区青葉台一四一八
P.L.O 駐日代表事務所「フィラステイン・
びらーでい」 二月号クイズ係

12月号の答

① たいよう ⑦ ポケット
② いえのかず ⑧ はなのくき
③ き ⑨ はのもよう
④ おたまじゃくし ⑩ くさ
⑤ はたけのみぞ ⑪ ひつじまき
⑥ くも ⑫ チョウ
正解者の児島盛之氏(東京)・高木史浩氏
(長崎県)に記念品をお送りしました。

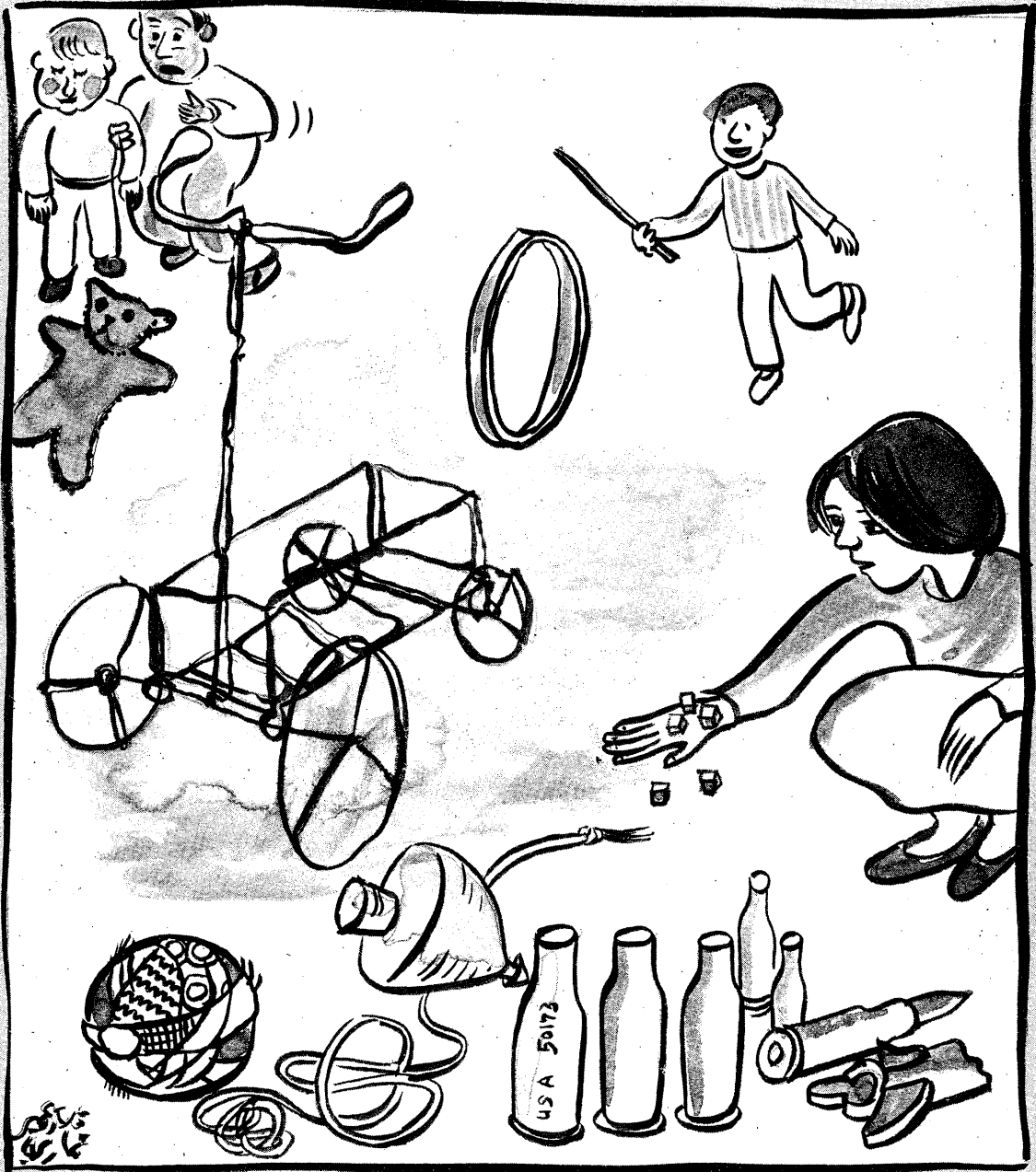
12のまちがいがし

たぐさんのパレスチナのかぞへは、くにかなくなつたので、おもちゃをかえるほど、おかねもちではありません。だから、ごもたちはじぶんでおもちゃをつくります。たとえばはりがねじごうじや、きれをまきつけたボールのキャッチボール、わつかごるがし、そしてごもものなかでいちばんにんぎがあるのは、いつのちいさいないじのおてたまです。ごもたちはつかいおわたやつきまようをあつめます。ごもはつだんはきけんです。それにイスラエルのひこつきは、おもちゃのなかにばくだんをいれてあつすので、おませいのおももだちがしにました。

パレスチナのこどものあそび

③

そぼくな、おもちゃ



日本を離れるにあたって

あるパレスチナ人の見た日本

セイフ・エル=ワディ・ロマヒ博士

私が日本を離れるお別れのあいさつとして、親友のアドルフ・ハミード・PLO駐日代表から、これまでの生涯の歩みについて語るようにとの挑戦的な要請を受けた。それは過去のみならず現在からの挑戦であった。しばしの間、私はパレスチナに生まれた幼年時代から今日にいたるまでの歳月をふりかえった。学業や仕事のため西半球の、多くの国々をめぐってきた私の旅は、極東の日本で一つの区切りとなった。

パレスチナの、あの静かで小さな町ムゼイアアで私は生まれた。幼時期の最初の思い出は、あの美しい緑の草原とオレンジ畑であった。パレスチナの寒い冬の夜、一家が暖炉をかこむと、部屋いっぱいにはオレンジの花の芳香がただよっていた。あの香りを未だに忘れていない。オレンジの樹と花々は、私の記憶のなかでは、ある種の神聖さをもっている。

いままも眼につかんでくる。美しきパレスチナの乙女たちが、歌いながら、踊りながらオレンジをつむ。屈強な男たちはオレンジを選別し、木箱につめては、あの有名な「ジャファ・オレンジ」の商標を押しつけてゆく。これらの懐かしい思い出の歳月を一つひとつふりかえりながら、新たな感激につつまれた。

あの幼き頃の私の夢は、果てしなくひ

ろがるものであった。私のみならず、あの頃のパレスチナ人なら誰れでも、大きな夢を抱いていた。ところが、私の夢をも含めて、こうした夢は、やがてついでにいった。パレスチナがシオニストの侵入にさらされ、やがてシオニストとイスラエルによる占領が始まるとともに、私の夢もついでにいった。

教育によって、他国の人たちの歩みや経験を知った。そして、わがパレスチナ人民が、この巨大な試練に立ちむかうことができるとすれば、それは教育(学業)と勤勉によるしか方法がないということに気がついた。かなり若い頃に、私は湾岸諸国に移住し、そこに奪われた祖国パレスチナに代わる第二の故郷があった。私は歓迎された。それは、アラブ民族にとってパレスチナは常に中心をなし、人々の思いの中に生きていたためである。パレスチナへの想いは、政府の要人であれ庶民であれ、共通のものであった。

アラブ首長国連邦において、私は更に学業を修め、この地域がアラブ世界のみならず国際的にも大きな役割を果たそうとしていた時期に、その発展と近代化にささやかながら貢献することができた。私は教育の仕事に携わってきたが、最終的には、アラブ首長国連邦の外交団の一

員に加わり、駐日全権公使として四年前に日本に赴任し、多くの日本の友人を得ることになった。

私の心のなかには、たえず日本というもの素晴しいイメージがあった。少年時代に学校で教えられた日本の素晴らしさは、愛国者の象徴としての日本人というものであった。私の心の中に日本を愛する想いを植えつけてくれたのは、小学校時代の先生であった。授業の中で、この先生は、高名なアラブの詩人、ハフェズ・イブラヒムのつくった日本讃歌を暗誦させた。日露戦争でツァーリのロシアとたたかい勝利した日本に感動し、日本人の勤勉さと勇敢さをたたえた。一般的に言って、今世紀の初頭におけるアラブ人たちは、日本人の誇りと愛国主義に感心させられていた。あの頃アラブ人たちの思いの中にある日本というものは、ヨーロッパではない東洋の国の強力な意思を堂々と示した国として映っていた。

日本の歴史と文化の伝統について勉強するようになってから、日本の持つ古き伝統と文化遺産、今日の文化と生活様式などに多くの点でひきつけられていった。私の日本観の中で日本の武士道精神とアラブの「フルシーヤ」(注)とを共通のものとして見る考え方があった。近代のヨーロッパ諸国が、十字軍時代にイスラム帝国の

ロマヒ博士は一九七六年にアラブ首長国連邦駐日全権公使として赴任し、昨年十二月、任期を終えて帰国された。国際法学者として上智大学で教鞭をとられるなど、日本・アラブの友好に幅広い活躍をされた。著書「Studies in International Law and Diplomatic Practice」(国際法と外交に関する考察)でも、石油戦略と国際外交の理論について独特の考察を試みている。本誌では、十二月十三日に開いたロマヒ博士の送別会でのスピーチから日本の友人たちへの暖かいメッセージをおとこける。



「フルシーヤ」から騎士道を学んだことは、あらためてふれるまでもないことであろう。私はまた、日本人のもつ熱意、とりわけ他国民の生活のあり方や思想を学び取ろうとする熱心さをたたえる。古き伝統を受け継ぎながら、他国民の経験や哲学を学ぶ熱意が持てるのは、自由な精神を持つているからであると私は考える。さらに、日本が私に示してくれたものは、めざましい近代化と進歩、高度の科学技術はヨーロッパ先進国のみならず有ではなくなったという点である。アラブ首長国連邦の公使としての仕事によって、私の日本観と日本研究はふくらんでいった。四年間にわたり日本に住み、多

くの友人との出会いから、次のような結論に至った。つまり、現代日本の奇蹟は、日本の地理的な位置や限られた天然資源によってもたらされたものではなく、日本のもっている人的資源によるものであると考える。日本人の持つ創造性と有能さは、限られた天然資源とのたたかいを可能にし、この民族の偉大なる今日の歩みをつくり出す基盤となったと確信する。

このように日本人を見つめるようになった私は、いつの間にか、日本人とパレスチナ人とを比較していたのだ。パレスチナ人たちが体験させられた悲劇は、代々にわたって住んできた家々や築きあげてきた財産を奪った。のみならず、何もかもを作りあげてゆく安定した社会が与えられず、自己の帰属すべき一切のものと領土主権が奪われた。しかしながら、パレスチナ人のもつ教育と学問への強い情熱を奪うことはできなかった。そうした教育に人的資源を投入したいという願いをパレスチナ人たちが奪うことはできなかった。

このように日本国民のもつ素晴らしい力を強く讃美していた私は、日本に住むようになってから、日本人のアラブ観が著しくゆがめられていることを知って、失望した。

何よりもパレスチナ問題が誤解され、ゆがめられていたからである。おそらく、その主なる原因は、アラブと日本との間に情報を交換する直接の経路や手段を持たなかったためであろう。お互いに知っていることと見えは、第三者から得たものでしかなかった。

一九七六年に日本に来たばかりの頃、イスラエルという国家がパレスチナにつくられたために犠牲に供されてきたのが、ほかならぬパレスチナ人たちであるとの認識をもった日本人は、それほど多くはなかった。パレスチナ人たちは、祖国の地から集団的に追い出され、国籍を奪われ、周辺のアラブ諸国で無権利のままに仮住いしなければならぬ状態が長い間つづいてきている。パレスチナ人民は、抑圧にさらされている国民として、国際世論に訴えて、奪われた権利を回復しようとしてきたが、そのアピールの声は何十年にもわたり、かき消され、ゆがめられてきた。世界の世論の「沈黙の壁」にパレスチナ人たちの孤独な声がひびきわたるようになったのは、一九六七年以降であり、パレスチナ解放の運動が台頭してきたからのことであった。今こそ、パレスチナ民衆の叫びが一斉にきき入れられるべき時にきている。

言うまでもなく、一九四八年のパレス

OCCUPIED TERRITORIES

「アラビア語が読めないから、せめて英語で書かれたものでパレスチナ問題の理解を深めたい」と考えて、英語で書かれた資料や文献やニュースなどを読んでいる人たちが、これから読もうとしている人たちのために、特に注意して読んではどうかと思われる点を、思いつくままに、話題も交えながら取りあげてみたいと思います。

「アラビア語が読めるということは、必ずしもパレスチナ問題を理解できるということではない」と東京外語大学の奴田原先生が感慨深げに言われるのをきいたことがあります。だとすれば、英語でパレスチナ問題に接近するのは、さらに大変なことは想像できますし、現に、資料としてはいろいろな欠点や制約があることも事実です。

英語そのものを支配者の言語として毛嫌いする傾向が進歩的と言われる人たちの間にあります。毛嫌いながらも、英語を一つの意思伝達の手段として、とらえてゆく積極性をもつ——実は、これが大変なことなのですが——考え方から出発したい、というのが私の発想です。

パレスチナ問題の本質にかかわる言葉の中で、英語で読む場合に、うっかり読みおとしてしまうものをいくつか取りあげてみましょう。

occupied territories 一般に「被占領地」、または「占領地域」の両方が翻訳の時にあてられます。何らかの文脈の中では、具体的な意味を加えて「イスラエル占領地域」とも訳されます。

この背景には二つの意味があります。一つは、一般的には、ほとんどこの意味で使われますが、「1967年戦争でイスラエルにより占領された地域」であり、具体的には、西岸地区(West Bank)とガザ回廊(Gaza Strip)を意味します。二つめは、1948年占領地域(1948-occupied territories)のことです。イギリスの委任統治(British Mandate)によって支配されてきたパレスチナ(Palestine)が、1947年に国連分割案(UN Partition Plan)によって、アラブ国家(Arab State)とユダヤ国家(Jewish State)と国際管理地域にされたエルサレム市(City of Jerusalem)に分割され、パレスチナは、1948年に独立が約束されていたにもかかわらず、分割されたのみならず、パレスチナが世界地図から消し去られてしまったのです。

分割決議案の範囲を越えて、更にユダヤ機関(Jewish Agency)が新たに占領した地域(主としてパレスチナ北部、エルサレム周辺など)を加えて、イスラエルという国家(State of Israel)がつけられました。つまり、分割決議案そのものが不法なものであるが、パレスチナにおけるイスラエルの占領地域は、更に二つあることを思い起こす必要があります。

しかし、一般的には、国連決議などで使う場合も含めて、1967年戦争による占領地域を指します。この場合は、シリアのゴラン高原、エジプトのシナイ半島も含まれますが……。

最近のニュースからももう少し具体例を……。

Arafat's Message to Masses under Occupation
これはパレスチナ通信の昨年12月1日の送信の見出しですが、本文のリードではArafat addressed message to the masses of the occupied territories と書き換えられています。月二回刊のPLOの情報誌(Palestine)にもOccupation Diaryがありますが、1967年、1948年にかかわらずイスラエルの占領下のパレスチナの動きをまとめています。しかし、国連分割決議そのものはもとより、シオニスト勢力(Zionist forces)によるパレスチナ占領を不法とするパレスチナ人たちの立場からすると、全パレスチナが占領下にあると考え(この場合the occupied territories とtheをつける)これを解放するのがPLOのめざす終局の目標となるのです。

関場理一 (通訳者)

チナ・イスラエル戦争は、次のような事実を歴史的なものとして残した。つまり有史以来ずっとこの地に住んできていたパレスチナ人たちが占めていた七十七パーセントの土地に「イスラエル」というユダヤ国家がつくられた。これによって、百五十万人のパレスチナ人たちは追放されたのである。一九六七年のアラブ・イスラエル戦争は、次の事実を示した。さらに百万人のパレスチナ人たちが追放され、パレスチナ内部にこもり留まり得た同胞に對しては、あらゆる抑圧が続けられ、イスラエルは祖国パレスチナ全土を占領し、エルサレムの併合をはかり、他の三つのアラブの国々の領土をも占領したのである。

イスラエルの初代大統領のハイム・ワイツマンは、一九四八年のパレスチナ人たちの追放を、奇蹟的な土地の開拓と表現している。パレスチナ人たちの追放を「開拓」と評したことは、そこに営々として生活を築いてきたパレスチナ人たちの全く無視したものである。アメリカのユダヤ系の言語学者のノーム・チョムスキーも「国際世論は、パレスチナ人たちが次から次へと追放されてゆくのを黙って見つめていた……」と言って、国際世論の無関心を認めている。パレスチナをおそった四次にわたる戦争、軍事衝突と破壊と悲劇は、ひとえにイスラエルが問題の核心を無視し

てパレスチナを占領しつづけ、パレスチナ人民の存在を承認しないのみならず、パレスチナ人民の民族自決権と基本的人権を否定するということ。こうまんな政策をおしすすめてきたためにほかならなかつた。こうした影響が日本にも根づくよが残っていたことは事実である。にもかかわらず、今日では、日本人の認識も大きく変わった。少なくとも、四年間の日本滞在を通じて私が確認できたことは、直接的な接触と人間的な出会いを通じて、増々多くの人たちが中東アラブ世界への関心を強めてきているという実感である。

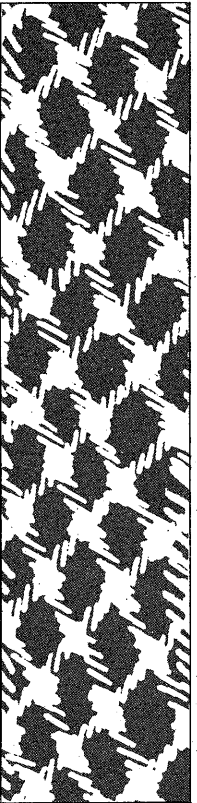
石油、砂漠、「アラビアン・ナイト」のハーレムといった日本人の持つアラブ観は、過去のものとなりつつある。アラブ世界が古き文化遺産を受けついでた社会であるのみならず、ヨーロッパ社会が中世の暗黒時代に知ることが禁止されていた頃に、人類の文明と科学の発展に参画していたアラブ社会としての認識を強めてきている。「日本人が受けているアラブの文明による恩恵は、きわめて古い時代にさかのぼるものである……」ことを認めている日本の学者の方々は多くなっている。PLOとパレスチナ人民の民族的諸権利に對して関心がますます高まっていることは、一人のパレスチナ人として、きわめてうれしいことである。パレスチナ人民の不可譲の権利を守るために、支援と連帯を強めようとする国際社会の動きは、日々強められてきているが、日本における関心の高まりも、そうした世界的な流れの一翼を形成するものである。私の生涯にわたる体験からも、また国際法の一学徒としての分析からも、今日の国際社会の安定と利益を守るために要石をなしている中東における平和の確立が、パレスチナ人民の民族自決権を承認し、PLOが和平実現に完全に参画することなくして不可能であると確信することである。この事実を深く認識する日本人が多くなっているのみならず、一九四八年いらいのパレスチナ人たちの悲劇の実相を広く深くとらえようとの努力がなされていることは、何とよこばしいことであろうか。

こうしてお互いの認識において、はつきりとしたイメージをもっておしすすめてられているアラブと日本の友好関係は、ますます強固なものとなりつつある。私は大学で教鞭をとりながら、日本の若い世代の人たちと接触し、彼らが何を考え、何を未来へつなぐ夢としているかについて、更に具体的に知ることができた。日本を離れるにあたってアラブと日本、パレスチナと日本が、文化的な交流を通

じて、友好の強い絆をもってほしいと願うものである。アラブと日本の相互の利益がますます満たされていってほしいと願うものである。

今日、諸国民の間の友好の道は長く多様なものであると考える。しかし、すでにうち固められた友情の礎を更に強めてゆくものは、お互いの誠意と努力である。アラブと日本との間には、歴史的にも障害となる悪しき経験をもちたないし、お互いに悪い感情をもつこともなかつた。相互依存が強まりつつある現代においてこのことは、兄弟的な協力関係と友好の条件を高めるための出発点をなすものである。今日まで築かれてきたアラブと日本の協力的な友好関係を更に強い絆として発展させることは、双方の国民にとってきわめて有益なものであると信じて疑わない。滞日四年間の忘れ難い思い出の数々を携えて、私は間もなく日本を離れる。私が日本でなしとげようと努力したアラブと日本との友好の発展の事業に、さらに日本を離れてからも尽力することを自分に誓っている。

注) 騎士道及びその属性としての精神性を表わすアラビア語 武勇勇敢 ヒロイズムなどの意味



シルバークロースト

銀色の亡霊、その足跡

パレスチナ略奪物語

■鍵和田 良輔

フォト・ジャーナリスト

連載第一回 プロローグ

はじめに

海外に飛び出して様々な人々と出会い、茶飲み話がついつい国際問題に及んでくると、言葉の不自由さにも足をとられて、議論は果てしない迷路に入ってしまうことがしばしば起こる。そんなとき、原因の一つとしてお互の歴史観がまるで違ったまま話が硬直してしまっている場合がかなり多い。歴史観と言つと大げさだが、お国変ればものの考え方も異なるのだという点については、改めて言及するまでもあるまい。

そしてちなみに史上の英雄に対する評価などを持ち出してみれば一目瞭然。ポットから千円札をとり出し、手品師のような手つきで広げてみる。それが偽札ではない証拠には、ちゃんと明治元勲伊藤博文が印刷されているはず。見なれたこの「偉人」の顔も、しかし例えば朝鮮側から眺めるとなるとたんに別の面相に変わってしまうのである。北であれ南であれ朝鮮民族の胸に今も深く刻みつけられている伊藤の顔は、いまわしき侵略者・支配者としての日本人を代表する残忍な顔なのだ。日韓癒着と騒がれるほど

仲のいい韓国でさえ、ハルビン駅頭で伊藤を暗殺した安重根は民族の英雄として讃えられ、朴大統領時代に建てられた救国の烈士の像が南山からソウルの街を今日も見守っていることを忘れてはいけな

い。日本人はとかく歴史を忘れがちだと言われるが、もう一つ私がお腹にあるパレスチナ人から投げかけられた問いかけも披露しておこう。「ヒロシマ、ナガサキを体験させられた日本人が何故あれほどアメリカナイズしてしまったのか。」この意見なども、アングルを変えて眺めたときに日本の姿が異様に映る一例であろう。こうした違いは当然教育問題にも波及しようが、歴史認識のズレはまずいこと

に、きちんと突き詰められないまま済まされてしまうことがほとんど、そんなところに国際化をめざしながら国際社会、とりわけ第三世界の人々との間の意志疎通がいつこうに前進しない原因も生じている。相手にとっては誰も知っていないあたりまえのことだから話してくれず、こちらは知らないから口に出さないという問題を放っておいていくら友好を叫んでみても、それを空しい連帯にすぎまい。

こうした事柄についてパレスチナ問題に当てはめてみるなら、私たちは今日のリスは東インド会社を通じて当時世界最大を誇っていたインド綿業に攻撃を仕掛けた。インド人の綿布職人は次々に捕えられ、文字通り腕を切り落とされていった結果、インドはただの棉花供給国に追い落とされただけでなく、逆にイギリスから綿布を輸入する植民地となってしまうのだ。こうしてヴィクトリア朝の栄華を支えたのはインドであり、イギリスはさらにインド産アヘンを中国に売りつけて大儲けをしたのである。

アメリカイשראל枢軸アラブという対立の図式以前の中東について、アラブ側の立場から見なおして見る必要があると私は感ずるのだ。それはとどのつまり、パレスチナがかつての帝国主義によっていかに侵略され、支配されてきたのかを見つめなおす作業でもある。狭いスペースではあるけれど、私は以上のような問題提起をこめながら、土台にはエネルギー資源の変遷をすえてこれから十二回にわたって連載してみたい。

イギリス産業革命

その入口が何故、一見パレスチナとはほど遠いイギリスからはじまるかについては少々説明を加えておく必要がある。石油をめぐって揺れ動く現代史を把握するためにはまず、それ以前の人間生活がどのようなエネルギー資源に頼った社会であったのかと知り急ぎ知っておく必要がある。またイギリス産業革命が意味するものは封建主義を打破した新しい時代、つまり資本主義誕生の時代なのである。そしてこうした変革を通じて労働者階級が生まれ、工業化が起こり、この結果綿花を中心として工業の原材料の入手と工業製品の販売をめぐって世界は資本主義の市場争奪に巻きこまれてゆくのである。従って十八世紀中頃から十九世紀中頃に

かけてイギリスから発生した「産業革命」を問うことは、今日の「南北問題」を問うことも密接につながっているわけだ。「呪われた、呪われた創造者、なぜ私は生きたのか……」。有名なイギリスの詩人シェリーの妻メアリーは、マンチエスターリバーバブル間でスチアブソンのSL「ロケット」が走る一八二八年より二〇年も前に「フランケン・シュタイン」というSF小説に産業革命の未来を描き出した。

そこには、猛烈なスピードで回転しはじめた機械文明に対して、マルクス以上の鋭い批判と皮肉がこめられていたのだが、工業化の波がどうしてイギリスから起こったのかという点については教科書に述べられているような内容をとりあえず省略する他はない。ここではイギリス産業革命なるものは、木材や木炭に頼っていた時代から石炭の時代へと移り変わって行くエネルギー資源の変遷によってもたらされたのだというところからはじめてみよう。

森林資源の枯渇は現在一層深刻の度を加えているが、十六世紀のイギリスでは早くもこの問題に直面していた。いやむしろ、古代シルクロードや古代オリエントの消長を見てもお分かりのとおり、周囲の森林資源を切り尽くした文明は砂漠

に消えるのが常であったと述べた方が適切であろう。イギリス産業革命はこの危機に対して、主要燃料を生物資源から石炭という無生物資源に切り変えることによつてはじめて乗り越えた。その点から現代文明の出発点と言えるわけだ。だからニューコメンからはじまる蒸気エンジンの利用も、製鉄も鉄道の発達もすべて炭坑と結びついていた。そしてワットの改良による蒸気機関が、ピストン運動を回転運動に置き変えるに及んで、強い水力の得られる落水を求めて辺境に散っていた工場を、安くて豊富な労働力が得られ輸送に便利な都市へと集中させ、石炭の黒煙が充滿するブラック・カントリーがイギリス工業化の象徴となった。

だが、「イギリス資本主義の発展にたいする奴隷制の貢献」を見落としてはならないと、トリニダード・トバゴの首相で経済学者でもあるE・ウィリアムズは自著、『資本主義と奴隷制』で語っている。イギリス繁栄の裏側では西インド諸島へ、アメリカ大陸へ送りこまれた黒人奴隷の血と汗もなく悲惨な物語があり、彼らの血と汗によって摘みとられた商品が、綿花でありタバコでありコーヒー、砂糖キビなどであった。

一方、イギリスの綿製品に対抗したのがインド産キヤラコだったのだが、イギ

リスは東インド会社を通じて当時世界最大を誇っていたインド綿業に攻撃を仕掛けた。インド人の綿布職人は次々に捕えられ、文字通り腕を切り落とされていった結果、インドはただの棉花供給国に追い落とされただけでなく、逆にイギリスから綿布を輸入する植民地となってしまうのだ。こうしてヴィクトリア朝の栄華を支えたのはインドであり、イギリスはさらにインド産アヘンを中国に売りつけて大儲けをしたのである。

十九世紀の中東

そうなればイギリスにとってインドへの海路確保がいかに重要なものだったかお分かりになる。しかし航海は以然として南アフリカ回りであり、中東にはバルカンからアラブ全域を覆うオスマン・トルコが立ちちはだかっていた。けれど十九世紀に入ると、この巨大な国家にもようやく衰退の陰りが見えはじめ、北からはオーストリア・ハンガリー帝国が失地回復の期をうかがい、帝政ロシアは黒海から地中海への出口を狙っていた。そこにイギリス・インド間の通商路切断をめぐらしてナポレオンがエジプト遠征（一七九八）に踏み切った。

これに対し、ネルソン提督率いるイギリス艦隊はトラファルガー海戦（一八〇

五）でフランス海軍を打ち破り、世界の制海権を手中にしていた。このナポレオンのあとイギリスから遅れること半世紀以上、フランスやドイツでも産業革命が起こってきた。そして中東をめぐっては次にイギリスとロシアが戦火を交える。これがクリミア戦争であったわけだが、その発端は一八五三年、パレスチナ聖地管理をめぐるギリシャ正教とフランスのカトリックが対立、イギリスはトルコ側についてロシアの進出を阻止しようとした。二年にわたって凄惨を極めた戦争は英仏・トルコ連合軍の勝利に終る。

そして一八八二年イギリスはエジプトを軍事占領する。そこにはフランスの外交官レセブスの開き出したスエズ運河が、一八六九年から開通していたのである。最初は赤字続きだったこの運河もようやく動脈としての機能を果たしはじめ、ポンペイ・ロンドン間の航路距離を半分近くに短縮する運河の重要性がイギリスに欠かせぬものとなってきていた。産業革命をとげたヨーロッパの圧力を受けるトルコ帝国は十九世紀を通じて日に日に押されていき、エジプトを占領するに至った大英帝国はここに中東支配への橋頭堡を築いたのであった。

(続く)

イスラエル—その虚像と実像

失墜したイスラエル「建国」の理念

先ず一九四八年五月十四日のイスラエル国家「独立宣言」を見てみよう。

「イスラエルは、そのすべての人々の利益のために国の開発を推進し、イスラエルは予言者によって心に描かれた自由と正義と平和をその基盤とする。イスラエルは宗教、人種、性別にかかわらず、すべての人々に対して、社会的・政治的権利についての完全な平等を保証する。イスラエルは、宗教、良心、言語、教育文化の自由を保証する。イスラエルは、あらゆる宗教の聖地の安全に護り、国際連合の憲章の原則に忠実を誓約する。イスラエルは、イスラエル国内のアラブ住民に対して平和を保持し、完全かつ平等な市民権を与え……」

(イスラエル国家「独立宣言」一九四八年五月十四日)

「法治国家」イスラエルは、三十数年経た今でも憲法を持っていない。憲法を制定すると、人種、宗教、言語、性別で差別しないと明記せざるをえないし、そうならば差別の滴ちあふれたイスラエル

理由で逮捕され拘禁される。おもだった人で拘禁を受けたのは、詩人のマハムッド・ダルウィーシユ、ファウジ・アルアスマール、歴史家のサブリジェリスである。さらに身分証番号が一目でユダヤ教徒か非ユダヤ教徒か分かるようになって、車両のプレートにも分別できるようにになっていることはよく知られている。

福祉の面では言うに及ばない。パレスチナ村落の道路、下水、学校、安全施設など、ユダヤ教徒の入植地との差は歴然たるものがある。

こうして一べつただけでも分かるように、イスラエルは「建国宣言」にうたわれた平等、自由、差別廃止を、すべて裏切るやり方で国造りを進めた。それはこの国がシオニズムという、ユダヤ教徒のための国家建設思想に支えられている以上、非ユダヤ教徒の上にすべての矛盾のしわよせがくるのは当然なのだ。

崩壊に至る過程

ヘルツェルはかつてパレスチナ原住民を野蛮と呼び、シオニストの国が、文明の前線づくりになると言った。そして自由と平等を基盤にした国家を宣伝した。その後の過程で、シオニスト当局は、この理念に反する事実をすべて隠蔽してき

にとつて都合の悪いものになるのではないかと思われている。しかしイスラエルは「建国」のときの宣言を憲法に代わる

ものとして用いているのだが、その条項が、現実のイスラエルの姿と、どれほど違ったものになっているかを調べてみた



イスラエル軍によって死体を爆破された5人のコマンド

た。イスラエルが「建国」された後も、世界の情報網にシオニスト関係者が強い影響力を持つていたこともあり、差別、拷問、土地家屋の不法没収、破壊、追放、水資源の単独利用、大量殺害(カセム村他)などと、国際世論の眼から覆い隠すことに成功してきた。しかしその間に沈黙を強制されてきたパレスチナ難民は、自力で闘いを始め、自らを「帰還者」と呼ぶようになり、その声に世界は耳を傾けざるをえなくなったのである。

その耳に届いてきたのはパレスチナ人の身にふりかかった言語を絶する歴史だけではない。イスラエル政府の腐敗ぶりもである。内部の汚職、スキャンダルなどが国外に流れ始めた。国家の赤字が二十億ドル、年間負債が二百二十億ドルにのぼり、インフレ一三五%という国は、

国外脱出者を続々と生み出し、軍の内部では、麻薬が流行し、それを手に入れるために武器の盗み出し、売買があとをたない。このように未来を失った国家では、十一人のイスラエル兵士の反乱

戦車の破壊も最近伝えられた。イスラエル人の心もいよいよよすさんでいく。袋小路に入つてどうにもならないことを、みんな良く知っているのだ。そこで兵士たちは、ゲームのように人を殺したり、殺したパレスチナ・コマンドの前で記念影

撮をしたり、あるいは最近イスラエル占領地軍を攻撃したコマンドの死体に爆薬をつけて吹き飛ばしたという事も伝えられた。

ベギンが労働党政権に変わっても、イスラエル国家の本質を変えることはできない。シオニズムという建国思想そのもの

い。

まず「イスラエルは、そのすべての人の利益のために国の開発を推進し」とあるが、どうだろう。この三十年間に多くの村々が農地を失い、ひどいところは一〇〇%の土地を失くした。破壊されて地図の上から消えた村は後を絶たず、土地の没収には「公共の目的のため」とか「防衛上の都合で」とか理由がつけられた。しかし「公共のため」という言葉はイスラエルでは「ユダヤ教徒のため」という言葉となる。だから没収された土地はユダヤ移民の入植地建設のためだけに用いられている。

さらに開発には資金が必要だが、資金はすべてシオニスト諸機関の手を通してイスラエルに送られるため、教育から社会福祉に至るまで、ユダヤ教徒のためだけに用いられる仕組みになっている。

人権の擁護はどうか。イスラエル領内パレスチナ人は令状なしにいつでも逮捕され、自宅拘禁や居住地拘束の形で行動の自由を奪われ、半年間は裁判なしで留置できるようになっている。半年たつたら、次の半年の更新が可能だ。これらの対象になるパレスチナ人は、文化的、宗教的、政治的自由について発言したり、意志表示した人であり、多くは詩人や作家がパレスチナのことをうたったという

のに問題があるため、シオニズム内での手なおしはほとんど意味を持たない。新政権は、一定の緩和政策をとることが予想されるが、それも決定的な瓦塊に向かっていくことをちよつとの間だけ部分的な軌道修正することに他ならないのだ。

編集部より

定例合評会のお知らせ

「フィラステイン・びらーでい」誌では、以前から御希望の多かった、読者による合評会を毎月一回開催することになりました。第一回は二月十三日(金)の六時半から八時半まで、場所は新宿の東口の新宿中央通りの談話室「滝沢」の特別室です。参加は自由で、会費は飲みもの代です。会場の都合で、ご出席希望の方は前日までに本誌編集部にご連絡下さい。

おわびと訂正

本誌十一月号に掲載されました「国連パレスチナ・デー記念の夕べ」の協賛者のらんに「総評国際部」の名が落ちていましたので、つづいて訂正させていただきます。

本誌常備店一覧

- ひらひら(札幌) ☎741・2801
- ウニタ書舗(神田) ☎291・5533
- 吉祥寺ウニタ書店 ☎0422・22・9618
- 模索舎(新宿) ☎352・3557
- 丸善(日本橋) ☎272・7211
- 丸善(お茶の水) ☎295・5581
- 紀伊国屋書店(新宿) ☎354・0131
- 弘栄堂書店(吉祥寺) ☎22・1031
- コマバ書店(駒場) ☎469・4962
- 旭屋(池袋) ☎986・0311
- パンドラ書房(福生) ☎53・4119
- ルビコン書房(横浜) ☎312・0610
- ルビコン書房(新丸子) ☎411・2427
- ウニタ書店(名古屋) ☎731・1380
- ちくさ文館書店(名古屋) ☎741・1137
- セイレイ社(京都) ☎414・0470
- 紀伊国屋書店(梅田) ☎372・5821
- 曾根崎書店(大阪) ☎361・6721
- ウニタ書店(大阪) ☎779・0835
- 金栄堂(北九州市) ☎531・3685



座談会

解放されるものは何か 故郷喪失

李恢成／青野聡／奴田原睦明／ファトヒ・アブドルハミード

(作家) (作家) (東京外大講師)

(PLO駐日代表)

(敬称略)

国を失うことの心理的、政治的、文化的な意味は何か。国の回復と人間の回復はどのような地平で交わるのか。パレスチナ人の立場からハミード氏、在日朝鮮人の立場から李恢成氏、管理社会の祖国喪失を文学に表わす青野聡氏、闘いの中のアラブ文学の中に国を視つめる双田原睦明氏の四名に集まっていた。

「異邦人」の新しい意味

ハミード まず最初に今日のテーマと関連して私の方から基本的な概念について申し上げてみたいと思います。アラビア語で「グルバ」ということがありますが、これは英語で相当することはがないのですけれど「異郷」とでも訳しましょうか。これは祖国から追放され、いわばシオニズムの犠牲に供されて、その犠牲

となったパレスチナ人の想いというものを表現することばです。またこの想いは「アルグルバ」「異邦人」ということばで同時に表わされます。これが祖国から離れている想い、あるいは異なる社会における異邦人という想いを一般的にあらわすことばとして成立しています。

奴田原 ハワーズ・トゥルキーは英語

では、イン・エグザイル(In exile)と言っていますね。

ハミード でもそれでは幅広い一般概念を示すことばにしかありません。一方パレスチナ人が「アルグルバ」という場合、それを含めた二つの意味があります。むしろ一般的な意味から識別する意味で、自らの意思ではない、外部からの力、それに強制されて祖国を追われ、あるいは祖国を離れざるを得ない状態をよぎなくされてしまうということに力点を

おいて定義づけをする意味で「アルグルバ」ということばを使っているのです。つまり、その国のおかれている状態に不満を持って、自分の意志で亡命しているというものは違った意味で使ってきたわけです。しかし一般的な意味で亡命した場合でも、英語では「イン・エグザイル」ということばを使っています。

青野 この「アルグルバ」は新しいことばですか。

ハミード 私たちは、一九四八年に祖国を奪われた時期から、これを新しい意味づけで使っています。もちろん個人的な意味で祖国喪失の想いとか、異郷にあるという想いは個人的に持っていたと思うのです。そういう個人的なものではなくて、いわば一つの民族全体が祖国を喪

座談会／故郷喪失

失させられるという、集団的な状況を表わすという意味でも「アルグルバ」ということばは、個人的問題であるよりは民族全体の問題でとらえられているわけです。特定の個人が国内において、あるいは自分の意思によって亡命した場合に感ずる疎外感あるいは異邦人としての想いというものは、あくまでも個人的なものであって、民族全体の問題ではありません。つまり体制、国家に対して不満を持つていたり、あるいはその国家の持っている排外主義的な政策が疎外感を増したり、同様に狂信的な政策が耐えきれないということ、疎外感や、国におきなから異邦人、異郷の地にあるような想いを持つということは一般的にあると思えますが、やはりそれは個人的なものです。私たちの場合のように、あくまでも民族全体の問題としてとらえられる問題とは違ってくると思うのです。一般的な意味で非常に個人的な問題として、その人の自らの意思によって祖国を喪失した場合、なぜ祖国を捨てたかという理由ははっきりとしていないわけですが、またその要因、背景にある問題、自分がどういう型でそれを解決していけば祖国に帰れるかという課題についてははっきりしています。ところが私たちパレスチナ人の場合は、非常に錯綜して、単純なものではないわけ

です。つまり自分が無理やりおかれた状態というものは、非常に非人間的なものもあれば、ある程度いゆる一般並の条件と両面あったと思いますが、そういう環境の中で自分がおかれている状況というものを本当に自覚していくまでさまざまな段階があったと思うのです。また亡命の場合、彼を取り囲む周辺の人々も、どういう理由で彼が亡命し、故郷喪失という状態になっているかというところを充分理解した対応をします。私たちの場合はそうではなく、それぞれ置かれている状況や社会のもとで、周辺にいる人々が私たちがどのように扱つかということを考えてみますと、いわゆる難民という扱いであり、しかも故郷—今のイスラエルですけど—を喪失した難民、非市民となります。

市民、難民としての扱いの中で精神的なものを含めた私たち自身の対応や、そういう状態をどうして脱却していくかという課題をみつげ出すことに、私たち自身の一つの民族としての問題、自覚、アイデンティフィケーションというものができきます。そういう構造があると思うのです。ここで少し概念規定の一つの結論として、付け加えておきたいと思えます。私たちパレスチナ人のおかれていた状況は、極めてユニークであると思えます。つまり一つの人民、民族というものが他者によって祖国を追いだされ、祖国を喪失させられてしまう。しかもアイデンティ

人間と祖国が重なるとき

奴田原 今のハミードさんのお話を伺って、グルバ」ということばは、パレスチナ問題の中で非常に大きく意味づけられているから、おそらく英語に移し替えるということではできないと感じました。そういうことばはアラブにはたくさんあると思えます。

とはなのですか、アラビア語の普通のことばなのですか。

青野 カナファアーニーの小説で祖国ということばがでてきますね。「祖国でこういうことがおきてはならない」というくだりです。あの祖国というのは特殊なこ

らが発せざるをえないし、むしろそこにつきると思わざるをえなくなってきたのです。

奴田原 いえ、やはり概念規定でいわれたのですけれど、日本語と英語とアラビア語の問題に入ってくると思つのです。それで国家という場合と、祖国または国という場合、大きく分けるとそのどちらのグループに入るかということもあると思うのです。それでこの間スーダンのタイエブ・サーレフ(「北へ還りゆく時」(河出書房新社)の著者)が来た時にその話

出書房新社)の著者)が来た時にその話

が私たちの解放という場合の実質的な意味であるとも思っています。

ですからこの二つの問題は、いつも関連づけて、あるいは一体のものとして考えられなければなりません。つまりホーム——郷土というのでしょうか——は、やはり非常に人間的な問題です。つまりそこにさまざまなルーツやあるいはいろいろな文化の伝承というものが連続として継承されて来たという意味での故郷という意味であって、人間を抜きにしたランドでは全然意味をもたないのです。これが私たちのおかれてきた条件のもとで直面せざるをえない問題であったと思えます。

そこであらゆる人間的な営為というものを継承してきた地としての故郷、これを一体のものとしてとらえられなければならない問題が生じてきました。そういうものを一切抜きにして、一般的な意味で故郷喪失、あるいは亡命という場合には、その個人の追求していく条件さへ合致すれば、異郷の地であっても、そこに定住し、安住する。つまりそこに根を降していきけるのですが……。私たちの場合はそうではなくて、私たちのルーツあるいは実際の歴史的な営為というものを継承しているその祖国の地、それを回復していくことが課題となっています。しか

も絶えず一体のものとして存在する人間と郷土を取り戻していかなければいけないという課題につながっているわけです。さらに非常に単純化して家、ホームという言葉を私なりのレベルで考えると、その場合の家というのは、家の造り、への石だとか、調度品とかいったことではもちろんないわけで、私自身あるいは私自身の思い出、あるいはそこに私の過去もあれば現在もあれば未来もある。一切がその一つの場所集っています。これが家というものです。もし家というものの私のさまざまな思い出、それにま

創られる祖国

李 はじめに今日の座談会は、ぼくは本日は朝鮮語で話すべきところを、日本語で話しているということをお断りしておきたいと思えます。

ハミードさんがもの静かな口調で語られたパレスチナ人民が国ぐるみ祖国を喪失させられたというお話は、祖国回復という強い信念に裏づけられていることを感銘をもって聞きました。ぼくはパレスチナについてほとんど知らないことを告白しなければなりません。

ただ非常に少ないばかりの知識のなかでも、一九四八年という年がいかにパレス

につわるいろいろな思い出が、ある力によって遮断されてしまふということになりますと、そこで私の過去、現在、未来、いっさいに対する連環が遮断されてしまふ。連なる想いというものが拒絶されてしまいます。同時に過去への様々な想いが、なんらかの力によって封殺されてしまふということになりますし、私はそこで過去から断ち切られて、過去と現在との一つの空間に取り残されます。排除され、宙すりにされ、これがまさに私たちのおかれている状態であると言えようと思えます。

チナ人民にとつて忘れ難い年であるかということは知っておりますし、実はパレスチナ人の苦痛ほどではないのかも知れないけれども、私たちが祖国の分断によって同胞、朝鮮民族が、いわば自分の国の統一を成し遂げていないという苦痛を持つているわけです。そういう点で、アラブと東アジアという違いはあっても、実に多くの共通点があるということ、ぼくは痛感させられるわけですね。今日の座談会のテーマである、「故郷喪失」ということも、まさに強い共感の湧くテーマです。たとえば七十万の在日朝鮮人も、



右からアブドルハミード、李恢成、奴田原睦明、青野聡の各氏

になって、サーレフの返答が非常に話をごんがらして誤解を生んだと思うのですが、ちょっと区別をしてみます。国家という場合は体制の強さが強くなる。権力というものを非常に強く浮かびあがらせる言葉として国家があります。それに對して祖国とか国とか郷土ということばがあります。それは日本語の場合ですね。英語においてみると、ステート(STATE)ということばがあるし、「カントリー」(COUNTRY)とか「ホームランド」(Homeland)がある。アラビア語ですと同じように「ダウラ」ということばが「ステイト」にあたりまして、カナファアーニーが言うのはもうひとつの「ワタン」という国を意味することばなのです。

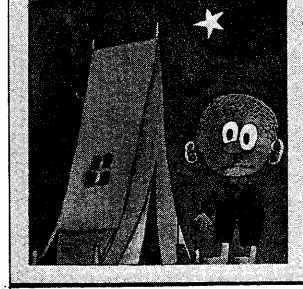
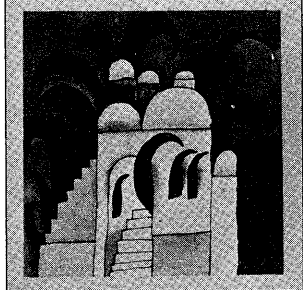
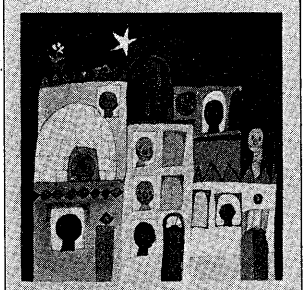
青野 それを祖国として訳されたわけですね。

奴田原 ハミードさんは今ここでは英語で「ホームランド」といってますが、それは祖国、「ワタン」のことだと思えますが。

ハミード そうです。トルキーは、「インゲザイル」ということばを具体的に次のように述べています。「祖国を失ったばかりの世代は、パレスチナの地に血を流しながら沈んでいく落日をただみつめるだけだった。けれどぼくたちが次第に成長し、自己をつきつめて行くにつ

れ、ぼくはふとこんなおもしろいと思われるのだ。本当に異郷にあるのははたしてどちらなのか。ぼくたちなのか、ぼくたちの祖国の方なのか。先に相手に帰りつくのはどちらなのか。

つまり、これは祖国喪失、「イン・エグザイル」ということばの具体的なトウルキー一なりの意味づけとして述べているのですけれど、ここで私たちが祖国、「ホームランド」という場合に、そこでは人間と国土が一体になっているわけですね。つまり国土だけであれば、国、単なる「カントリー」にすぎません。ですから祖国の地という場合に、そこに私が存在する一つの原点、ルーツがあります。あるいは人民がこれまで営々と営んできた一切の歴史の継承があります。ですから、祖国という場合、やはり人間と祖国の地というものが一体のものとしてとらえられなければなりません。これを分離してしまふと、あらゆる意味を失ってしまいます。またこれは一つの目標として祖国の地を解放し、取り戻すことだけを追求しても意味をなさないことにもつながるわけです。その地を継承していく人間がそこに居なければならぬし、祖国の地を解放すると同時に、そこにいわば自由なる解放された人間というものがその器に入っていかなければなりません。それ



パレスチナの絵本「家」より

そこでここに「家」というパレスチナの絵本があります。この話は非常に簡単で、「にわとりには家がある。うさぎにも馬にも、そして……でもパレスチナ人には家がない。パレスチナ人の住んでいる家は、パレスチナ人の家ではない。パレスチナ人の家はどこだ」というのが次に来ます。それで「パレスチナ人の家はパレスチナにあるのだ。ここにはパレスチナ人の敵が住んでいる」というふうになっています。これはまさに祖国と同義なのです。じゃ祖国というものと家というものを彼らはどういう風に考えているのかを考えてみます。今度は、ここに、

「国家ではない方のことを使っている。国家ではあるが、そこにはパレスチナ人の家がない。パレスチナ人の家はない。パレスチナ人の家はどこだ」というのが次に来ます。それで「パレスチナ人の家はパレスチナにあるのだ。ここにはパレスチナ人の敵が住んでいる」というふうになっています。これはまさに祖国と同義なのです。じゃ祖国というものと家というものを彼らはどういう風に考えているのかを考えてみます。今度は、ここに、

「国家ではない方のことを使っている。国家ではあるが、そこにはパレスチナ人の家がない。パレスチナ人の家はない。パレスチナ人の家はどこだ」というのが次に来ます。それで「パレスチナ人の家はパレスチナにあるのだ。ここにはパレスチナ人の敵が住んでいる」というふうになっています。これはまさに祖国と同義なのです。じゃ祖国というものと家というものを彼らはどういう風に考えているのかを考えてみます。今度は、ここに、

「国家ではない方のことを使っている。国家ではあるが、そこにはパレスチナ人の家がない。パレスチナ人の家はない。パレスチナ人の家はどこだ」というのが次に来ます。それで「パレスチナ人の家はパレスチナにあるのだ。ここにはパレスチナ人の敵が住んでいる」というふうになっています。これはまさに祖国と同義なのです。じゃ祖国というものと家というものを彼らはどういう風に考えているのかを考えてみます。今度は、ここに、

「国」と「家」の関係

とが困難な理由が一つあるのではないかと思います。それから、青野さんが言われたように、私たちが民族的体験をしていないため祖国の問題を非常に考えることがわからない。

くいとすることが一つあると思うのです。祖国とは創っていくものだというけれど、どういふふうに着手したらいいのかわからない。

四つの名詞がただ並べてあるのです。これは非常に誤解を生みます。なにをどういふふうにして否定して、なにをどういふふうにして肯定するのか分かりません。そこでいろいろな解釈の道が成り立ちます。私の印象で解釈しますと、この絵本で家と言います時に、これは祖国と同意語で使っているのです。祖国、つまり自分の家は家ではない。家を回復することが祖国を回復することだ。ところがこのエリマス・ホーリーは「祖国は家でない」と言っている。「なぜならば人間は問題であるからだ」。これは「パレスチナ人にとつて」「パレスチナ人のおかれている状況において」という前提があると思うのです。そこにおいては国≠家ではないのだ、とすなわち、そうあることが許されない状況に、自分たちはある。パレスチナ問題を体現しなければいけない自分たちにとって、祖国と家というものはイコールに

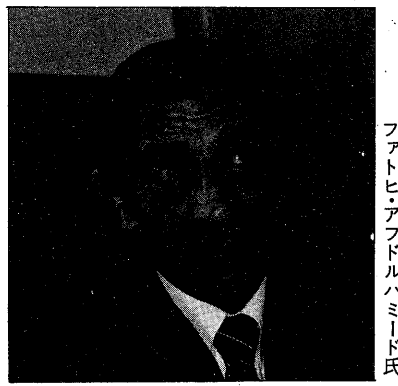
ない、というふうにはここではとれると思ふのです。一方、私たち日本人の場合を考えると、家という意識が非常に強いんですね。私たちは家を持っているのです。家をもっていきるのに、私たちは祖国という意識をなぜ持てないのだろうか。私はパレスチナ人の場合の今の家というのは、家というものを回復するために日々出ていく、闘いに出ていく場所としてあるような気がするのです。ところが私たちの家というのは日々帰って行って、ちゃんと用意されている。安らげる場所としてあるから、そういう家のあるうちは、祖国というイメージがでてこないような気がするのです。家というのは、例えばバラカートの書いた『六日間』なんかを読んで、ソヘイルという主人公にとって家とはなにかという、家族ではなく、自分の部屋かもしれないのです。自分を外側に向かって発言していく、誰にも干渉されない一

為というのは朝鮮の統一という革命行為と不可分に結びつかざるをえないわけですね。なぜかといいますと結局それは、文学をするという行為は人間の不幸を取り除くという行為でもあるからです。しかしハミードさんの話をうかがって、なにか精神的な同胞にお会いできたといふ深い喜びを感じますね……。

青野 パレスチナ人が書いた詩を読んだことよって、ぼくはこの問題を少し知ることができたわけですが、知れば知るほどに、民族規模で起きていることと——在日朝鮮人の問題も含めて——にやっぱり圧倒的な力を感じちゃうのです。最初にハミードさんが言われた個人的な経験したことは、すべて個人的な世界でできごとなので、なんといふのか、ぼくの方から架ける橋より、むこうの方から架かってくる橋というのが、まず実に素材などところで感じてしまいます。民族的な体験をしていない時に、じゃあどんなふうに分かたない問題が整理されていくかということになると、安直にできてこないのです。そういうことと自分が文学のテーマになるかと思ってしまうけれど……だから現実的にパレスチナ難民の問題があつて、知れば知るほど、悲しいできごとがあるわけですね。そういう時に、まったく個人的な精神形成の経験は、この問題を前にして対応させないと思うわけです。単に物理的に日本から外にでるといふことだけでも

れないけれども、なにかそれ以上のものとして、一つの種子のようなものになったことは、自分で認めているのです。じゃ祖国とは一体なにかということになった時に、外部の暴力という力、力によって強制された状況ではないから、鮮明にはでてこないわけですね。日本に帰る、帰らないというのは、これは皆個人的な意志の世界で、解決してしまふ問題なのです。ただこの過程を通じて、日本に帰ってきた時に、確かに祖国という観念がぼくの中に生じました。それがどういふふうなものであつたかわからないけれど、日本にかえてきて住むということによって、祖国という観念がどんどん孤立していくという現象がおきてくるわけです。話は飛躍するけれど、ぼくはそこで祖国というものは守つたり、後の方にあるのではなくて、創っていくものだというふうに変換が行われたわけなのです。

ハミード 青野さんはパレスチナ人の体験あるいは朝鮮の方々の体験を、また直接、充分深められておられないといふふうにおっしゃられたのですけれど、そういうことは、一人の作家にとつて制約になることではなくて、やはり、今までの体験の内を追求されてこられた非常に明確なウィジョンを、今苦難に直面している人たちに對して一つの見方としてお持ち



ファトヒ・アブドルハミード氏

つの場合の確保です。だから私たちの状況は、ホームを保証された瞬間からホームランドというランドに祖国の意識がなくなつて、薄れてしまふ、そういうふうに感じます。

ここで問題になるのは、国家権力に対して民衆がどんな反応をしているかということ。ここでもファミリーというのは、家という単位で考えていいと思つたのです。私たちが祖国という意識が非常に薄れて、そのため祖国回復のために闘っている人や動きに連帯感を持ちにくいということは、家に対する私たちの在り方というふうなものあたりから問題があ

民族の解放なしに「家」はない

李 この「家」という絵本は、パレスチナの民衆がもっている国家と国とのかわりを、実に単純明確にみごとに表わした絵本です。パレスチナ民衆のもつ苦しみを、このような形で表現する宣伝方法に感嘆しました。ぼくもこのように、わかりやすい文化運動をすべきだなと、自分たちの問題にひきつけて思いましたね。

それはそれとしまして、今、奴田原さんがおっしゃった、祖国と家との関係はどう思つかという問題ですが、まず自分

るよりに思います。家というのは、自分たちにとってどんなものになつてしまつているのか。一方で「家」国を思ふことが俺たちには許されていないのだ。なぜなら俺たちは目の前に問題をかかえているからなのだ」という人々がいます。そういう意味で、家を持っているから自然に日本人は国を持っているわけなのですか、そういうやり方はそのままでは正しいかという気がします。

青野 ぼくは国家という字が、ある時突然、国の家と書いたことに関して、当り前の字なんだけど、それが字でなく感じたことがあったのです。

李 国の問題——在日朝鮮人の家意識ということから話しましょう。私の父は、日常時代に日本にやってきました。サハリンへ行つた理由は、そっちの方が日本の中では比較的住みやすいからで、いわば流論の地ですが、流れていったわけですね。しかし、彼はそこを安住の地とは認めなかったんですね。しかも、一九四五年のぼくたちがいうところの日本からの解放、政治的解放をサハリンで迎えた時、ソ連軍がその地をしめたわけですが、そこで



李恢成氏

も彼は安住の地と認めないで、どうしても祖国へ帰ろうとしたわけですね。そういう歴史が私の個人史としてはあるわけですが、これは私の父に限らず、一世の大半の共通した感情だったわけですね。

二世であるぼくは、そういう影響を受けているわけですね。ですからぼくは、日本で生まれて育つたけれど、やはり祖国意識というの、かなり強くあります。樺太とか北海道で未成年を過ぎたわけですが、そういうところに対する多くの感情は「生い立ちの地」ですね。そして「ふるさと」とは思わないんですね。そこにどんなに友人たちとの深い友情があつても、それは思わないわけですね。

ところが、三世、あるいは三世に近い二世になってきますと、日本で生まれて育つて祖国にも行つたことがない。親たちはほとんど減つちやうから、もう一割くらいしかないわけですから、おれは

日本で生まれたんだから、祖国というのは親たちの祖国であつて、おれは日本でのまま生きていくんだという、一種の祖国離れの傾向が強いわけですね。そういう二世に近い若い人々の影響によって、一世たちの中に、やむなく日本に定住しようとする層もまた増えているわけですね。こういう事態が今、解放後三十五年たつてみると起つてきている。祖国が統一されず、分断が持続していくものだから、祖国に帰つても異郷人にかすぎないのだ、帰つたところで暖かく迎えてくれるわけでもない、だから日本であつた経済的土台の上で生きていった方が生きやすいのだ——というなくすしの同化傾向が、今非常に強いんですね。これに対して、例えば、青年の中では、祖国が統一されない限り、在日同胞の根本的解放はないんだという考え方も一方では厳としてあることは確かなんです。ところがまた、もう一方の青年たちは、そういう政治的な問題から離れて、とにかく日本で日本人の中で暮した方がいいという傾向があるわけですから、彼らは祖国を統一しようとする青年たちを何と呼んでいるかというと、彼らはシオニストだというわけですね。ぼくはシオニズムのことをよく知りませんが、これはとんでもない政治的過ちからくる問題で

あつて、むしろ祖国の統一のために生きようとする青年たちのことを、何らかの外国の民族の例をひいて言うならば、彼らはパレスチナ人だと言つた方が正しいとぼくは思つたんですね。なぜならばパレスチナ人は国がないでしょ。そして国をつくらうという強い信念をもつて生きていくわけですね。在日朝鮮人の青年たちも、国の分断をなくして統一しようという志向をもっているわけですね。しかも外国の侵略勢力に対して反対しながら、それを成し遂げようとしている点で、むしろパレスチナ人的だといった方が正しいと思つた。

在日朝鮮人の青年たちの流れを申し上げましたが、全体として言えるのは、日本に同化しようとする人々の中でも、日本でこのまま住んだとして人間的な誇り

「国家」に対する憎悪

奴田原 今のお話で思い出したエピソードがあります。ガッサン・カナファニーの短編の中の一つで「ガザからの手紙」という題だと思ひますが、アメリカの友人から新しい研究に従事できる職があるから来いという手紙がきます。その時、彼は、これで自分は新しい人生が始まると考えているんだけれども、たま

があるだろうかということが。ところが実際は、人間的な誇りをもつて日本に生きるのかということじゃないわけなんです。自分は最も困難な政治問題を避ける。祖国というところに住んでいる五千万の同胞たちが味わっている苦難から逃れようとする個人的な欲求が強いんですね。それを合理化しようとする動きなんです。ですから日本で同化し、帰化しようとする青年たちがどんな家をもつても、その家は日陰の家になつちやうですね。

青野 国家単位で外部と何か軋轢が生じると、本当は感じなければいけないだけども、ぼくは一九四三年生まれで、ぼくの育つてきた過程では、たくさん悲劇が起こっているにもかかわらず、内側にじつと引き込んで、その感じを持続させていくほどには感じなかった。例えばベトナムに行くとか、日本が安い商品をもつてアジアやアフリカで、人道に反することをやっているわけですね。そういうことに対する羞恥もない。

たま自分の知人の娘がけがをしたというので病院へ行くんです。病院の真白な建物に入つていくと、少女は片足を爆弾で吹き飛ばされて包帯をまかれてベッドにいます。その姿を見た時に彼は、祖国の悲劇の集約をみてしまつたんですね。もつ、アメリカへ行こうと思つていた気持ちこそこおつて、祖国を離れ

くりかえしていたんですが、そうすると一人の何でもない若者ですからね、国境を越えたり、パスポートの帯在の問題とか、いろいろいわゆる不自由というものを経験したわけですね。と同時に、自ら選んだのだから自らの責任の領域で処理していけばいいんですが、往々にしてそれを普遍化してみたくなるわけですね。そ

の時に人類の歴史みたいなものを参考にすると、そうするとユダヤ民族とか不思議なジプシーという種族とかがいるわけですね。彼らの苦難はそれこそ数えきれないほどたくさんある。そういうところで生きのびてがんばつて生きていくようなものを、支えにできる時期もあるんですね。

そんな時に、ぼくには日本という国があり、帰れば追い出されはしない、帰ろうと思えば帰れる空間がある。と同時に、一体日本は何してんのかということがよくわかってくるわけですね。それはただ見えるだけの話ですけども、ぼくが諸外国を旅行することが、他国に対する恥になると、ずいぶんいろんなところで言われたんですね。おまえみたいな汚いのが来ると日本の恥だと、日本の要人、日本国家を代理している人から言われるわけですね。しかし、そうばくに言う日本国家の代理人が何をしてくるか、それが、同時にだぶつて見えてくる。そうすると、ぼくが味わつた祖国というものは、ぼくが帰れるところ、おそろくやさしくよい空間だったんだらうと思つた。ところが実体に対しては、こういうことが許されるかわかんないけれども、憎悪をもつてくるわけなん



奴田原隆明氏

たし得ていないのかもしれないわけですよ。

ぼくはそういう点で、パレスチナの作家や詩人たちが革命家であり、そして同時に文学者であるということ、これはやっぱり学ぶべき姿じゃないかと思うんですけれどもね。

奴田原 「果して本当に異郷にあるのはどちらなんだろうか」ということはありますが、このことばと非常に関係のあることばとして、一人のフェダイの話があります。一人のフェダイが追われて森にとびこむのだけれども、森の木が彼をかかえこむように繁らせていた。そしてイスラエル軍に撃たれて自分の身は負傷して行くのだけれど、彼は「やつらは木も殺してしまふ」と言いながら死んでしまふ。その次に死ぬ女の子は、彼の胸の被弾した弾をひとつひとつなぞっていく。

がふせられて寝ていたんじゃないか。ぼく自身も今、そんなふうにいるんです。だからへんなアパートでも耐えられる、何とも思わない。本当に家をもつときは、人と人と共に生きあう社会を見出し出した時です。そういうふうにはできないんだけれども、そんな意識が育っているような気がします。

奴田原 日本では、各人が家ということに全力投球しています。子供の面からみても、家をもつというものすごいエネルギーを費し、国家、家の概念もなく、

めくらめつぽう歩いているような、そんな怖さみたいなものがありますね。

青野 だからぼくは日本人の国家意識の中に、日本人の家意識を反映させた見方があるんじゃないかと探しているんですけど、相当に屈折してて、家に対して頑固な壁意識はもっていませんね。そのような意識が国家に直接的に反映されているように思えない。ですが、それがまた独特の、絶縁体をたぐさん巻いたような国家にさせてきている。線が結んでみると逆にできてきていると思うんです。

こと、あるいは革命、それなしに新しい民族とか祖国の像は生まれてこないわけなんです。日本人の知識人の中にも、かつての日本帝国主義が悪だったから、もう触れるのもいやだということとで認識をとめてしまっているところがあるんじゃないか。そのことが逆に日本における知識人の限界にさえなっているときがあると思うんです。

ですからぼくはものを書いてますと、よく、あなたはしあわせだと言われます。なぜかという、あなたは朝鮮人だから民族だとか祖国という問題がありテーマが多い、書くことがいっぱいあるからだという。しかし、これは、実はあなたがたにもあるんですよ、とぼくはいつも問い返すわけです。あなたがたは避けているだけなんだ。そうすることによって、現に日本が右よりの社会になっていく時に、何ら積極的な歯どめとして役割を果たす



青野聡氏

悪い「国家」は倒せばいい

さっきの家の話に戻りますが、父の代までさかのぼってみると、借家住いというか、家はもう必要がないという発想があったように思います。佐渡に帰ればあるかというないわけです。それで家をもったってしょうがないだろうという意識なんですよ。ね。李さんのお話を聞きながら、反芻してみたんですが、家をもつということが、国家を憎悪していく源になっている。理想の社会があるとすれば、その社会が実現するまでは持つたっしょうがないんじゃないかという意識

そういうふうには死も非常に深くなっているんです。そういうところで「ヌシ」を追われた自分たちの祖国と血との交歓が遂げられていきます。かつて、カナファニーの「悲しいオレンジの実る土地」というのがあり、オレンジを失なうということがどういふことか初めはわからなくて、ただ直感的に、四八年に追われる時に女の人がオレンジにしがみついて嗚咽したというところがありますけど、そういう意味が何かということが帰還の中で少しずつ洗い出されているんだという

とが分かりました。アリーゼン・アブデーンという作家に会った時にどうして書いたかと聞くと、新聞で、イスラエル兵がコマンドを包囲して投降を呼びかけたが応じなかった。雨のように弾丸を撃ちこんだ。そして若い男と女のフェダイの死体があったという記事を見て書いた作品だということですね。そこに私は帰還の中で、ひとつの新しい関係が樹立されたと思います。かつて思わなかった樹木との新しい関係ができていくという

の民族主義、例えば民族至上主義的なものにとまれば、これは人間の発見にはならないと思うんです。ぼくがやろうとしていたことは、民族を通じて人間をどう理解していくのかという試みのわけです。そういう点で、こういう姿勢をとること、例えばパレスチナ人とまみえることであると申し、あるいはアラブと、あるいは日本と、まみえることだろうと考えているわけです。

その上で言うんですが、国家というのは、常に変えられていくべき宿命をもっているんです。今、北と南に二つの国家があるわけですが、これは統一以前の政治的な国家ですよ。ということは、さまざまな欠陥をもっている過渡的な含みも国家だとみているわけで、本当に人間を生かすための国家をつくっていくということが必要なんです。それは人間を生かすためです。

ですからこれは日本の場合にも言えると思うんです。人間を生かすために国家が悪ければ、国家を倒していく。そして何とか人間の発見に至る国家をつくる。これはインターナショナルな責務だと思うんです。文学者はそういう義務からどうして離れることができようかと、ぼくはいつも思うわけです。

祝パレスチナ革命16周年!

闘いの中から築く人民の連帯

メッセージ 小中陽太郎氏 / 小田実氏



占領下の西岸地区で占領軍に抗議するパレスチナの母と子

パレスチナの与える真理と教訓

カナファアーニーの小説から
小中陽太郎(作家)

七八年にPLOの代表の方々と一緒にガッサン・カナファアーニーという小説家の出版記念会を、カナファアーニーの命日である六月に行ないました。このことで

おわかりのように、カナファアーニーはパレスチナ解放闘争のさなかで、プラスチック爆弾によって吹き飛ばされました。私はカナファアーニー自身には残念ながら

会ったことはありません。しかし日本では、奴田原睦明さんのすばらしい訳によって「ハイファに戻って」と「太陽の男たち」の二作を読むことができます。こ

これは創樹社の現在アラブ文学選と、河出書房新社の現代アラブ小説全集に入っておりますので、ぜひお読み下さい。

カナファアーニーの短編小説「ハイファに戻って」は、ハイファという大きな町から追われた初老の夫婦の物語です。青野聰さんの詩「パレスチナ」の中に出てきたように、ハイファもまたイスラエルによって住民が追われます。彼らはハイファをあとにしてヨルダンに向かいますが、その混乱時に、長男である赤んぼうを残してくる。やがて二十年たち、里帰りが許されて、老夫婦は自分を放りだした家へ戻ってみます。すると、そこに住んでいるのはイスラエルの老婦人です。彼女はアウシュビッツからでた女性なのです。この辺にカナファアーニーもっている歴史的な洞察力のすばらしさがあると思ふんです。アウシュビッツの大きな悲劇を体験した民族が、同じようなことをしなければならぬという歴史の

恐しさを、きっちり見据えていると思ふんです。

家を訪れた時、そこにあらわれた青年は、自分たちが残してきた赤んぼです。しかし彼は、自分は捨てられていったし、この婦人に育てられたのだからイスラエルに在るといふ。その議論の中で、初めて初老の父親は、民族とかアイデンティティは何かと考える。そこには、いろいろとすばらしい人生の真理、歴史の真理が展開されるのですが、基本的には、ナシヨナリティというものは、「人間のアイデンティティ」というものは「闘いとるものだ」というすばらしい言葉をはきます。そして父親は放浪の地へと戻りながら、「残った自分の次男が、銃をとってこの土地のために闘うことを望むよ」というすばらしい言葉で小説は終わります。

これを紹介したのは、私も日本人は、生まれながらに日本という国民性とか国家とかを無意識に受け入れてしまっ

ています。しかしこういうものは、世界の中ではほんの小さな日本の歴史的な事実ですし、小さな国民だけのもっている形だと思ふんです。むしろ人間がなにかであるか、国境を超えようとは何か、あるいは逆にインターナショナルな世の中で自分のアイデンティティ——自己確認性というものをどうにか、闘いとらなければならぬということ、私どもはこの小説から教えられたと思ふます。

そしてなぜこんなわかりきったことを言うかと言いますと、残念ながら日本の文化は、戦後の中にひたってしまつて、ある種の「平和」とある種の経済的な繁栄の中で、われわれの文化人は、小さな身辺のことにかまけてしまったという反省が私にあります。結論的に言いたいのは、われわれは第一にはパレスチナの人々に連帯しその人々の解放のために少しでも力を合わせたいという願いをもっています。

しかし、われわれの力を貸してあげたいということだけではなくて、パレスチナの人民がわれわれに示している真理——つまり人間が人間であるためには闘わなければならない——によって、われわれはわれわれの文化を高めることができると思ふのです。私たちはパレスチナがなければ、かつての一國の中の自由

や平等だけで、大きな歴史の流れの教訓を読みとることはできません。パレスチナが示すものが、われわれ、創作とかジャーナリズムにたずさわる者にはか

に大きな力を与えているか、そしてこの教訓をかみしめることで日本が今、これから迎へようとしている危険な状態——軍国化、あるいは近隣の諸国を経済的に制圧しても日本だけが成長していけばよいというような恐ろしい日本を反省する大きな材料を与えてくれると思つたわけですから、パレスチナへの連帯とパレスチナから学ぶものを、ガッサン・カナファアーニーを読みながら、しみじみと感じました。私どものアジア・アフリカ作家会議は、アジア、アラブ、アフリカ、ラテンアメリカ、その他世界に広がっている解放を求めて闘う人々に、少しでもつながりたいと感じている団体です。

八一年の秋、PLOの作家同盟などを迎えて、もう一度「アラブとは何か」を考える大きなシンポジウムを日本で開きたいと思つて着々と計画を練つております。ぜひまたみんなが再び顔を合わせてPLOに思いを馳せつつ、じかにPLOの作家から、彼らのめざしていることを聞きたいと思ふます。

一九八〇年十一月十九日、国連パレスチナデー記念の夕べ「スピーチナリ

祝パレスチナ革命16周年!



人民のつながりで世界の未来を 複数の可能性を秘めた闘い

小田 実(作家)

パレスチナの解放闘争の意義については、これまでさまざまな人が論じてきたし、「フィラステイン・びらーでい」にも書かれていると思います。そこで私は一人の日本人として、私にとってどのような意義があるかについて考えてみたいと思います。いくつかありますが、そのうち二、三を話します。

一つは、パレスチナ解放闘争が、私に對して大きな励ましとなるのはどんなものであるのかということです。彼らの書いたもの、彼らとのじかのつきあいを通じて私が感じたことは、彼らは自分たちの闘いによって、自分たちが変わるだけじゃなくて、世界を変えようとしているということだと思います。そして世界を変えることの中に、自分の未来はないと、そこまで大きな広がりをもって自分たちの闘争のことを考え、世界の人々全体のことを考えている。私はその点で大きな感銘をうけます。自分たちだけの民族の解放闘争ではなくて、もちろん根底にはそれがあいながら、それを実現するために

は、世界全体を変えていかなければならない。では世界全体を変えるのはだれがするの——それは自分たちがするのだ。そういう覚悟、原理が一本、背骨のように通っていると思います。それは私たちに直接につながってくる問題だと思います。

私が、日本の未来を考える場合、鈴木善幸氏や福田ながし氏というふうな人々が考える未来ではありません。私たちが一九四五の時点において、もつともな日本にしようじゃないかというところを感じた、そのことを実現しようとするならば、私たちは今、自分たちがいることをする——闘うこと——闘うことによって日本を変えなければならぬ。そのことが、世界を変えることにつながると思います。その中に、日本の未来はないと思ふんです。私自身もそうです。

闘争の人々としゃべる中で、いつも感じることは、ヨーロッパ社会がいかに大きな打撃を彼らに与えていたかです。私たちにとっては、世界が西洋化されるというのは、近々三、四百年のことでことだと思ひますけれども、実際にパレスチナの現場へ行ってみると、例えばローマ時代から西洋社会の侵略が始まる。十字軍が始まる。そこまで大きな広がりの中で侵略が形成されていった。そして彼らは今、新しい立場をそこでつくりだそうとしている。

普通、植民地文化をうけた場合には非常に極端に貧しいものしか与えられない。そこでいいものをとろうとした場合には、結局、植民地文化の本もどである本国をまねるよりしかたがない。自分たちの肌色を白くする以外には、高級な文化は獲得できない。そういう状態が第三世界の国々において依然として続いています。そうではなくて違うものをつくりだそうじゃないか。ヨーロッパ社会の影では

三番めに、彼らの解放闘争は、いろいろの可能性を含みこんだ解放闘争だと思います。その中には社会主義的な考え方をする人もいるし、もう少し民族主義的な考え方をとる人もいます。さまざまな考え方がそこにあると思います。いろいろ複数の可能性をもつた解放闘争が今組織されています。それは私たちにとって非常に大きな示唆を与えます。私たちの日本の未来にとって、第三世界の未来にとって、あるいは世界全体の未来にとって、その複数の可能性をほらみながら闘争を形成していくこと、それが一番、人類の可能性として大きな道を与えるように思ひます。

私はその意味で、パレスチナ解放闘争と自分のつながりというものを考えます。私は彼らから学びたいと思ひます。同時にまた、私たちの体験も彼らの闘いに生かしてほしいと思ひます。相互につながりあうことによって、新しい未来ができていくように思ひます。

祝パレスチナ革命16周年!



ひとつのエピソードをお話しします。私は日本人として第三世界のあちこちへ行きます。アラブ諸国へ行くんですが、

たら、私たちにとつても、パレスチナの人々にとつても大きな意味をもつだろう。私はその意味で、パレスチナ解放闘争と連帯する気持ちを感じています。いくつかありますけれども、私が一番感じているのは、その三つのことです。私はこれからも日本人の一人として、自分たちの問題として彼らとつながるといふことを考えたいと思ひます。それは政治的な意味ばかりでなくて、もう少し大きな原理的な意味において、あるいは文化的な意味において、それから闘いの形式において、お互いにつながる自分たちを形成する——それは私たちにとつて必要なことだと思ひます。

日本の作家として行く時もあります。非常に困ったことが起きますね。どんなことかという、日本人かときかれて日本人だと答えるとアラブ諸国での次の質問は決まっているんですね。あなたはナシヨナルですか、日立ですか、ソニーですか、東芝ですか。私はそんなところに所属してないと言つと、次の質問は、本当にあなただけ日本人か。あなたは一体なんだというから、私は作家だと言つたら、ハア、日本に文学ありましたか。顔になりませぬ。それはどこに行つても体験したことなんですよ。

特別号 発売中!

「パレスチナ」特別号 No. 14 January 1981

オリブの樹は燃えた

「パレスチナ」特別号 No. 14 January 1981

9・10月合併号

特集・パレスチナ中東関係書籍・重要論文

一覽「エルサレム法」に対して日本の識者

一〇〇人に問う「国家と女性とパレスチナ」

中山千夏 矢崎泰久 森詠/パレスチナ文化の源流①村松仙太郎/緊急報告 硝煙くすぶるレバノン南部 広河隆一/アウシュビッツ・ヒロシマ・パレスチナ②

11月号

特集・初めてパレスチナ問題にふれる人のために ナチズムとパレスチナ① 板垣雄 青野聡

12月号

特集・中東一九八一年の展望——座談会・激動の中東と日本 板垣雄三 岡倉徹志 坂井定雄/イラン・イラク戦争 石油戦略

そしてパレスチナ問題 森詠/11・29国連パレスチナ・デー特集/各党の対パレスチナ見解/ナチズムとパレスチナ② 板垣雄三/闘うパレスチナの美術家⑤ 鷲見哲彦 悲劇の痕跡 広河隆一/詩 パレスチナ

です。私たちがあなたの解放闘争を支持する、だからアラブをくれ、そういうことは私たちの常態だと思ふんですよ。私たちが何だと言へば、ナシヨナルであり、日立であり、トヨタであり、それがつくっているテレビジョンであり、自動車であり、それ以外の何もでもない。これは人間じゃない、私たちはものです。

よ。文学なんかありません。同時に、アラブは何か。パレスチナを含めてアラブだ。こういう状態で、一体何が起ころうかかと考えると、やっぱり私たちが人民の連帯というのは必要じゃないかと思ひますね。

一九八〇年十二月二十九日、「国連パレスチナ・デー記念の夕べ」スピーチより

小説「オリブの樹は燃えた」

「あるパレスチナ人の歩いた道」

「……ハリスは、あおむけに丘の上に寝て目を閉じた。……カナ山の頂上に落ちてきた夕日を浴びて、オリブの樹は燃えていた……」

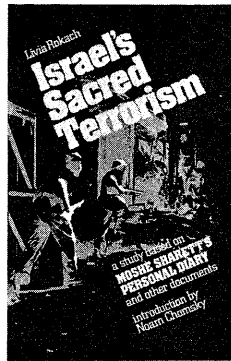
フアトヒ・アブドゥルハミドPLO駐日代表の自伝をもとに詩人でもある作者が、隠されたパレスチナの現代史を背景に描いたドキュメンタリー小説。

三 パレスチナ関係ブック・レビュー/PLO全組織図/石垣綾子さんが語る 祖国を追われた悲しみと怒り/レバノン南部状況/占領地ニュース

〈新刊紹介〉

「イスラエルの神聖なテロ活動」

リヴィア・ロカーチ



イスラエルという国家がパレスチナに「つら」られてから、このシオニスト国家機構を守るために、さまざまな論理と神話が使われてきた。イスラエルの安全、という神話こそ、既成事実の積み重ねによって、パレスチナにおける「ユダヤ国家を保持しようとするため何度でも使われてきたものであった。そのためには国家機関によるテロ活動がくりかえされたが、これこそ「神聖なテロ活動」であった。

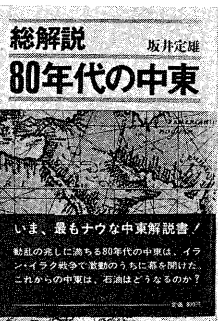
イスラエルの政策を解明するために重要な鍵となるこの日誌の一部でも引用されることにイスラエル当局が反対したため、本書の刊行には大きな障害があつたと前がきで説明されている。筆者のリヴィア・ロカーチは、パレスチナ系イタリア人の女流作家・ジャーナリスト。「黄金のゲット」に反対する「ヘブナム・ジエノサイド」に反対してほか他数の著書があり、イスラエルのパレスチナ占領に関する本も脱稿している。

「総解説 80年代の中東」

坂井定雄著 日刊工業新聞社 八〇〇円

「中東はわれわれ日本人にとってもはや一時的な関心の対象ではなく、しっかりとかわり合うべき、世界でも最も大切な地域になった」「まえがき」との認識から、80

年代のナウな中東問題の解説の試みとしてまとめられた。「動乱の兆しに満ちる中東80」のブローグから「中東と日本」、「中東の国々」、「O.P.



「パレスチナ研究誌」の最新号（一九八〇年秋号）37号は、アメリカの中東政策（シンポジウム）などの特別の読物が加わり、充実したものになっている。パレスチナ研究所がクウェート大学の協力のもとに発行してきた英文季刊研究誌も六三七号を数えた。その主な内容を紹介したい。

「パレスチナ研究誌」紹介

「パレスチナ研究誌」の最新号（一九八〇年秋号）37号は、アメリカの中東政策（シンポジウム）などの特別の読物が加わり、充実したものになっている。パレスチナ研究所がクウェート大学の協力のもとに発行してきた英文季刊研究誌も六三七号を数えた。その主な内容を紹介したい。



「パレスチナ研究誌」の最新号（一九八〇年秋号）37号は、アメリカの中東政策（シンポジウム）などの特別の読物が加わり、充実したものになっている。パレスチナ研究所がクウェート大学の協力のもとに発行してきた英文季刊研究誌も六三七号を数えた。その主な内容を紹介したい。



日パ関係の架橋に

「フィロステイン・びらーでい」も創刊以来早一周年を迎え、カラフルなパンフレットから地味ではあるがパレスチナ・中東問題の専門誌へと脱皮し、着実に充実を重ねてきた。とりわけこの一年間には「フィロ・ユダヤ戦争とパレスチナ」の混迷を深め、パレスチナ問題も一層複雑化しているだけに本誌の存在意義は大きい。前号では早速一九八一年を展望する座談会と森詠氏へのインタビューが組まれ、イスラエル・アラブ戦争とパレスチナ問題がどのようにかわりあっているかに鋭いメスが加えられている。それも単なる「アラブガタ」に終わらず、問題を深く追求する態度がうかがえる点には大いに好感が持たれる。だが次にはアラブ側からの分析も付け加えられることを望

みたい。配布価格の苦慮もあろうが、日本ではまだまだ中東・第三世界に対する認識が不足しているだけに、今後とも日

なごやかな愛をもて共にたたかわん

第二次世界大戦でユダヤ民族が受けた悲劇に同情しない人はいないであろう。しかし、なぜ、彼らにパレスチナの大地を取りあげる権利があるのだろうか。何千年前に、パレスチナの大地を、一時的に支配していたからといって、パレスチナの民を追い出す権利があるのだろうか。もしそのような論理が許されるとしたら、世界は混乱と憎しみと破壊ではないのか。彼らは、歴史を通じて受けてきた数々の迫害と殺戮と悲しみだけを、パレスチナ人に分かつとしていて、分かつ合つのは、喜びと友情であるはずなのに。皮肉なことに、彼らユダヤ民族は、ヒトラーの忠実な生徒であつたわけだ。トイツ人による虐殺でギリシヤ人の植民地政策の後始末を、何の責任もないパレスチナ人が、なぜ、負わなければならないのか。なぜ、白人たちがもつ良心の呵責を、パレスチナ人が負わなければならないのか。それは、きだに、ヨーロッパ、白人中心の価値感が世界を支配しているからだ。アジア・アフリカ

本とパレスチナの関係を探る地道な土台つくりをまい進されることを期待する。（東京、K、ジャーナリスト）

人間たちは、彼らの良心の対象にはならなかった。だから、パレスチナの闘いは、パレスチナだけの闘いではない。これは、われわれの闘争なのだ。かわしき文明は、アジアとアフリカで発生したのだ。ヨーロッパの文化とは、アジアとアフリカで彼らの野蛮な海賊と強奪と奴隷商売とアヘン取引の上に築かれたにすぎない。その近代文明と資本は、アジア・アフリカと南アメリカの黄色い人間、黒い人間たちの血の呻吟と苦痛と絶望の中で育つたのだ。われわれ世界の民と白人中心の天動説との闘争、この闘争は勝利の道しかない。なぜなら、われわれは多数であり、彼らは少数である。正義と公正と神は、われわれにあり、彼らには、傲慢と力と猜疑と恐怖が残されているだけだ。そして、われわれは知っている。歴史は、変遷、発展することを。人の一生にも、また、民族の長い道程にも、多くの起伏があるにしろ、正義と不屈の魂をもつ者には、

マスコミへの宣伝を

前略 終日御多忙の事と推察致してあります。パレスチナ問題の解決なくして中東問題の解決はなし、と言われて久しいですが、この問題に対して一向に解決しようとする努力は関係国には腹立たしく思っております。わが日本国でも、ようやく一部の人たちですが目を向け始め、今回の訪問となって派遣されたことは、誠に喜ばしい事です。多難な前途ではありますが、事態が好転前進するよう願って止みません。僅少ですが、一万円同封致しました。パレスチナ児童基金にでも加えていただければ幸いです。機会ある毎に、マスコミなどに広くつたえてください。パレスチナ国家の、一日も早い独立の日を祈っております。（埼玉 H・H）

ジヤングルの掟

ファトヒ・アブドルハミード

(パレスチナ解放機構駐日代表)

退陣の直前にカーター前米大統領は、キャンプ・デービッド合意により中東和平を促進したことを業績の一つに数えた。この合意が成立した時、西側の新聞は最大級の大見出しでこれを報じ、中東和平が真近かであると予告した。あれから三年めを迎えようとしているのに、和平の兆すら見えない。

この三年間は、世界の世論にとっても、失望の連続だった。中東危機が議題にのぼらなかつた国際会議はなかつたと言えらるほど、今日の国際社会にとって中東問題の解決が緊急の課題であることは、幾度となく強調され、国連はじめ各種の国際会議が何らかの打開の道をきり開くものと期待を寄せてきた。しかし、キャンプ・デービッド方式からは、何らの解決の端緒すらつくり出せなかつた。

当事者のパレスチナ人民にとっては、期待が高まれば高まるほど、度合いも深まらざるを得ないさまさまなレベルで開かれてきた国際会議がうち出した結論とは何なのかを、あらためて検討せざるを得なくなってきた。

キャンプ・デービッド方式の再編と強化はレーガン政権にひきつがれたと言えらるが、そのレベルでの国際会議から期待できるものは無である。なぜなら、ヨルダンのフセイン国王を説得して、和平の過程に組み入れようとした策動が失敗したことによって、唯一の選択がありうるならば、それはパレスチナの自決権を保障する道でしかないことが、いまひとつたび国際世論の前にあきらかになつてきているからである。パレスチナ人民の民族自決権の行使は、一九二〇年の国際連盟の議題にのぼっていた時点から、きわめて当然の権利として保障されるべきものであつた。

それから六〇年以上の歳月が流れた。強者のみが生存する権利を有するというのは、ジヤングルの掟である。国連総会も含めた国際会議の諸決議をもつても、ファシスト国家の中枢に君臨するイスラエル当局者たちの横暴を阻止できないのはイスラエルの当局者たちが、まさにこの「ジヤングルの掟」と言われる弱肉強食の論理にそつてしか対応しよう

としていないためである。しかも、その無法者たちの背後には、アメリカという超大国がいる。

パレスチナ解放の本格的な歩みは、一九六五年の新年と共に踏み出された。それから十六年目を迎えたパレスチナ革命は、アラブ各国をはじめイスラム、非同盟諸国、その他の国々の支援を得ながら、ジヤングルの掟を押しつけてくる勢力と対決してきた。国際舞台で展開される政治劇の指南者は、PLOを無視する策動をますます強めようとしている。エジプトに一定の役割を与えようとしたキャンプ・デービッドの初期の段階がそうであつたし、ヨルダンの同様の役割を果たさせようとする今日の動きもPLOを無視しようとする策動にほかならない。

中東和平を課題にかかげて、パレスチナ人民と世界の世論の期待をつなぎとめようとする国際会議や和平交渉は、ジヤングルの掟の支配を長びかせるために超大国があやつる、国際政治ゲームの重要なトリックとなつている。十七年めに入つた祖国パレスチナと人間の解放をめざす自由への行進は、解放運動の犠牲者たちが血であがなつた道標にそつて、あらゆる苦難をのりこえて進む。強者が支配し、強者のみが生存する権利をもつというジヤングルの法則をくつがすために。

アラファト議長は語る



「パレスチナ解放のたたかいが、中東の政治関係を決定する中心的な要素をなしている。他の戦闘があちこちで勃発し、パレスチナのたたかいから関心がそらされたりすることはあるが、世界の世論の注目は、すぐさま、この偉大なたたかいにひきまざる。なぜなら、われわれは、アラブ民族の富を略奪し、アラブ

の経済的・財的資源を完全に枯渇状態におとし入れようとする帝国主義勢力の野望とたたかっているからだ。中東とアラブ世界の政治関係を決定する上で、重要

かつ不可欠の要素となつているパレスチナのたたかいを除去しようとするさまじまの策動がある。最近イスラエル軍参謀長がパレスチナの民族解放運動の絶滅を宣言したが、その意図は、洗礼者ヨハネの首をほしがつたサロメの欲望にも似たものであり、パレスチナ人民の首をアメリカの主人どもへ貢物にしようとするものである。…中東和平をめぐる、依然として多くの選択が可能であるかのよう

に考えられているが、パレスチナ人民がたたかひによって選びとつた道以外に中

東に真の平和をもたらすものはない」

——パレスチナ革命十周年記念演説より
(一九八二年一月一日、ベイルート)

「パレスチナ革命は、アラブ世界における真に根本的でも戦術的変革をもたらす勢力を代表するものである。かつてベトナムのボー・グエン・ザップ将軍は、パレスチナ革命が今世紀における革命の中で最も重要な意味をもつものであると考へていると、彼が国防相の時に私に語つたことがあるが、それは、われわれが強大な敵の包圍攻撃の中で、多くの味方の支援を得てたたかっている点に注目したためである。

PLOがアメリカにとっては、中東とアラブ世界における困難な基本的要因となつていなければ、大統領に就任するレーガンがPLOを問題にする発言をすることはなかつたであろう。われわれが新たな緊迫した情勢のもとで、いわゆる総動員のアピールを行なつたのは七月のことであつた。そして、十一月になつて、これに言及した(アメリカ側からの)発言がなされた。このことは、イスラエル側に新たな行動を開始してよいというゴ—サインが既に与えられているというこ

PLOの生産福祉機関サメッドの代表

アハメッド・アブ・アラ氏

パレスチナ革命は、一般に知られていないように軍事闘争だけの革命ではなく、PLOの組織一つを見ても分かるように、経済、政治、社会福祉その他全般にわたる分野で革命を進めている。そこで本誌ではまだ余り知られていないPLOの活動を紹介します。今号のグラビアでもサメッド(SAMED)を取り上げたが、その代表のアブ・アラ氏にインタビューしたのでここに掲載する。

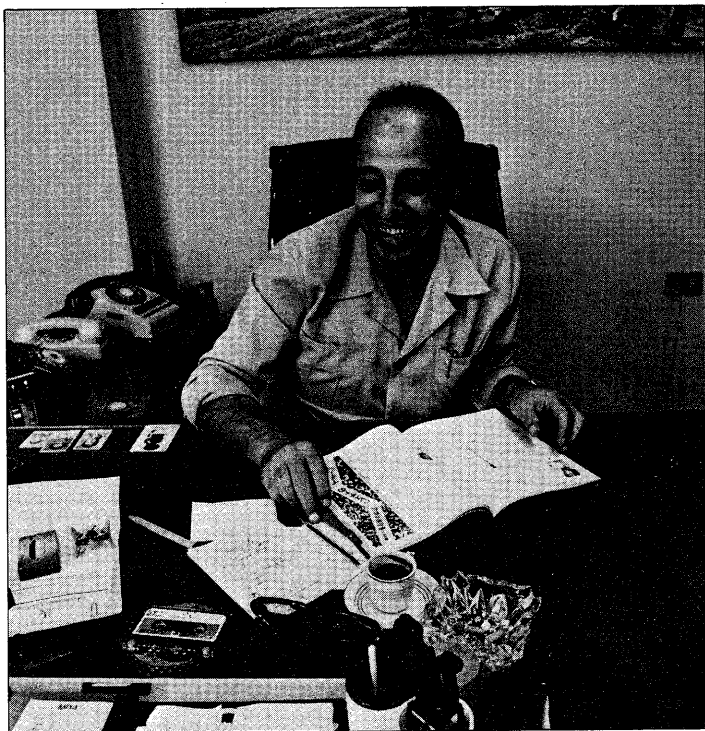
——まずサメッドの由来についてお話を聞きますか。

アブ・アラ氏 サメッドはPLOの生産機構として一九七〇年にヨルダンで設立されました。当初の目的は、パレスチナ革命に殉じた人々の子供たちが、生産技術を身につけられるようにというもので、トレーニングセンター中心でした。ヨルダンに私たちは五つの小さな工房を設立しました。しかしそれもその年のヨルダン内戦で破壊され、私たちはサメッドの活動をレバノンで一からやり直さなければならなかったのです。

私たちの闘いは軍事面だけでなく、全分野に及び、私たちの革命が勝利を収めるまで、継続する必要があります。

レバノンで、私たちは再び犠牲者の子供たちのためのトレーニング・センターを設け、手工芸品、衣服工房など非常に小さなスケールから始めました。

その後私たちは多くの試験に会いました。レバノン当局の介入や、内戦があり、その間ほとんどの会社や工場は閉鎖され、ベイルートは二つに分割され、空港も港



もストップしました。レバノンの多くの人は外国に移りましたが、パレスチナ人を受け入れる国はありません。そこで私たちは自らの手でパレスチナ人に食糧を配給する必要がでてきたのです。

「すべてのキャンプに少くとも一つの工場を」が私たちの課題となりました。一人でも多くのパレスチナ人を雇用し、一人でも多くの人に衣服と靴と食糧とを支給しなければなりません。これらのことは私たちが自分の国を持つておれば、ずっとたやすいことになったでしょう。それでも現在レバノンを中心に三十三の工場と工場を持ち、三五〇〇人の労働者が

働いています。大きなものでは一五〇人の労働者が働く家具工場があります。

——衣料品や靴や家具のほかに、どのような物を生産しているのですか。

アブ・アラ氏 布詰を中心とする食料品、映画生産、カラー・フィルムの大きなラボ、農業プラントなどがあります。

——土地を奪われたパレスチナ人としては、農業生産は大変でしょう。

アブ・アラ氏 ええ、ですからソマリア、スーダン、ウガンダ、ギニア・コナクリ、ギニア・ビサウなどのアフリカ諸国に、私たちは農園をつくりました。今年にはマダガスカルでも生産を開始します。

またシリアのダマスカスには大養鶏場があります。それに占領下のパレスチナでも、私たちはイスラエル当局の眼をくぐって活動を行なっています。

——運営はどのようになっているのですか。

アブ・アラ氏 各生産体は、労働者自身によって選出される革命委員会によって運営され、その代表はサメッドの中央運営委員会のメンバーになります。革命委員会は個々の労働者の必要なものは何かを調べ、労働者間でパレスチナ問題や革命の方向、国際状況についての学習会を組織し、工場の運営に責任を持ちます。

——サメッドの物産展を日本で催すことは可能でしょうか。

アブ・アラ氏 サメッドではパレスチナ民族衣装のファッション・ショーを兼ねた物産展を催してきましたが、国から国へ回り、ソ連やチェコなど社会主義諸国ではほとんど終り、西欧でも半数の国で催されました。今年にはラテン・アメリカ諸国を巡回する予定で、各国からの引き合いも多く来ているため、日本でやる時は、少くとも一年前に打ち合わせをする必要があります。でもそれほど大がかりでない民族衣装展でしたら、いつでも可能です。

——サメッドのスローガンを教えてください。

アブ・アラ氏 「労働者は先ず人間であり、そして戦士、未来である」というものです。

——どうもありがとうございます。

語録

H.G.ウェルズ



二千年の間、存在したためしもないユダヤ国家を再建するのが妥当だというのなら、あと一千年さかのぼり、カナン人たちの国を再建してはどうか。カナン人たちは、ユダヤ人たちとちがって、今でもカナンの地にはいないか。

ハーバード・ジョージ・ウェルズ

(一八六六—一九四六)

イギリスの小説家・文明批評家。一八六六年、ケントの貧しい商家に生まれ、独学で理学士となる。三〇才ころから科学教科書を出し文筆生活に入り、空想科学小説を多く書いた。

一九〇二年に社会主義者の団体のフェビアン協会に参加、やがて第一次大戦にあり、世界の前途が人類の未来に向けられ、知的国際連盟の構想を具体化するため「世界文化史大系」を発表して好評を得た。パレスチナ問題についての発言は、第二次大戦前にユダヤ国家が必要かどうかをめぐる論争の中でなされたもの。著書は「透明人間」「タイム・マシン」「人間の運命」「世界史概観」「自叙伝」など。

不変の愛ゆえに

タウフィックザヤード(江里詩也 訳)

祖国の大地の
一寸たりとも奴らに渡すまいと
わたしは自分の歯を使っても
祖国の土を守ってゆく
金銀が引き換えだと言われても
譲れぬもの
それは わが祖国の母なる大地
たどえ奴らが わが腹わたをえぐり出し
その腹わたで わたしを絞りにしようとも
わたしは屈しない
深き愛はわたしを捕える
故郷のわが家の生け垣
幼き日に見た庭の朝露
たわな花をつけたユリ
その不変の愛のゆえに
わたしは屈しない
あらゆる苦難や試練も
わたしを挫折させることはない
わたしは 自分の歯を使っても
祖国の土を守ってゆく

タウフィック・ザヤード

1932年ナザレに生まれたパレスチナの代表的詩人の一人。モスクワに留学しロシア文学を研究。ナザレ市長でもある。



ナスル・ソウミ

フィラスティン・びらーでい 2月号

1981年2月20日発行

FILASTIN BILADI FEB. 1981 NO. 15

編集発行人/ファトヒ・アブドルハミード

Edited & Published by Fathi Abdul-Hamid, Director

発行所/PLO駐日代表事務所

PLC Office, Japan; TELEX: J27524 FATHI

〒153 東京都目黒区青葉台1-4-8 Tel. (03)463-2840

1-4-8 Aobadai, Meguro-ku, TOKYO, Japan, 153

印刷所/株式会社 太平印刷社

●購読料、支援金のお振込みは三和銀行渋谷支店 普通預金口座 345-125793 口座名は、「フィラスティン・ビラーディ」です。